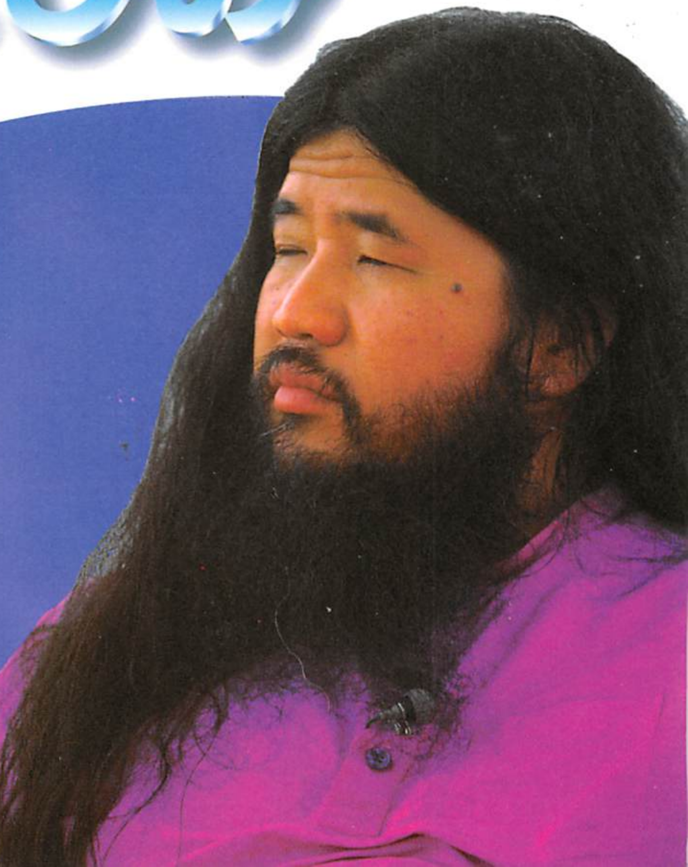
迷妄の魂よ、大悪業の恐怖を知れ

亡国日本の悲しみ

真理の御魂
最聖麻原彰晃尊師



弟子たちに対する国家の弾圧は、果たしてこれから迎えるであろうハルマゲドンにおいて、日本をどのような方向に導くのか、わたしはそれを考えると非常に悲しく、そして哀れみの心が出てくるのである。

（本文より）



真理の御魂（みたま） 最聖 麻原彰晃尊師プロフィール

仏教・ヨーガの修行に取り組むこと約八年。一九八六年ヒマラヤにて最終解脱を果たす。その後も厳しい大乗の修行を続けるとともに、多くの弟子を指導し高いステージへと導く。その瞑想ステージは、チベット仏教の成就者から「イェシェ」（最高の智慧を得た段階、完全なる絶対なる神の叡智）のステージであると称えられたのをはじめとして、インド・スリランカ・ブータン等伝統的な仏教国の聖者方に絶賛される。瞑想によって得た神秘力と解脱者の叡智によって、宗教のみならず科学・医学・音楽・文筆・翻訳・教育等においても専門家以上の力を発揮、危機の時代の新たな宗教家として内外から注目を集める。

また、各国の聖者方との交流を通じて、仏教と平和を守る活動を積極的に展開。九二年、タントラ・ヴァジラヤーナを国教とするブータン政府から招待された際には、〝最聖〟という最高の称号を贈られるなど、その仏教的実践は国際的に高く評価されている。

『イニシエーション』『生死を超える』『マハーヤーナ・スートラ』『タターガタ・アビダンマ』等著書多数。尊師の神秘力の中でも予言は特に特徴的なものであり、ラジオ放送や出版物を通じて公表してきた未来予言が次々に成就。未来を見通す力のただならぬところを知らしめている。

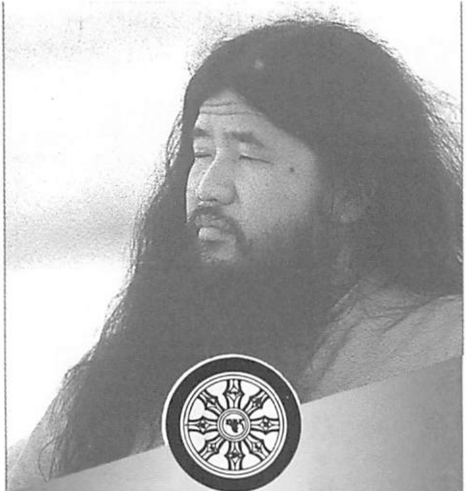
迷妄の魂よ、大悪業の恐怖を知れ

亡国日本の悲しみ

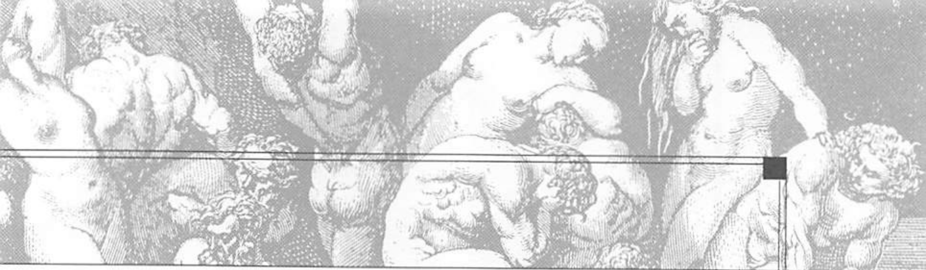
真理の御魂(みたま)
最聖麻原彰晃尊師







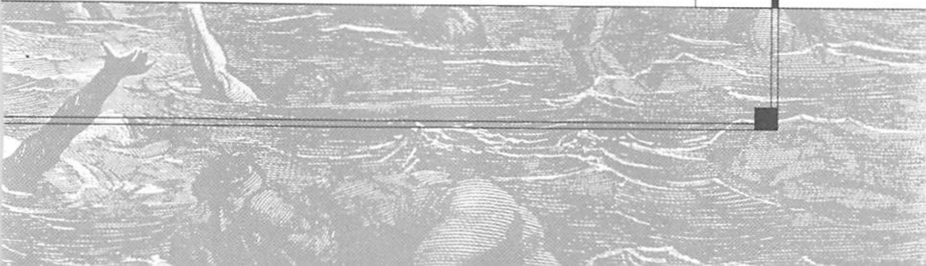
亡国日本の悲しみ



CONTENTS

亡国日本の悲しみ

迷妄の魂よ、大悪業の恐怖を知れ





第一章 神々の怒り

わたしは今、闘病生活を送っている。ウィルスと細菌の中間体であるQ熱リケッチアと呼ばれる猛毒な細菌兵器によって体をむしばまれ、そして、それと戦っているのである。このQ熱リケッチアは、肝臓、脾臓、腎臓等を食い荒らし、心内膜炎に至らせる。そして、心臓にイボができ、最後にこのイボが血中に飛んで血栓を起こし、死ぬのである。すでにわたしの場合、イボの一つが飛び、左前頭葉に血栓ができている。

この重大な病の原因は、長いこと不明のままだった。しかし、昨年の十二月に出家した生物を専攻する優秀な科学者が、その後の自分の症状から、これが細菌ウィルス兵器に属するQ熱リケッチアであることを突き止めた。わたしだけでなく、多くの出家修行者が感染していたのである。

我々は血清学的検査を行なってみたが、検査を行なったうちの四六パーセントにおいて抗体が陽性だった。一般健康人の場合の陽性率が三・三パーセントであることを考えると信じられないほどの高率である。

そして、治療が始まった。

わたしは今ではこのQ熱リケッチアは米軍機によってばらまかれたものであると確信し

ている。
もともと瞑想家のエネルギーの流れは、抗生物質あるいは現代医学で使われる薬を使うことによって、非常に阻害される。しかし、これを使わなければ死は目前に迫っているのである。
以上述べたように、わたしは闘病中の身である。したがって、今回の警察の二千五百人を動員しての強制捜査、しかも自衛隊に、災害派遣名目で完全武装の治安出動まで要請していたという大がかりな弾圧に対して、わたしは沈黙を続けようと考えていた。しかし相次ぐデッチ上げ、違法捜査、不当逮捕、意図的な警察誤報、世論を操作する報道規制等、真理に反する法則がますます蔓延していく現状を憂慮し、逆に沈黙しない方が衆生の利益であるとの結論に達した。そしてこの本の出版に踏み切ったのである。
わたしは今回の強制捜査および国家権力の、憲法を無視し法律を度外視した行為に対しても、三大紙を中心に、雑誌以下の記事内容を掲載し報道するマスコミのオウムに対するバッシングに対しても、怒りを覚えてはいない。それよりむしろ哀れみの心が生起するのである。なぜ哀れみの心が生起するのか。それはもし、このオウム真理教に対するバッシ

ングをしている人の中に、ヒンドゥー教徒や、あるいは仏教徒がいるなら、その中に説かれている聖典や仏典の教えの一節を見るだけで、ぎょっとするようなことを自分たちが行なっていることに気づかざるを得ないからである。

もともと現世利益と、そして仏教の説く本質的な利益とは相反するものである。この現世利益と仏教が説き明かす真実の利益の間には、大きな隔たりが存在する。まずわたしは、次の経典を皆さんに示すことによって、この第一章の終わりとしたいと思う。

オウム真理教・仏典訳語の基礎知識

○**サキャ神賢**＝お釈迦様のこと。「釈迦牟尼」とは「サキャ族の神のように賢い方」というのが原義。ゴータマ（牛王）とも。

○**真理勝者**＝如来（タターガタ）の原義を正確に表わした言葉。

○**世尊**（バガヴァント）＝世の中で最も尊い方という尊称。

○**向煩悩滅尽多学男**＝比丘（ビック）。出家修行者の中でも煩悩滅尽に向かい、真理の法則を多く学んでいる優れた修行者を指す。

○**煩悩破壊**＝いわゆる「涅槃」（ニルヴァーナ）とは、自らの煩悩を破壊し、根こそぎにしてしまうこと。

○**救済計画**＝しっかりと修行に励み、自分自身、そしてすべての魂が絶対の真理を体得し、煩悩破壊に至ることができるようにすること。決して集団自殺を意味することはない。

○**シヴァ大神**＝パーリ語で「シヴァ」とは、超越した最高の意識を指す。ヒンドゥー教のシヴァ神は、シヴァ大神の化身の一つにすぎない。なお、破壊神とされるシヴァ大神が破壊するものは、あくまでもわたしたちの煩悩であり、無差別に生命を奪うものではない。

○**悪魔**＝第六天魔王ともいうマーラは破滅天と訳される。これをシヴァ神と混同するのは明らかに誤りである。破滅天は、わたしたちを「煩悩を満たす歓び」に縛りつけ、煩悩破壊から遠ざける。



ダンダキー王国最期の日

輪廻転生談五二二「サラバンガ輪廻転生談」より
原訳：オウム真理教パーリ聖典翻訳チーム

❖一　ジョーティパーラの弓の腕前

それははるか昔。

バーラーナシー（剣の城塞）という名の都があった。その一辺の長さが百数十キロに及ぶ巨大な都市である。

この都市の武器がすべて燃え尽きるという事件が起こった。国王に祭司がその原因を説明する。

「実は、わたくしの息子が生まれたのです。そのとき、ちょうどわたくしは外におりまして、星座の位置を見ました。占星学的に申しますと……」

「そのような星の配置のときに生まれた子供には何があるのか」

「この子は、このバラリンゴの大陸における最上の弓術師になるでありましょう」

子供はジョーティパーラと名付けられた。この「光の守護者」という意味の名前は、誕生の時にバーラーナシー市中の武器が燃え上がったことにちなんだものである。

ジョーティパーラはすくすくと育った。

* * *

「これほど上達の早い弟子は初めてじゃな」

「ありがとうございます」

ジョーティパーラは頭を下げた。

ここは技芸と学識に満ちあふれた文化の都タッカシラー。十六歳になったジョーティパーラはこの学芸の都にやってきて、有名な師のもとで様々な技芸を教わったのである。

素晴らしい星のもとに生まれたジョーティパーラは、わずか七日ですべての技芸を習得してしまった。

「素晴らしい、ジョーティパーラ。免許皆伝じゃ。これを受け取ってくれ」

師は、伝家の宝刀を取り出し、ジョーティパーラに渡した。

「よろしいのですか」

「わしは引退する。受け取ってもらいたい物はこれだけではないぞ」

師はさらに、雄羊の角を継いでつくった弓、矢筒、そして鎧兜、さらにターバンまで授けたのだ。

「我が弟子ジョーティパーラよ。今後は他の弟子たちをお前が教えなさい」

この高名な師はジョーティパーラに五百人の弟子まで預けてしまったのである。彼は素晴らしい武具の一式と五百人の弟子を伴ってバーラーナシー市へ戻った。

国王は彼を雇い、彼は毎日金千個の俸禄を得る弓術師として宮廷に出入りを許されることになった。

* * *

「あのジョーティパーラとかいう若造は何なんだ」
面白くないのは大臣たちである。何しろ、十六歳の小僧がいきなり毎日千金の高禄で迎えられたのだ。
「我々は、あの若造が弓を射る場面を見たこともない。それなのに陛下は、占星学のお告げだか何だか知らないが、千金も与えておられる」
「あの若造に、千金に値する弓の腕があるかどうか、確かめてみてはどうだろうか」
「よし、それがいい」
国王を通じて大臣たちの言葉を聞いた主席祭司は、息子ジョーティパーラに尋ねた。
「大臣たちが、お前の腕前を試したがっている。どうする、ジョーティパーラ」
「お父さん。ご心配はいりません。受けてたちましょう。七日後、国王陛下と大臣たちの前で、タッカシラーで習得してきた技能をご覧に入れましょう。そこで、お父さん、陛下に伝えていただけますか——七日後、国中の弓術師を会場に集めていただくように」

＊　＊　＊

集まった弓術師は六万人にのぼった。会場は宮廷の中庭。大観衆の中、国王は装飾の限りを尽くした豪華な長椅子を用意し、ゆっくりと座った。
「ジョーティパーラを呼べ」
国王の一言で、ジョーティパーラの登場。
「ジョーティパーラよ、腕前を見せよ」
「はっ、かしこまりました」
彼が手招きすると、ジョーティパーラは素早く着替え、観衆の間から驚嘆の声が上がった。

それは歓声に変わり、弓術師たちは飛び上がり、手を打ちならし、若き弓術師を迎えたのである。
ジョーティパーラは、鎧・甲冑に身を固め、頭にターバンを巻き、雄羊の角でできた弓を持ち、そこにサンゴ色の弦をつけ、矢筒を背に背負い、剣を左腰に据えている。金剛のやじりのついた箭を指先で回しながら登場したジョーティパーラの姿は、他を圧倒する。
「ジョーティパーラよ、どのような技芸を見せてくれるのか」
国王に答えて、
「愛欲神のごとき偉大なる大王陛下。陛下の弓術師たちの中から、四名を選んでいただきたいのですが」
しばらくして、準備が整った。
国王の中庭の中央に設置された特設会場。四隅に一人ずつ、選ばれた弓術師が立っている。それぞれの弓術師に与えられた矢は二万ずつ。
特設会場の真ん中に、ジョーティパーラはすっくと立ち、国王に呼びかけた。
「大王陛下、この四名の弓術師たちに命じて、一斉に、わたしを射させてください。放たれた矢を、わたしは防ぎましょう」
「よし、わかった。——四名の弓術師たちよ、ジョーティパーラを射て！」
だが、弓術師たちはためらった。一人がひざまずいて大王に言う。
「陛下、わたしたちは瞬間に貫き、尻尾の毛すら射抜き、響きを聞いて、声を聞いて射る弓術師です。狙いを外すことはあり得ません。一方、このジョーティパーラは前途有望な若き弓術師。わたしたちには彼を狙うことはできません」
だが、ジョーティパーラはそれを遮って、堂々とした声で宣言した。

「もしできるというのなら、わたしを貫き通してみてください！」
挑戦を受けて、四人の弓術師は決心する。合図と同時に、彼らは次々と矢を放った。
矢が四方から次々に迫る。
それをジョーティパーラは次々に射返し、跳ね返し、射落とした。ただの一本の矢も身を貫かせることなく、矢で完全に防ぎきる。落ちた矢は彼の周りにうずたかく積もり、その身の周りに壁を築き上げていく。
矢がもう飛んでこなくなった。一人三万本、総計十二万本の矢がすべて射られたことがわかり、ジョーティパーラは周りを見回す。積み上げられた矢が彼の周りに部屋を作ったようになっていた。えいっ、とばかりにこの壁を飛び越え、ジョーティパーラは国王の御前にひざまずく。
「いいぞ、ジョーティパーラ！」
「素晴らしい！」
観衆たちは歓声を上げ、飛んだり跳ねたり、拍手したりし、喜びあって大騒ぎ。衣服や装飾品をジョーティパーラに投げ与えた。そうして彼に観衆が与えた褒美(ほうび)の品は、合計するとなんと一億八千万に達したのである。
国王は満足し、若き英雄に尋ねる。
「今のはなんという技だ？」
「『矢の防御』という技でございます」
「他にこのような技を習得している者はおるのか？」
「陛下、このバラリンゴ大陸全域において、この技を習得した者はわたし以外におりません」
ほう、と国王は目を細め、
「よし、では続いて見せてくれ」
「陛下、今、四人の弓術師たちは四隅にいたわけですが、十二万本の矢を使ってもわたしを貫

き通すことができませんでした。しかし、今度はわたしが射ましょう。彼らが四隅にとどまっていれば、わたしは一本の矢で四人とも貫いてご覧にいれます」

四人はあわてて逃げ出した。

そこでジョーティパーラは弓術師たちのかわりにバナナの木を四本立てた。さらに、矢の先に赤い糸を結ぶ。

ジョーティパーラは一本のバナナの木を狙いすましてヒョウと射る。矢は一本目を貫いた。次に第二のバナナの木へ向かう。第三の木を射抜き、さらに第四のバナナの木を通った。そして最初の一本目の木を再び通し、ジョーティパーラの手に戻ってきたのだ。

「おー！ さすがはジョーティパーラ！」

「何という腕前だ！」

さらに観客席は騒然とする。これはまさに神技と言って差し支えない。

その後もジョーティパーラはさまざまな弓の技を見せた。

＊ ＊ ＊

翌日、ジョーティパーラはかなり早く目覚めた。まだ夜中である。いつもより睡眠時間は短いが、それでも今日はもう眠る気にはなれなかった。彼には、今、考えることがあったのだ。

ベッドの真ん中に座って、彼は弓術大会の最後に国王の言った言葉を思い出していた。それこそ、ジョーティパーラを考え込ませる原因となったものである。

「ジョーティパーラよ、素晴らしい腕前だ。明日、余はそなたに将軍の位を授けよう」

彼は将軍の位について、じっと考えた。この

地位を得たら、どういうことになるだろうか。

「わたしの習得した技には、最初からすでに死があり、続いて煩悩の使用、そして激苦地獄において輪廻することが最後に待っているではないか」

　ジョーティパーラはその行く末をしっかりと推察した。

「そもそも、将軍というのは殺生――他の生命を奪うこと――が仕事のようなものだ。このようなことを受け入れることができようか」

　さらに将軍の地位によって得られるものが目の前に浮かぶ。

「将軍の地位を得たならば、大いなる権力を手に入れることになる。そして、妻を多く得、息子たち、娘たちが数多く生まれることだろう。しかし、それによってわたしの煩悩の対象が増え、満ちていく。わたしが執着する対象がどんどん増大していく。そうなってしまったら、わたしは煩悩を抑制できるだろうか。そういったものを捨て去ることができるだろうか」

　ジョーティパーラは腕を組んだ。

「殺生を仕事とし、煩悩を満たし続けて、わたしは怠惰になるだろう。それはまさに激苦地獄において輪廻する原因となる。――今、わたしは家庭生活を捨てるべきだ」

　夜が明ければ将軍の地位を与えられることになっている若者は、ベッドから飛び降りた。

「よし、家庭生活を捨て、一人で森に入り、尊い人々が行なうという禁欲生活の中に出家するぞ！」

❖二　聖者サラバンガと出家

大いなる都バーラーナシーは、大騒ぎとなった。それも当然である。将軍の地位を与えられようとしていた若者が突然いなくなってしまったのだから。

あの弓術大会のあと、ジョーティパーラは褒賞(ほうしょう)として得た一億八千万の財産を「わたしには必要ない」と言って、人々に分け与えていた。そして、従者たちとともに水浴し、あご髭(ひげ)を整え、装飾品で身を飾ったのだ。その後、極上の食べ物を食べて寝室に入った……ここまでは確かである。

それなのに、ジョーティパーラは夜明けにはもうそこにいなかったのである。父母をはじめとして、友人たちや親族たちは泣き叫びながら彼を探し回った。だが、その後の足どりはなかなかつかめなかった。

＊　＊　＊

「主席祭司殿、お話がございます」

ジョーティパーラの両親のもとへ訪れたのは、ある林務官だった。彼はゴーダーヴァリー河畔にあるカヴィッタ林からやってきた。

「ジョーティパーラ殿と思われる方を、カヴィッタ林で見ました」

「本当か!」

「カヴィッタ林の中には、人里離れた住まいが作られており、そこに一人が住んでおります。彼の顔は、わたしが知る限り、ジョーティパーラ殿のようでありました」

「よし、わかった。ここで待っていてくれ」

主席祭司は王宮へ走る。
非礼を承知の上で、ジョーティパーラの父は国王に謁見を求めた。
「偉大なる大王陛下、ジョーティパーラの行方がわかりました！」
「そうか！……では、彼を訪ねようではないか。なぜ将軍の位を捨ててそのようなところにおるのか、問いたださねばならぬからな」

＊　＊　＊

ジョーティパーラを訪ねる一行は、大従者団を率いることになった。国王、主席祭司、そして従者たち。それは王宮そのものが移動するかのごとき大行進であった。
林務官の道案内で、この一群はゴーダーヴァリー河の岸に到着した。その眼前には三十数キロにわたるカヴィッタ林が広がる。
「こんなところにいるのか……」
一行が林を見上げたその瞬間、若者の姿が出現した。
「ジョーティパーラだ！」
「彼に相違ない！」
だが、彼らは喜びと同時に、驚愕する運命にあった。ジョーティパーラは、なんと空中に浮かんで座っていたのである。
出家修行者となった若者は、国王、両親をはじめとする一行に語りかけ、そして林の中の住まいに連れていった。

＊　＊　＊

「そういうわけでわたしは出家することにしたのです。だれにも気づかれないように宮殿から



降り、最上の門から出て、一人でこの林に入りました」

ジョーティパーラは、一同を前にして出家の経緯を語った。

「この林の中には、一足の幅の道がありました。これは出家者たちの住まいがある証拠です。そこでわたしはその道をたどっていきました。そうして、たどり着いたのはまさにここ」

この小屋は枝や葉で作られたもので、まさに出家者が住むべきところであった。素材は粗末だが、非常に頑丈にできており、実用的な建物である。

「ところが、ここにはだれもいませんでした。だれもいないのに、出家生活における様々な必需品がきちんとそろっているのです。これはどうしたことか。わたしは少し考えました」

だれもがジョーティパーラの話に耳を傾けている。

「おそらく、愛欲神の王である有能神が、わたしの出家に気づいたのでしょう。そこで、有能神の息子ヴィッサカンマがこの小屋を用意してくれたのだと思います」

ヴィッサカンマは、偉大な出家者が出るときに、その住まいと必需品を用意する神である。有能神は、ジョーティパーラの出家が祝福されたものであると見抜いたのだろう。

そこに用意されていたのは、まさに出家に必要なものすべてであった。それはジョーティパーラの姿を見ればわかる。今は、家にいたころの外衣を着ていない。染められた樹皮の服。一方の肩にはカモシカの皮革の真皮。結んだ髪を丸く縛り、百リットルの荷物を下げた天秤棒を肩に据え、ステッキを持っている。それらすべてが、ここに用意されていたのだ。

「この小屋の側には、歩く場所も用意されていました。わたしはそこを往復し、歩く修行を行ないました。そして十全境の瞑想と呼ばれる瞑想の準備を整え、瞑想したのです」

今、ジョーティパーラの姿は光り輝くように見えた。出家修行者は光が強まる。

「瞑想に入って七日目、わたしは八つの生起のサマディ（瞑想の究極状態）を生じさせ、そして五神通を身につけたのでした」

人々はジョーティパーラを仰ぎ見た。もう彼は単なる若者ではない。単なる苦行者でもない。素晴らしい力を身につけた、偉大なる賢者なのだ。実際、彼は空中に浮かんだまま語っていた。

「それから、わたしは食物を集めるために歩き回りました。食物は、野生の根、木の実です。そして一人で過ごしてきたのです」

＊　＊　＊

少し前まで弓術師の若者だったジョーティパーラは、今、聖なる者として、愛欲に関する過患（わざわい、差し障り）を説明し、真理の法則を指し示した。

「聖者よ、余の言葉を聞いてくれるか」

「何でございましょう、大王陛下」

「余は出家する！」

国王の宣言に続いて、大きなざわめきが起こった。それは、国王の出家に驚く声ではない。国王の出家を押し止めようというのでもない。まさに、その場に居合わせたすべての者が、国王に遅れるまじと先を争って出家しようとする声であった。

彼らは出家の意義を理解し、そして在家生活の不幸を認識し、出家に至ったのである。

ジョーティパーラは出家集団に取り囲まれて、このカヴィッタ林の修行場で暮らすことになったのだった。

＊　＊　＊

出家修行者たちがカヴィッタ林に住んでいることは、やがてバラリンゴの大陸すべてに知れ渡るようになった。そして、他の国々の国王たちが国民たちとともに聖者を訪ねてきた。

真理の法則を知って感銘を受けた国王たちは続々と出家し、やがて数千人の大集団となったのである。

ジョーティパーラは、サラバンガ師と呼ばれるようになった。その名は「矢（サラ）を分解（バンガ）する者」という意味になる。サラバンガ師は、出家者たちに法則を示した。感覚の喜びを与えてくれるものに対して意識を集中させている者、害をなそうという心を常に働かせている者、残酷なことを熟考する者たちのところへ師は行き、そして宙に浮いたまま法則を説く。そして、十全境の瞑想の準備を整えさせるのだった。

やがて、サラバンガ師には素晴らしい七人の内弟子が誕生した。彼らは師の教えを守り、生起のサマディを生じさせ、成就に達した者たちである。その名はサーリッサラ、メンディッサラ、パッバタ、カーラデーヴァラ、キサヴァッチャ、アヌシッサ、ナーラダであった。

＊　＊　＊

サラバンガ師はある日、弟子のサーリッサラを呼んだ。

「出家修行者が増えたために、このカヴィッタ

林の住まいは狭くなってしまった」
「そのとおりです、師よ。これ以上多くの人が住むわけにはいきません」
「そこでだ、サーリッサラ。君は、数千人ほど連れて、別の場所に移りなさい」
「どこへ参りましょうか」
「チャンダパッジョータ王国に、ランバチューラカという町がある。その近くに住むことができるはずだ」
サーリッサラはその言葉に従い、ランバチューラカ市近郊へ数千人を率いて行った。だが、カヴィッタ林にはさらに出家希望者が詰めかけ、あっという間にまた狭くなってしまったのである。
次に呼ばれたのはメンディッサラだった。彼はスラッタ地方のサートーディカー河の岸辺に移住した。それでもカヴィッタ林はまたすぐに出家者で満ちあふれた。
三人目の弟子はパッバタである。彼は大森林アンジャナ山に移住した。
四人目はカーラデーヴァラ。数千人を率いて、アヴァンティ王国のガナセーラ山に移住することになった。
カヴィッタ林と合わせて五つの場所で、それぞれ数千人の出家修行者の集団ができたのである。

＊　＊　＊

後に残った内弟子は三人である。
ナーラダは、中央のアランジャラ山岳へと向かい、そこで過ごした。また、アヌシッサは師サラバンガのもとにとどまった。
ここで最後の一人、キサヴァッチャが物語の

中心となる。しばらく、カヴィッタ林のサラバンガ師を離れ、彼の移り住んだダンダキー国に舞台を移すことにしよう。

❖三　ダンダキー国の滅亡

一人の女が遊戯地を歩いていた。美しい庭園の中で、彼女の表情は曇っている。この女は、国王の契約愛人だった。

だった、というのは、今、まさに彼女はその地位から解任されたからである。悲しみに満ちた彼女は方々を歩き回っていた。

「あれ、あの人は何者かしら」

遊戯地の隅に座っている人がいる。女はそこに近づいていった。

それがまさに苦行者キサヴァッチャであった。瞑想にふける苦行者を見て、女は目をそむけた。

「これは不吉な者に違いないわ。この者の体につばをかけ、自分は水浴してけがれを落として帰ることにしましょう」

女は爪楊枝（つまようじ）を噛（か）んだ。そして、つばを苦行者の髪の中に吐いたのである。さらに爪楊枝も苦行者の頭に投げつけた。そして自分は頭を洗って帰ったのである。

＊　＊　＊

それから間もなく、彼女は契約愛人の地位を取り戻すことができた。国王が彼女を心に留めていたからだ。

その直後、国王は主席祭司を解任したのである。主席祭司は契約愛人のもとを訪ねた。

「元主席祭司さん、どうなさったの？」
主席祭司だった男は頭を深々と下げる。
「頼む、教えてくれ。あなたは一度は地位を失いながら、今は元の地位に戻っている。どうやって地位を回復することができたのか。ぜひ教えてくれ」
「どうしても知りたい？」
「頼む」
「実はね、国王陛下の遊戯地に不吉な者がいたの。その男の体につばをかけたら、あたしは栄光を得たのよ。あなたもそうするといいわ」
元主席祭司は希望を胸に遊戯地へ向かった。そこに苦行者キサヴァッチャがいるのを認め、彼は言われたとおりにした。
そして、見事に主席祭司の地位に返り咲いたのである。

＊　＊　＊

それからしばらくして、ダンダキー王国の国境で紛争が発生した。
「国王陛下、陛下は勝利と敗北のどちらをお望みになられますか？」
国王が軍隊を率いて出陣するとき、主席祭司はダンダキー国王に話しかけた。
「決まっておる。勝利だ」
「では、必勝のまじないがございます」
「何だ、申してみよ」
「はっ、実は国王の遊戯地に、不吉な者が住んでおります。かの者の体につばを吐きかけるならば、必ずや勝利を得られましょうぞ」
国王はその言葉を信用し、軍隊を連れて遊戯地に行った。国王と兵士たちは苦行者キサヴァッチャのところへ行き、髪の中へつばを吐き、爪

楊枝を投げつけて、自分たちの頭を洗ったのである。
　国王と軍勢の全員がつばを吐き、爪楊枝を投げ、そして去った後へ、この国の将軍がやってきた。彼はこの国で唯一、修行者に対する尊敬の念を持ち合わせていたのである。
「聖者よ、大丈夫ですか」
　将軍は、苦行者の体から爪楊枝を取り除き、水浴させてきれいにした。
「聖者よ、国王にはどのような報いがふりかかるのでしょうか」
　不安げな将軍に、苦行者は穏やかに語りかける。
「わたしは敵意を持っていません。しかし、将軍よ、愛欲の神々が感情を害しています。今日から七日目、この王国の領土すべてが、ダンダキー国王の領土でなくなるに違いありません。あなたは急いで立ち去り、他のどこかへ行きなさい」
　将軍は恐怖に駆られ、慌てて国王に告げた。
「陛下、この国は七日後に滅びます！」
「何をバカなことを言っておる。そんな不吉な者の言葉など信じるに足りぬ。わが王国は勝利するに決まっておろう！」
　彼は国王の御前を去り、そして家族を連れて外国に亡命したのであった。苦行者キサヴァッチャの言葉を信じたのである。

＊　＊　＊

　ほどなくして、キサヴァッチャの前に二人の若い修行者が出現した。二人が携えているのは寝台であった。
「キサヴァッチャさま、この寝台にお乗りくだ

さい」
「サラバンガ師がお呼びなのかな」
「そうです。さあ、お乗りください」
キサヴァッチャが寝台に乗ると、二人の担いだ寝台は空間を飛び越え、あっという間にカヴィッタ林に到着した。
こうしてダンダキー王国には、聖者を冒流した報いを受けるべき者たちだけが残ったのである。

＊　＊　＊

「はっはっは、やはり主席祭司の申したとおりになったのう」
「当然でございます。あの不吉な者の言葉を信じた将軍は、今ごろ後悔しておるに違いありません」
ダンダキー国王は、国境の反乱者を捕らえ、首都に凱旋するところであった。
「やはり不吉な者につばを吐いたからこそ、今回の勝利があったのだな」
と有頂天の国王は、顔に水滴が当たるのを感じた。
「おや、雨か」
降り始めた雨はどんどん強くなり、市の近辺に転がっていた死骸をすべて流した。
「ほう、市がこれで綺麗になったのう」
国王が見ていると、次に降ってきたのは天の花であった。雨で綺麗になった地面の砂の上に天の花が降り積もったのである。
さらにその後から、小銭が降ってきた。小銭の後は四角い銅貨が降り積もる。さらにその上に天の装飾品が降ってきたのだ。
「おお、これは素晴らしい！」

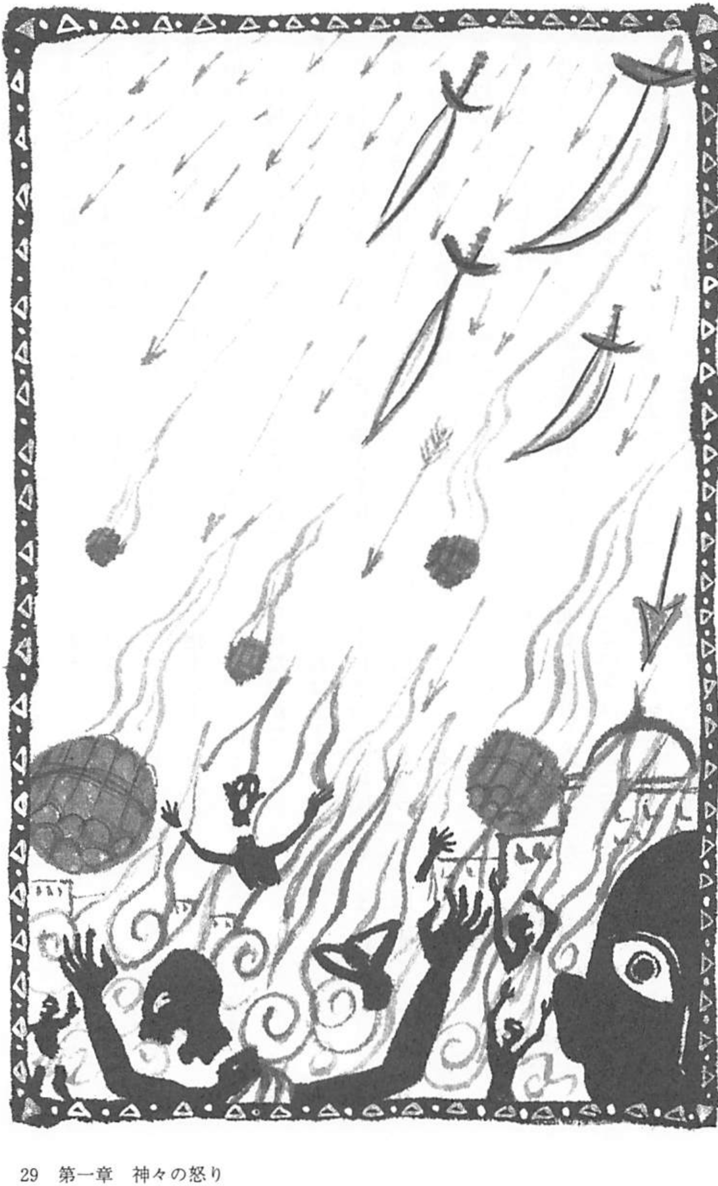
「天の恵みが与えられたぞ！」
大喜びの人々は、砂金や黄金、装飾品を拾い集め始めたのである。

＊　＊　＊

天の神々は、ダンダキー王国の人々の姿を見下ろしていた。雨を降らせ、花を降らせ、宝物を降らせたのも彼らである。人々が財宝を貪り集める姿を見て、神々は叫んだ。
「時やよし、今こそ報いを受けさせよ！」
天から次に降り注いだのは、財宝でも花でも雨でもなく、燃え盛る様々な武器であった。光り輝く武器は、地面の財宝を拾い集める人々の頭を切り、首を落とし、手足を払い、胴を薙ぎ、すべての人々の肉体をバラバラに切り裂いた。
その上に、巨大な炭火が降り注ぐ。
さらにその上に、燃え上がる巨大な山の嶺が落ち、さらにとどめとして、三十メートルの高さにわたって砂粒の雨が降り注いだ。
こうして、七十キロもの範囲が荒廃し、そして滅んだのである。
これがダンダキー王国の最期だった。これはバラリンゴの大陸の全域に知られる大事件となったのである。

❖四　サラバンガ師への質問（一）

「国王が真理の修行者を迫害し、そして滅んだという物語は、数多く伝えられている。
例えば、カーシ国王カラーブは、忍辱（耐え忍び）の教義を守る苦行者を鞭打ち、腕を落と



し、鼻を削いで殺した。その直後、大地が裂け、カラーブ王は大地に呑み込まれたという。

ナーリキーラは修行者たちを犬の群れに食わせた。千の腕のアッジュナは修行者アンギーラサに対して罪を犯した。どちらも、王領とともに消滅したと伝えられている。

この四人の国王は、死後、どこに生まれ変わったのだろうか」

こう悩むのは、ダンダキー王国に領土を接するカーリンガの国王。

「その答えを教えてくれるのは、かのサラバンガ師以外にはないだろう。彼のところに行き、質問することとしよう」

カーリンガ国王は、多くの従者を引き連れ、カヴィッタ林へと向かうことにした。

ちょうどゴーダーヴァリー河に近づいたところで、カーリンガ国王は二つの集団が近づいてくるのを認めた。

「あれ、あれはアッタカ国王とビーマラタ国王ではないか」

アッタカもビーマラタも、滅んだダンダキーに接する王国である。

「諸君、一体どういうわけでここにお越しになられたのか」

「それは……」

実は他の二人の国王も、まさにカーリンガ国王と同じことをサラバンガ師に聞こうとしてやってきたのである。三人の国王たちは互いに相談したわけでもなく、またその出発を聞いていたわけでもなかったが、まさに同じことを考え、同じく行動したのだった。

「この先は一緒に行こう」

三人の国王は一つの二輪馬車に乗り、そしてゴーダーヴァリー河の岸に到着したのである。

＊　＊　＊

まさにその日、苦行者キサヴァッチャが亡くなった。その葬式のために、数千人の修行者たちは四つの場所にビャクダンの木を積み重ね、その死体を火葬した。

火葬場全域、一キロ足らずの範囲で天の花の雨が降り注いだ。その花の雨の中、キサヴァッチャの魂を肉体から離れさせ、そしてサラバンガ師は小屋に入ったのである。

サラバンガ師が座っていると、大軍が移動するときの楽器の音が聞こえてきた。

「おや、あれは何の響きだろうか。……アヌシッサ、いるか?」

「はい」

「行って、あれは何の響きなのか、調べてきなさい」

「わかりました」

サラバンガ師のもとに残っていた優れた内弟子アヌシッサは、飲み水を入れた陶器を持って河岸に向かった。岸辺には大軍勢を率いた国王たち三人がいる。

「装飾され、輪をつけ、
素晴らしい衣服を着、
宝石・真珠をつけ、刀と剣を腰に縛り、
二輪車に乗っている雄牛のような方々、
とどまりなさい。
あなた方は何者か。
人の世界において、
あなた方はどのような者なのか」

アヌシッサの質問を聞いて、三人の国王は車から降り、うやうやしく挨拶をした。最初に答

えたのはアッタカ国王。
「わたしはアッタカ。
この方はビーマラタ。
そしてこの方は高位のカーリンガ国王。
正しい自制力を備えた尊者方に会うため、
様々な質問をするために、
ここに来たのであります」

「それは素晴らしいことです、陛下。皆さんはまさに来るべきところに来られました。それでは、水浴し、休み、小屋に入り、多くの修行者たちにうやうやしく挨拶して、師に質問なさってください」

苦行者アヌシッサは親切に迎え入れ、飲み物の陶器を取り上げ、水を注ぎ出した。

＊　＊　＊

折しもその時、空から神々が舞い降りてきた。天の象エーラーヴァナの肩に乗り、神々が舞い降りてきた。アヌシッサは神々にも尋ねる。

「虚空の空中にとどまっている様子は、
あたかも十五夜の月のよう。
大いなる威神力を備えた人食い鬼神よ、
あなたに質問します。
人の世界において、あなたはどのように
知られているのでしょうか」

「愛欲神たちの間では
スジャンパティと呼ばれ、
人の世界においては
マガヴァーと呼ばれる。

その愛欲神の王は、今日、ここに来た。
正しい自制力を備えた
尊者方に会うために」

「それは素晴らしいことです、大王陛下」
やってきたのは、有能神、つまり愛欲の神々の王とその従者たちであった。三人の国王たちとは別に、七つの疑問を解決するためにサラバンガ師に会いに来たのである。

＊　＊　＊

「やってきたのは、三人の国王と、愛欲神の王でありました。彼らはみな、師に質問するために来たのです」
「そうか、わかった」
サラバンガ師は広大な庭に座った。三人の国王は多くの修行者たちに挨拶し、その側に座る。有能神も空中から降りてきて、合掌し、修行者たちを賛美して、挨拶した。

「大いなる神通を持ち、
神通の素晴らしさを生じていて、
遠くにいる我々にもその名声が聞こえる、
尊い人たちが集まっている。
生き物の世界であるこの場所で、
最高の人間である聖人たちに、
浄信ある心で、うやうやしく挨拶する」

有能神は、六つの誤った座り方にならないように気をつけて座った。
このとき、有能神は修行者たちの風下にいた。
それを見て、アヌシッサは神々の王に告げた。

「久しぶりに会った修行者たちの香りは、
風によって身から離れました。
千の目のある者よ、ここから離れなさい。
愛欲神の王よ、
修行者たちの香りは不浄です」

「久しぶりに会った修行者たちの香りは、
風によって身から離れた。
あたかも彩られた花、
優れた香りの花飾りのように、
わたしはこの香りを望んでいるのだ。
というのも、愛欲神たちは、
ここでいやだと思うことがないのだから」

有能神はそこに座り続けたのである。

＊　＊　＊

「ところで尊者アヌシッサよ、わたしは質問するためにここに来たのだ。質問する機会を与えてほしい」
有能神の言葉を聞いて、アヌシッサは答えた。

「生物の支配者であり、
栄光あるプリンダダという名であり、
愛欲神たちの神々の王であり、
マガヴァーという名でもあり、
スジャンパティという名でもあり、
闘争の神々たちを粉砕する愛欲神の王が、
質問するための好機を願っている。
ここにおられる賢者方の中で、
一体どなたが、
人々の支配者である三人の国王と、
愛欲神たちの神々の王である
ヴァーサヴァとに、

優れた質問を問われて、
回答できるのだろうか」

修行者たちは、その問いに答えて、

「この尊い人サラバンガは苦行者であり、生まれたときから性交をしていません。大師の息子であり、正しく修行した容姿であります。師こそ様々な質問に答えるでしょう」

「アヌシッサよ、まさにあなたが師に挨拶し、修行者の言葉遣いで、有能神の質問に答える機会を作ってください」

と修行者たちに言われ、アヌシッサはすぐに尋ねた。

「コンダンニャ様※、様々な質問にお答えください。素晴らしい容姿を持つ尊い人たちが、師に懇願しています。
コンダンニャ様、
これは人間に対する法則であります。
老齢に達した者にはこの責があります」

「尊者方よ、機会を捕らえて質問しなさい。欲する質問ならどんなものでも、
わたしはそれぞれ完全に答えよう。
自ら、この世界と高い世界を
知っているのだから」

サラバンガ師が許可すると、有能神は用意していた質問を尋ねた。

※コンダンニャ＝サラバンガ師の姓。

「何を殺せば、
いかなるときでも悲しまないのですか。
何を捨断することを、
尊い人たちは賛美するのですか。
許すことができるのは、
だれに言われた乱暴な言葉ですか。
コンダンニャよ、
これらの意義を明かしてください」

「激怒を殺せば、
いかなるときでも悲しまない。
偽善を捨断することを、
尊い人たちは賛美する。
許すことができるのは、
すべての者に言われた乱暴な言葉。
この忍辱が最も偉大だ、と
正当な者は言うのである」

「同じ身分の者、
あるいは優れた人による
言葉遣いを辛抱することはできます。
しかし、どうすれば劣った者の
言葉を許すことができるのですか。
コンダンニャよ、
その意義を明らかにしてください」

「恐怖があるから目上の者の言葉を、
反目したくないから同列の者の言葉を
許すことができるのである。
この二者の言葉遣いが辛抱でき、
そして、ここで劣った者の
言葉を許せるのであれば、
この忍辱が最も偉大だ、と
正当な者は言うのである」

有能神は、サラバンガ師に尋ねた。

「尊者よ、最初、あなたは

『すべての者に言われた乱暴な言葉を許すことができれば、この忍辱が最も偉大だ』

とおっしゃいました。ところが次には、

『劣った者の言葉を許すことができるのであれば、この忍辱が最も偉大だ』

とおっしゃいます。矛盾するのではありませんか」

「矛盾しないのだよ。後の言葉は、『この人は劣っている』とわかっているときに、その人の乱暴な言葉遣いを我慢する者のために言われたことだ。だが、一目見ただけでは、その人が優れているかどうかということはわからない。だから、先の言葉を言ったのだ」

そしてさらに答えて、

「優れた者、同等の者、劣った者、
どれも磨かれた容姿であれば、
どのように識別できるのだろうか。
正当な者たちは、
容姿を離れた容姿によって判断する。
こういうわけで、すべての者の
言葉を許すことができるのだ」

「なるほど、よくわかりました。尊者よ、この忍辱の素晴らしい成果をお話ししてください」

と有能神が言うと、サラバンガ師は、

「国王率いる大軍隊が戦争しても、
この成果を得ることは全くない。
忍辱を有するだけの善と徳のある人は、
忍辱の力によって、

様々な強い嫌悪が静まっていく」

このように、サラバンガ師によって、有能神の尋ねた忍辱の素晴らしさが見事に語られたのである。

❖五　サラバンガ師への質問(二)

「有能神は、自分の質問ばかりしている。わたしたちが質問する機会は与えられないのだろうか」

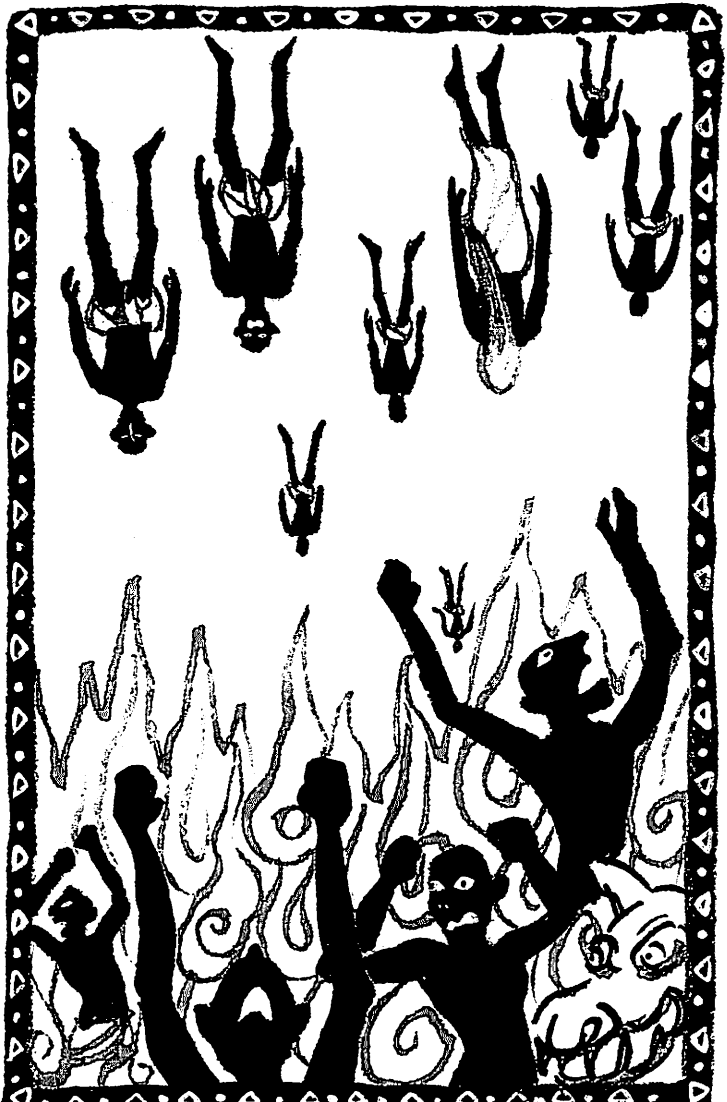
三人の王が心の中で思っていることを、有能神は察知した。

「わたしが尋ねたいことはあと四つ残っているが、彼らの質問を尋ねることにしよう」

そして、彼らに代わって質問したのだ。

「正しくお説きくださって、
ありがとうございます。
そこで、別のことを質問いたします。
どうかお答えください。
ダンダキー、ナーリキーラ、
アッジュナ、カラーブ各国王のように、
大変悪いカルマを持つ
彼らはどこへ向かったのでしょう。
尊い人に重圧感を与えた者たちは、
どこに流転したのでしょうか」

「キサヴァッチャに
つばをかぶせたダンダキー。
手足を切られ、
国民・国土もろともに、



『熱い灰』という名の
激苦地獄で苦しんでいる。
その熱い燃えさしが、
彼の体に落ちている。

自制力があり、出家者で、
法則を話す、罪なき出家者をごまかした
ナーリキーラはあの世であがき、
集まる犬の群に食べられている。

さて、アッジュナは、
矢や先の尖った杭の激苦地獄で、
頭を下にし、足を上にして落ちた。
忍辱し、苦行し、長く神聖行を行なった
アンギーラサ・ゴータマを傷つけて。
忍辱を行ない、罪なき出家修行者を、

粉々に叩き割らせたカラーブは、
極めて熱く、苛酷な、すさまじい、
超期間地獄に流転して苦しんでいる。

賢者はここで、
これらの激苦地獄や、
さらに悪しき激苦地獄があることを
聴いたのだから、
出家修行者・祭司たちに対して
法則を実行しなさい。
そうする者は天に生まれる」
この答えで、三人の国王たちは納得した。

＊　＊　＊

有能神は、残しておいた四つの質問を尋ねる

ことにした。

「正しく説いてくださいまして、
ありがとうございます。
そこで、別のことをご質問します。
どうかお答えください。
どんな者が『戒を守る者』ですか。
どんな者が『智慧ある者』ですか。
どんな者が『善と徳のある人』ですか。
どんな輝きであれば、
わたしたちを捨てないのでしょうか」

「身にも、言葉にも、そして意識にも、
自制力があり、何も悪を行なわない者。
自分を守るための嘘を語らない。
このような者を『戒を守る者』という。

意識において、深い探求を行なう。
不利益となるような、
貪欲なカルマを蓄積しない。
時宜にかなった言葉を無視しない。
このような者を『智慧ある者』という。

自分になされたことを間違いなく知り、
なされたことを理解して
揺らぐことのない者。
素晴らしき友、
そしてしっかり献身する者。
苦しむ者のため、敬愛を込め、
なされるべきことをする。
このような者が『善と徳のある人』。

これらすべての素晴らしさを備え、
信じていて、穏やかで、

ものを施し、気前がよく、
優しく、友好的で、言葉が柔らかい。
そのような輝きは、
わたしたちを見捨てないのだ」

このように見事にサラバンガ師は、あたかも空に月を昇らせるかのように、鮮やかに四つの質問に答えたのである。そこで、有能神はさらに質問をすることになった。

「正しくお説きくださって、
ありがとうございます。
そこで、別のことを質問いたします。
どうかお答えください。
戒と、輝きと、
正当な者たちの様々な法則と、
智慧、この中で、
何が最上のものでしょうか」

「あたかも月が星に勝るように、
智慧が最高の善であると断言する。
戒と、輝きと、
正当な者たちの様々な法則は、
智慧ある者に伴って生まれるものである」

「正しくお説きくださって、
ありがとうございます。
そこで、別のことを質問いたします。
どうかお答えください。
どのように、どんなふうに、何を行ない、
だれに依存したならば智慧を得るのか、
今、智慧を得る方法を教えてください。
死を逃れられない定めの者が、
どうすれば智慧あるものになるのですか」

「先輩である者、成就した者、
多学の者たちに依存しなさい。
熱心に獲得しようとし、尋ねなさい。
敬愛を込め、
正しく説かれた様々なことを聴きなさい。
このように行なえば、
死を逃れられない定めの者が、
智慧ある者になるのである。

その智慧ある者は、
愛欲を構成する様々なものを、
無常・苦しみ・病としてじっと見つめる。
このように正しく観る者は、
様々な苦しみに関して、
様々な感覚の喜びを与えるものに関して、
様々な大きな恐怖に関して、
衝動を起こすことがなくなるのである。

愛著を離れ、邪悪心を除きなさい。
無量の聖慈愛の心を習得しなさい。
すべての生物に対する暴力をなくし、
非の打ちどころがなくなれば、
神聖天の世界に生まれ変わる」

このようにサラバンガ師が、様々な愛欲の邪悪さを説いたとき、三人の国王と軍団の兵士たちは、愛著を捨てたのである。それに気づいたサラバンガ師は、さらに彼らに身の毛もよだつほどの歓喜を与えるため、語った。

「大いなる如意によって、
君、アッタカと、
ビーマラタと、高位のカーリンガ国王は、

ここへ来ることになった。
あなた方すべての者の
愛欲愛著が捨断されたのだ」

「他人の心を理解するお方、
そのとおりでございます。
わたしたちすべての者の
愛欲愛著が捨断されました。
手助けとして、好機を作ってください。
あなたの示す方向に従えば、
わたしたちは得ることができるのです」

「手助けとして、好機を作ろう。
あなた方の愛欲愛著は捨断されたのだ。
歓喜が増大し、身体に行き渡るだろう。
わたしの示す方向に従えば、
あなた方は得ることができるのだ」

「広大な智慧を持つお方よ、
あなたがおっしゃったこと、
あなたが諭されたこと、
そのすべてを行ないましょう。
歓喜が増大し、身体に行き渡ります。
あなたの示す方向に従えば、
わたしたちは得ることができるのです」

そこで、サラバンガ師はこの軍団の者たちに、
教団に入る許可を与えた。

「キサヴァッチャへの
この賛美が終わった。
尊者方、
そして素晴らしい容姿の尊い方々、
去りなさい。

静慮に満足し、
いつもサマディに入っていなさい。
これが出家者の最高の満足である」

修行者たちはサラバンガ師の言葉を聞き、そして空中に飛び上がって自分の場所へ去っていった。

有能神も立ち上がり、サラバンガ師を礼拝し、合掌して、神々とともに帰ったのである。

＊　＊　＊

このように昔話を語り終えて、サキャ神賢はおっしゃった。

「尊い人である賢者方によって、
最も優れた利益のある詩句が
正しく唱えられたのを聴き、
喜びに満ちて感謝する、
栄光ある愛欲神たちは、
愛欲神の要塞に帰った。

尊い人である賢者方によって、
正しく唱えられたこれらの詩句は、
利益があり、優れた特徴がある。
これらの本質に気づいて聴けば、
どんな人でも、
先行する瞑想と次の瞑想において
卓越することができる。
先行する瞑想と次の瞑想において
卓越した後、
死の神の王を見ないところに行く」

この経典は、国家権力も、国家権力に支配されるマスコミも、一時的に現世利益を得るかもしれないが、その後に地獄が待っているだろうことを示唆している。現在、完全なる禁欲出家修行者を不当逮捕し続けるなど、決してやってはならないことをやり、それをさらにエスカレートさせていっている。必ずや神々の怒りが爆発するであろう。

また占星学者も、次のように記しているので参考までに載せておく。

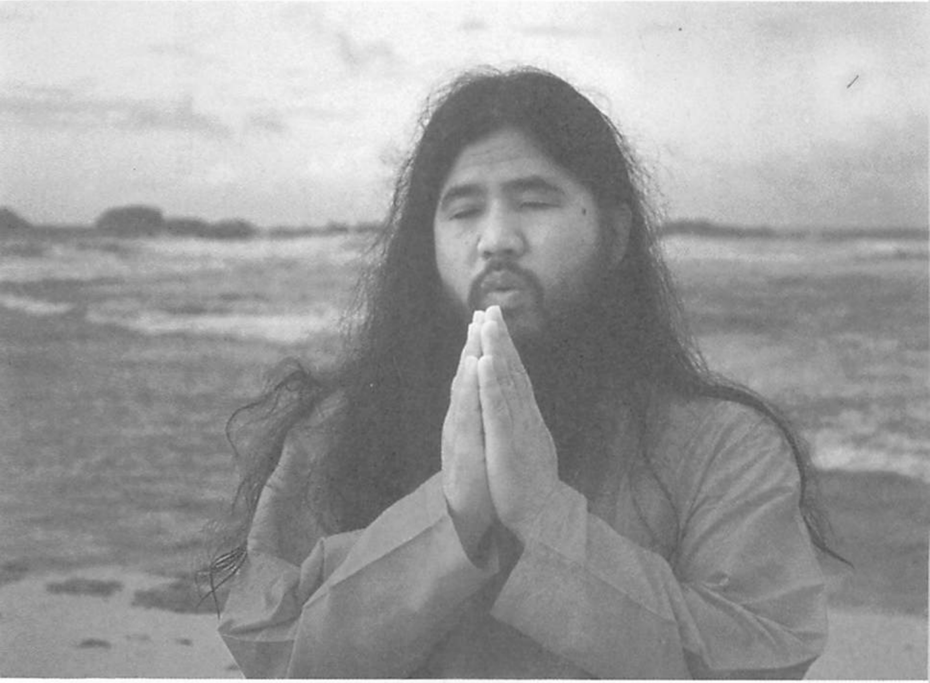
一九九九年　地球は滅亡するか

多くの人が近未来のエポックとしてすぐに頭に思い浮かぶ時期といえば、いうまでもなく、迷惑な予言者ノストラダムスの「一九九九年七の月」。

（中略）

では、この異変は主にどの部分に出るのか、まず九九年七月二八日の月蝕図と、八月十一日の日蝕図を見てみると、ともに固定宮のグランド・クロスは、2－6－8－12室で十字架を形成している。

変化が起こる主題となるのは太陽・ドラゴンの位置で、それは穀物生産高、労働力、軍備などを意味している6室だから、もし何かあるとすれば、地震や天災によるショックよりも、まず軍事的な匂いがする配置のように見受けられる。



（中略）

2室と8室という経済の部屋には、しっかりと土星・火星の180度が陣取っているので、経済問題で身動きのとれない抑圧。そうした中で、自衛のために海外に出ていく可能性があるということになる。たとえば経済封鎖に対する反撃だ。

（中略）

明らかに日本は、軍事的に脅かされた状況に陥っているだろう。それは月蝕図、日蝕図でみたとおり、海外派兵をして、そこで甚大な被害を受けるのだから、感情的に紛争当時国に対して冷静ではいられないのである。7室の火星というのは、忍耐するのが大変に困難な配置なのだ。またこの時期、日本は政治的にも明晰な判断力を失っている。

P月はN火星と合なので、いずれにしても、海外で生じた苦しい事件に感情がエキサイトし、国民感情は攻撃しろという方向に傾くのかもしれない。

（中略）

牛、ライオン、鷲、人はおのおの固定宮に対応しているが、この獅子（＝ライオン）の度数に、大日本帝国のN土星が収まっている。

土星とは抑圧、遅延、制限などを意味するが、基本的に生命力を封じる「岩」や「土」という墓を埋めるための材料のような性質があり、それを日蝕（＝流動化作用）が襲い、墓を封じていた土砂は流動化し、そしてほかの残された三つの四大の力が、日本の土地の底に眠っていた力を眠りから目覚

めさせようとする。これが一九九九年八月の事件の真相ではあるまいか。

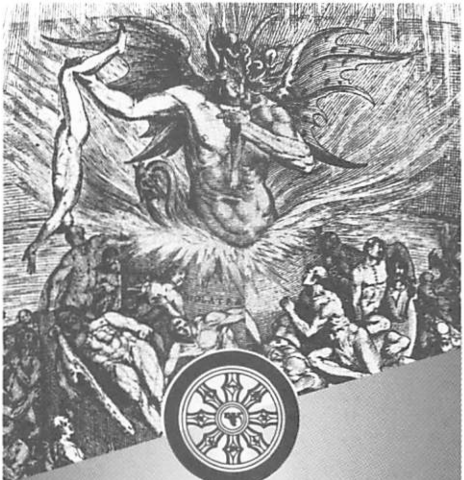
（中略）

地球定位法による座標に、もっと大きなオーブ（許容範囲）を設定すると、富士山大爆発も考えられる。この時期火山活動や地震活動が活発化してもおかしくはない。

（中略）

また、核ミサイルによる日本国土の攻撃という読みもできないわけではない。広島も長崎も、その日天頂（10室）に冥王星、天王星があったのだから。実際九三年の段階では、北朝鮮は明らかに日本を狙っているので、核ミサイル攻撃も現実感がある。

（松村潔『ホロスコープ・メッセージ』KKベストセラーズより）



第二章

死について

真っすぐになった高速道路で、ヨシオくんは時速一五〇キロメートルでスポーツカーを飛ばす。そして、目の前に高速道路の断層が見えたとき、ヨシオ君は急ブレーキを踏んだ。しかし、そのときすでに遅く、高速道路から落下し、ヨシオ君は死んでしまったのである――この話は、わたしの生と死についての一般的な見解である。わたしたちがもし生死を超える法則の目を有しているなら、このヨシオ君のように時速一五〇キロメートルの猛スピードで高速道路を突っ走るようなことはしないはずである。しかしながら、人生における有視界の部分は、あくまでも生の部分なのである。そして、死の瞬間、わたしたちは多くの後悔をすることになる。

ところが、生死を超えた目を持つ魂が存在する。聖者と呼ばれる者である。この聖者の条件は、八つの生起のサマディを達成した者ということになる。八つの生起のサマディを達成することによって、この人間の状態が中間状態（本質でなく、固定されていず、変化しうる状態）であるということ、つまり肉体に対して意識が単に宿っている状態、しかもそれは眠りのときそこから離れ、あるいはサマディのときそこから離れ、あるいは単なる気絶のときそこから意識が離れるという状態を経験するのである。そして、それを聖者は、

如実に理解するようになるのである。そして、理解した聖者は、生き方が全く変わることになる。

第一章の経典は、まさに「現世ご利益」＝（イコール）「来世をよくする」のではないということを表わした経典であるとわたしは考える。

〈八つの生起のサマディ〉

①第一の静慮の生起のサマディ

②第二の静慮の生起のサマディ

③第三の静慮の生起のサマディ

④第四の静慮の生起のサマディ

⑤空間無辺境の生起のサマディ

⑥識別無辺境の生起のサマディ

⑦無所有境の生起のサマディ

⑧非認知非非認知境の生起のサマディ

ところで、これから三人の魂の流転についての話をしたいと思う。まず、オウム真理教に対して、批判の文章をずっと書き続けてきた幸福の科学の主宰大川隆法である。

彼はもともと前生において、わたしの弟子であった。したがってわたしは『幸福の科学の会員よ聞きなさい！』によって彼をたしなめた。しかし、彼は前生と同じようにやはり逆恨みをしたのである。

遥か昔になるが、わたしは中国（といっても何カルパも前の中国である。一カルパは、宇宙の創造期、維持期、破壊期、虚空期という一つのサイクルを表わす）の豪商の家に生まれた。そしてそのときわたしはこの世の中の無常を悟り、道教に出家した。そして、師匠の祝福を得、道教の成就をしたのである。

わたしに弟子入りをしたいという、三人の者がいた。その三人の者の一人が、劉珍といい、二番目が陳常といい、三番目が公明といった。そして、劉珍は非常にまじめな弟子で、もくもくと修行し、そして師匠であるわたしに対しても心から仕えてくれた。わたしもこの劉珍によく法則を説き教えたものである。ところが、二番目の陳常は豊かな生活を得るために道教の修行をしていた。常々、早く道教の秘法を盗み、その教えを利用しようと彼

は考えていたのである。公明は、劉珍によく従い、瞑想法には長けていたが、あまり奉仕の修行には向かわなかった。当然劉珍が一番初めに成就した。

その当時わたしは、六つの秘法を有していた。その一つが天法金丹の法といわれるものであった。この天法金丹の法を修得することにより、不老不死が得られるのである。そして陳常はそれを盗み、金集めのために使ったのである。その上、彼は「もともとその法則は自分の中に有していたものであり、自分が天法金丹の法の開祖である」と主張したのである。**当然彼はその報いによって、無間地獄へと堕ちた。そして無間地獄に堕ちた後、何カルパもの間彼はそこで苦しみ、のたうちまわらねばならなかった。**

なお、この劉珍こそ今オウム真理教の顧問弁護士を行なっているアパーヤジャハであり、陳常こそ大川隆法なのである。現在、大川隆法は前生と同じように、オウム真理教の法則を盗み、そして、盗んだ法則によって幸福の科学の会員をだましているのである。

大川隆法の一生前は、四国のたぬきである。ではなぜ彼が今生、宗教家になり得たのか。それは、彼が前生、非常に親孝行をなし（つまり、親孝行のたぬきだったのだ）、それによって今生人間界へと生まれ変わったのである。したがって、人の物まねしかすることができ

ないのである。そして、霊媒現象のようなことによってしか法則を説き明かすことができないたぬきなのである。非常に哀れな存在である。

わたしは彼に心によって心を合わせたことがある。するとすでに彼のプラーナのアパーナ気は下降し、地獄に至る道筋ができている。彼は死後、必ずや最高の苦しみへと向かう無間地獄へと落ちるだろう。すでに彼は、痔、あるいは足のむくみが始まっているはずである。それはアパーナ気の力によってである。

このようなことを今まで黙っていたのは、前生の動物を相手にしても仕方がないと思ったからである。しかし、大川隆法も自分で新しい宗教を開いたからには、人のまねをせず、新しい教えを広めてもらいたいものである。

たぬきの習性

ここで大川隆法氏の前生である「たぬき」の習性について解説しよう。

小学館の『日本百科全書』には「タヌキ」の項にこう書かれている。

「タヌキはキツネと同様人を化かす動物とされ、怪談が伝えられている」

キツネと同じでたぬきは人を化かすのが好きなようだ。大川隆法さん、あまり人を化かさないように。



「徳島県ではタヌキの話が多く、憑いて困るタヌキを祀り込めた洞窟（祠）が各地にある」

大川隆法氏の前生は「四国のたぬき」となっているから、まさにこれかも。

「愛知県三河地方では、青年たちが集まって「狸寄せ」というのを行ったという。これは「こっくりさん」「狐寄せ」と同様、一人の人を目隠しして周りの者が唱え言をし、その者がしだいに興奮状態になったところで、皆がいろいろと問答してお告げを聞くものである」

これは現在、大川隆法氏がよく行なっていることと似通っている。違いは一人でやるか複数でやるかぐらいだろう。いろいろな聖人・霊人を「狸寄せ」して「お告げ」を聞いているのだ。また、たぬきといえば雑食だが、好き嫌いせず、それこそチャンポンにいろいろな宗教をまぜこぜにする大川隆法氏の習性とだぶって見えるところがある。

ほかにも「たぬき」というと、いろいろな言葉がある。例えば、

「とらぬたぬきの皮算用」
「たぬき親父」
「あいつは相当なたぬきだから気を付けろ」
「たぬき寝入り」

といったところ。でも考えてみるとあまりいい使い方はないようだ。

また、たぬきに関する伝承で、「たぬき和尚」という話がある。『日本百科全書』を見ると、

「相模（神奈川県）から中部地方にかけては鎌倉の建長寺の「狸和尚」が有名である。和尚に化けた狸が各地を説教して歩くが、あるとき宿につくと、犬が嫌いだといって遠ざけたため、宿の人が障子の陰から見ると和尚の挙動がおかしい。それを見破った犬は飛びついてかみ殺してしまう」とされている。

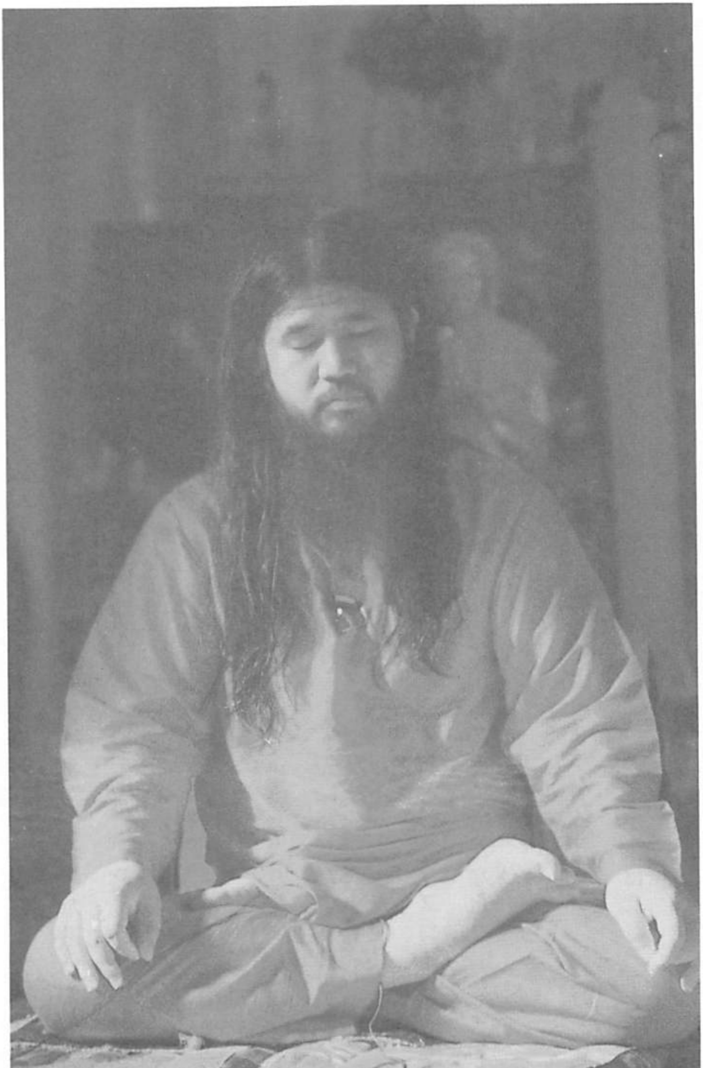
これを見ると、どうもたぬきは説法をするのが好きなのかもしれない。大川隆法氏はさしずめ現代の「たぬき和尚」といったところだろうか。犬にかみつかれないよう、ぜひ気をつけてほしいものである。

（参考：『日本百科全書』小学館）

次に、オウム真理教のウォッチャーとして有名な江川紹子の輪廻転生について、心によって彼女の心を観察し、来世はどうなるか見てみた。すると、わたしがびっくりしたことに、彼女は来世は非常に美しい犬に生まれ変わるのである。なぜあれだけの悪業を積んでいる彼女が犬に生まれ変わるのか、わたしはしばらく理解できなかった。しかし、彼女の心を観察すると、彼女は無智ではあるが悪人ではないのである。そして、彼女にとっての最も大切なもの、それは愛情であり、その愛情をもとに生き続けているのである。したがって、美しい雌犬に何生も何生も生まれ変わり、そして幸せな結婚をし、それによって子供をつくり、その産みの苦しみの経験を何生も何生もしなければならないカルマを形成しているのである。

もし江川紹子が法則に気づいたら、そこから解放されるであろうが、彼女の積んだ罪、カルマは大きいからそこから抜け出すことは難しいだろう。

次に被害者の会の弁護団の一人である滝本弁護士である。同じようにわたしは彼に対して、心によって心を合わせ、どのような流転を繰り返すかを観察した。彼は、すでに意識



において精神の緊張が強まり、そして錯乱の状態が少しずつ表われていることが理解できた。そしてスヴァディスターナ・チァクラ、ムーラダーラ・チァクラからのアパーナ気の働きが強く、彼は今生なした悪業の果報によって、まず消化器を痛め、そして、死んでからは、地獄、動物の世界を流転し続けるはずである。

「二十四歳の女性が警察によって救出された。妊婦である彼女は監禁されていた」という報道が一斉になされ、オウム真理教の心証を非常に悪くした。先に述べたように、もともとわたしは、今回の強制捜査に対して、憎しみもなければ悲しみもない。ただ哀れみがあるだけである。というのは、法則、真理の法則をもとに観察すると、今マスコミや国家権力が行なっていることは、自分たちの首をまさに絞めていることにほかならないからである。

この二十四歳の女性は、電話でわたしが話し、そして出家させた女性である。このとき、電話で彼女はわたしにこう言ったものだ。「尊師、このおなかにいる子供はだれの子かわからないんです」。複数の男性と付き合い、そしてだれの子かわからないというのである。そ

して「また新しい男性が言い寄ってきていますから、おなかの子供を堕ろしてその男性と付き合おうかと考えているんです」と言う。わたしは電話の向こうから聞こえてくる声に対してこう考えた。「彼女はまだ真理の法則を知らない。そして、現代のモラルからいうと当然のことを言っているように思われる。しかし、それは彼女を地獄へと至らせる道だから、出家させた方がいいだろう」と。そしてわたしは、電話の向こうにいる彼女に「あなたはとにかく出家して、しっかり子供を産みなさい。そうすることによって、あなたは本当にカルマから解放されるんだよ」という話をし、彼女も納得し、そして出家したのである。

オウム真理教の堕胎に対する見解は、次の経典によって示すことができる。

非法則に従う者の末路

輪廻転生談五三〇「サンキッチャ輪廻転生談」より
原訳：オウム真理教パーリ聖典翻訳チーム

バーラーナシーに君臨する国王ブラフマダッタは、王であった父親を殺害し、その位を簒奪(さんだつ)した。だが、彼は苦しんだ。
「俺は王権を握ったというのに、心の安まることがない。恐ろしい。何もかもが恐ろしく見える。俺は激苦地獄にいるかのようだ」
彼は五〇年苦しんだ。
五〇年目に、旧友のサンキッチャが帰ってきた。国王は喜び勇んでサンキッチャに会いに行く。出家し、八つの生起のサマディと五神通を身につけた賢者に会いに行く。
国王の遊戯地にやってきた出家修行者サンキッチャのもとに、国王ブラフマダッタは駆けつける。そのサンキッチャは、五〇年前、まさに国王ブラフマダッタの父殺しの計画を止めようとした人物でもあった。

「尊い人たちから
素晴らしいと崇拝されている
尊い人サンキッチャにご質問します。
法則に背いた人々は、逝った後、
どこへ向かって行くのですか。
わたしは法則に背きました。
質問したことについて、



わたしに答えてください」

「陛下、わたしの言うことを聞きなさい。
間違った道に進路を向ける者に対して、
道を諭す者がいる。
その者の発言に確実に従いなさい。
盗人はこの人の跡を追わないだろう。

非法則に従う者に対して、
道を諭す者がいる。
その者の発言に確実に従いなさい。
そうすれば悲痛に向かうことに
ならずにすむだろう。

陛下、法則は道である。
つまり、非法則は間違った道。

非法則は激苦地獄に導く。
法則は幸福に向かうことになる。

陛下、非法則を実行する人々は、
真理に対する非法則によって生きている。
逝った後の方向は、
激苦地獄に向かっている、と聞いている。

生命を有する地獄、
黒糸地獄、
衆合地獄、
二つの号泣地獄、
大超期間地獄、
燃焼地獄、
著しい燃焼地獄。
これら八つの激苦地獄は逃れがたい。
残忍な行為の者たちによって

満ちあふれている。
それぞれの地獄に
十六の地獄が突き出ている。

欲深い者を熱暑で焼き、
苛酷で、プラズマがあり、
毛が逆立つような大きな恐怖、
怖く、ぞっとし、苦しみがある。
四隅と四つの門があり、
測られ、区分けされている。
鉄の城壁に囲まれて、
鉄で蓋をされている。
鉄でできたその場所は、
燃え上がり、火で埋められている。
百数十キロにわたる全域に、
炎が行き渡り、とどまっている。

自制力のある苦行者である修行者を
冒涜（ぼうとく）した者たちは、
足を上に、頭を下に、
激苦地獄に堕ちていく。
生き物を攻撃した者たちは、
間違った行為をなす者は、
魚が細切れにされるように
数え切れない年月の間、苦しむ。

身の内側と外側と、
いつも全身が焼かれているので、
激苦地獄から出ることを願っても
門を見つけることはない。
東に走り、西に走り、
北に走り、南に走る。
たどり着いた門はすべて、
愛欲神たちが閉じてしまう。

数千年もの長い間、
激苦地獄に住む者たちは、
その苦しみは少なからず、
腕を差し出して号泣する。

あたかも害された毒蛇のように、
超越し難い見事なところ。
素晴らしい容姿の者たちを
傷つけてはならない。
自制力のある苦行者たちを
傷つけてはならない。

巨大な身体、偉大な弓術家、
ケーカカ国王アッジュナは、
尊い人ゴータマを傷つけた。
千の腕を持つ者は断たれた。

ダンダキーは、けがれなき
キサヴァッチャをけがれさせ、
ヤシの木が根から切られるように
その国王は根こそぎ命を失った。

メッジャは、栄光ある
マータンガの意識を押し砕き、
顧問とともに命を断たれ、
メッジャの森がそのとき生じた。

アンダカヴェーンフの息子たちは、
カンハディーパーヤナを傷つけて、
お互い棍棒で攻撃し、
支配流転双生児天の住まいに至った。

劣ったチェッチャは、
かつては空中を歩行したが、

尊い人に呪われて、
教訓のままに地に堕ちた。

このために、賢者方は
衝動のままに行動することを称賛しない。
害意のない心の者は、
絶対の真理に沿った話し方をするだろう。

著しく害意のある意識によって
智慧と徳を成就した神賢を見るならば、
その者は下の激苦地獄に行くだろう。

心の成熟した者たちを罵倒し、
乱暴に批判する人々は、
子孫なく、継承者なく、
根こそぎにされたヤシの木になる。

なされるべきことをなした
偉大な尊い出家者を攻撃する者は、
黒糸地獄という激苦地獄で、
長い日々、苦しむのである。

非法則を実践し、
王領を死滅させる愚かな国王は、
国民を苦しませ、
死後は燃焼地獄で苦しむ。
そして彼は天界での長さで
十万年、苦しむのである。
多くのプラズマに打ちひしがれて、
苦しみ・痛みを経験する。
体の中から、光り輝く炎が吹き出す。
火を食べて、全身は、
毛の先から爪に至るまで焼かれる。
内と外から全身が焼かれ、

苦しみに耐えきれなくなって、
象が突かれて苦しんでいるように、
絶叫する。

切望、あるいは邪悪心によって
父を攻撃した下劣な男は、
黒糸地獄という激苦地獄で、
長い日々、苦しむのである。
そのような者は銅の壷で苦しむ。
苦しむ者は槍で皮を剥(は)がれる。
目が見えず、小便と大便を食べる。
長い長い日々の間、
燃え立った槍で口の端を押さえられ、
ロープによって口が開かれ、
高温で熱せられ、煮え立った鉄丸を、
守護神たちが流し込む。
黒褐色の犬の群れ、
黒コンドルの群れ、
ハゲタカの群れ、
ワタリガラスの群れ、
鉄の口の鳥の群れが集まって、
あがく者の舌を切り分け、
血のついた肉片を食べる。
焼かれたナツメの実のように、
裂け目が生じた全身を、
守護神たちが殴りながらともに歩く。
神々にとっては満足だが、
彼らにとっては苦しみばかり。
父を殺害した者はだれもが、
このような激苦地獄に住んでいる。

息子が母を攻撃したなら、
この世界から
支配流転双生児天の住居に行き、

自分のカルマの果報を受け、
強い苦しみに陥る。
人ではない強力な者たちが、
自分を生んだ者を殺した者を、
鉄でできた槍によって何度も痛めつける。
自分自身の体から出た自分自身の血を、
高温で熱せられて溶けた
赤褐色の銅のように、
母を殺害した者に飲ませる。
不愉快極まりない死体があり、
臭くて悪い香りの糞と泥がある、
以前の血と似た湖に、
飛び込んでそこにとどまる。
するとすぐに、巨大な体で、
鉄の口を持つウジムシの群れが、
貪り求めて表皮を切って、
肉と血を食べる。

その激苦地獄に達した者は、
「百人の身長の高さの地獄」に潜る。
広さは百数十キロメートル、
臭い者たちの死体が臭いを放つ。
眼ある人も、
その臭いによって眼をなくす。
ブラフマダッタよ、母を殺害した者は、
このような苦しみを得る。

堕胎をした女たちは、
鋭利で、乗り越え難い、
「かみそりのついている地獄」に進み、
困難な道ヴェータラニー河に堕ちる。
鉄でできたパンヤノキは、
三十二センチ幅の棘があり、
両岸から困難な道ヴェータラニー河に
ぶらりと垂れ下がる。

そこにはプラズマがあり、
遠くで見れば火の固まりのよう。
炎を上げて燃えており、
火炎は上方に一キロ以上舞い上がる。

不倫を行なった女性たちと、
他人の妻に手を出した人たちは、
高温で熱せられた鋭利な棘の植物の
激苦地獄に生まれ出る。
肩を下にひっくり返り、
打たれて下に転落する。
体が突き通されて横たわり、
長い夜の間起きている。
夜を過ごして、大きな山のような、
高温で熱せられた火の水で満ちた
銅の壷の中に入る。
昼間も夜も、

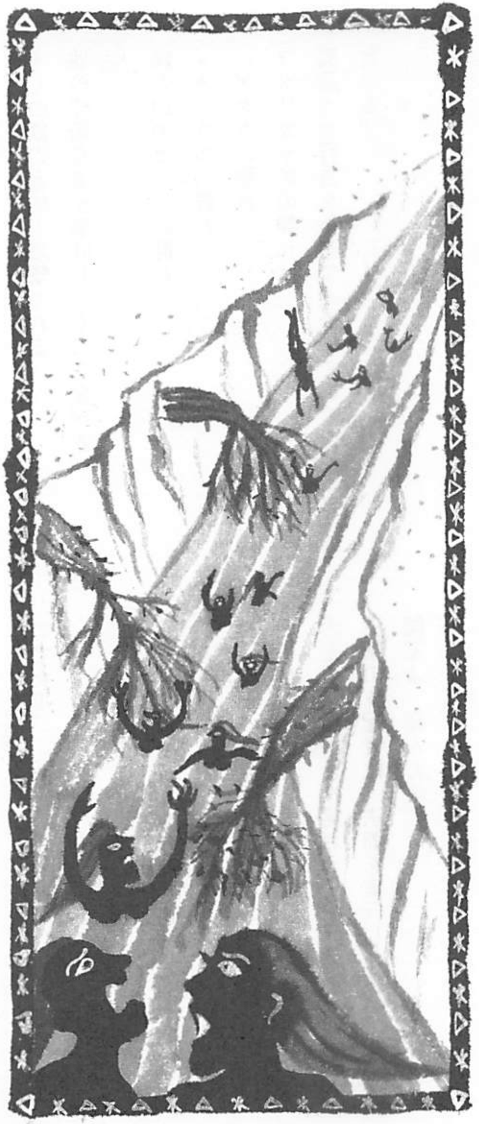
迷妄にとらわれた破戒者たちは、
過去に自分がなした罪深い行為、
自分自身のカルマを経験する。

財産で買われた夫人であって、
主人、姑、舅、年長の者、
夫の姉妹を蔑んだ者は、
縄のついた鉤(かぎ)で舌が引っぱり出される。
二メートルの長さの自分の舌が、
ウジムシに覆われているのを見る。
言葉を言うことができず、逝った後、
燃焼地獄で苦しむのである。

羊の屠殺人たち、
豚の屠殺人たち、
漁師たち、
鹿の猟師たち、

無法者たち、
牛の屠殺人たち、
猟師たちは、
非難すべきことを讃美する者たち。
彼らは、多くの槍によって、
多くの銅の金槌によって、

多くの刀によって、
多くの矢によって、
攻撃され、アルカリ水の河に、
頭を下にして落ちる。
夕に、朝に、金槌を作る人は、



多くの鉄の金槌で攻撃される。
他の悲痛な者が嘔吐したものを食べる。

鉄の口のカラスの群れ、
ジャッカルの群れ、
ハゲタカの群れ、
ワタリガラスの群れは、
間違った行為をなしてあがいている人を
食べる。

鹿によって鹿を殺す者、
鳥によって鳥を殺す者。
彼ら正当でない者はけがれており、
下の激苦地獄に行くのである」

数多くの激苦地獄が明らかにされた。次にサンキッチャ賢者は、国王に愛欲神の世界を見せたのである。

「正当な者たちは、
正しく実行されたカルマによって、
上方に行く。
神々の王、愛欲神、神聖天のいる世界。
正しく実行された果報を見なさい！
大王よ、はっきり言おう。
王領の支配者は、法則を実行しなさい。
国王よ、死んだ後には、
正しく実行した行為を悔やまない。
それと同じように、今、
法則を実行しなさい」

この法則を聞いて、国王は勇気づけられたのだった。

この経典に説かれているとおり、明らかに堕胎は地獄へと堕ちるのである。それは、真理勝者サキャ神賢がそうお説きになっていらっしゃるから間違いない。わたしたちは仏教を奉じている。したがって、真理勝者サキャ神賢の教えに対して、純粋に従うことは当然なのである。

また、堕胎に対して仏教がいかに厳密に捕らえていたかということは、次の経典のビンビサーラ王の態度をみても一目瞭然である。ここでビンビサーラ王は、自分が王権を奪われ殺されると予言されていても、アジャータサットゥを産ませようとしたのである。

アジャータサットウの誕生

輪廻転生談三三八「もみ殻輪廻転生談」より

マガダ国王ビンビサーラは、占い師を呼びつけた。

「神のような国王陛下よ、何を占ってしんぜましょうか」

「実は、王妃のことなのだが……」

王妃ヴェーデーヒーは、最近どうも様子が変だった。侍女たちが最初にその異変を知り、王妃を問いつめてようやく、その原因がわかったのである。それが王の耳に入ったのはまさに今日のことだった。

「実はな、ヴェーデーヒーは、突然わしの右の膝の血を飲みたくなったというのだ」

「……陛下の右膝の血、ですか……」

「どういうわけかわからんのだが、ヴェーデーヒーはこの右膝の血が飲みたくてたまらないそうなのだ。これは一体どういうことなのだろうか」

「それは……」

少し考えて、占い師は思い当たった。

「王妃陛下におかれましては、太子殿を身ごもっておられるかと存じます」

「ほう、息子か」

「その太子殿が、陛下を亡き者にして王位を奪うことになるでしょう。王妃陛下の異変はその

予兆でございます。……堕胎させられますか？」
「何を申すか」
ビンビサーラ王は一言の下に否定した。
「もし我が子がわしを殺して王位を取るとして、それがどうした？　別に構わんではないか」
国王は刀を抜いた。
次の瞬間、その刀は右膝を切り裂いた。そして、血が吹き出すのを金の器で受けさせたのである。
「これを王妃に飲ませよ」

＊　＊　＊

王妃ヴェーデーヒーは考えた。
「もし、わたしのお腹に宿っている子が父王を殺すというのなら、わたしはどうしたらいいのでしょう……やはり堕胎するしかないのでは……」
そこで、王妃は子を堕ろすために腹をもませ、汗をかくようにさせた。
その話を聞いてやってきたのはビンビサーラ王である。
「ヴェーデーヒー、何をするのか。我々の子がわしを殺して王位を奪うというが、それがどうしたというのか。わしは年をとるし、いずれはやがて死ぬ身だ。どうか子供の顔を見せてくれ。これからは決してこんなことをしてはならんぞ」
王妃はそれでもやはり、子を堕ろそうとして、今度は庭園に向かった。そこで腹をもませたのだが、やはりこのことも王の耳に入り、王妃はそれ以降、庭園に行くことを禁じられたのである。
そして、結局子供は産まれた。
王子はまだ生まれていないときから王の敵であったため、アジャータサットゥと名づけられたのだった。

しかし、この世の中はすでに三悪趣へ至る道筋しか存在していない。したがって、オウム真理教のこの堕胎に対する経典を背景にした見解は、末法であり、カーリー・ユガであるこの世の中にとって受け入れられないかもしれない。

ところで、大川隆法君、よく聴きなさい。あなたは、あなたの妻はアプロディーテーの生まれ変わりであり、あなたはヘルメスの生まれ変わりだと言っているが、仏教とギリシャ神話は本質的に別物なのである。次に、堕胎についての、経典とは全く異質のギリシャ神話を載せることによって、君が宗教をもとにした商人から足を洗うことをお勧めする。

レアーとクロノスの時代

クロノスの代がはじまった。クロノスは姉のレアーと結婚した。母ガイア、父ウーラノスはともに、クロノスもやがて息子のひとりに主権をうばわれると予言した。そこでクロノスは、毎年うまれる子供たちをつぎつぎとのみこんでしまった。歎き、憤ったレアーは、父母に、どうしたら夫に気づかれずに子供をうめるか、またどうしたらのみこまれた子供たち（ヘスティアー、デーメーテール、ヘーラー、ハーデース、ポセイドーン）を救いだせるかを問うた。両親は娘の願いをきき、六人目の子供をみごもったと

き、レアーをクレータ島へいかせ、こっそりとお産させた。その地でガイアはうまれたばかりの六人目の子ゼウスをうけとり、その子をマイガイオーン山の洞窟にかくした。レアーはクロノスに襁褓につつんだ石をわたし、クロノスはそれをうまれた子と思ってのみこんだ。

（山田宗睦著『ギリシア神話』保育社より）

メーティス

一説によると、ゼウスが最初に選んだ相手は、メーティス（叡智）である。彼女は変身してはのがれたが、とうとうゼウスにつかまり妊娠した。ガイアは、うまれる子は女だがそのつぎはらめば男の子で、この男子は、クロノス、ゼウス同様、その父をたおして主宰神になるとつげた。ゼウスはメーティスを寝室につれこみ、いきなりのみこんでしまった。

トリトーン河のほとりでゼウスははげしい頭痛におそわれる。胎児がその頭で成長したのである。ゼウスのうめきをきいてヘルメースがかけより、ヘーパイストスにもってこさせた斧で頭を割った。そこから軍装したアテーナーがとびだして、うぶ声をあげた。

（山田宗睦著『ギリシア神話』保育社より）

ところで、アプロディーテーという女神についてもどう認識してるのやら。この女神が

誕生したときに、エロース（性愛）とヒーメロス（欲望）がつきしたがった、ということが象徴しているように、アプロディーテーは多くの愛欲物語の主人公になっている。参考のために、一話載せておく。

アプロディーテーの浮気

つぎはアプロディーテーをめぐるオリュムポスの神々のさやあての物語である。ここではアプロディーテーは工匠の神へーパイストスの妻で、軍神アレースがその情人ということになっている。

妻とアレースの仲をへーリオスからきいたへーパイストスは、その巧みな技で、目には見えず断つこともできない蜘蛛（くも）の巣のように細い鎖網をつくった。それを寝台の柱のまわりから天井の梁にとりつけ、じぶんは、レムノス島へ出かけたようにみせかけた。たちまちアレースがアプロディーテーへの燃える思いであらわれ、

「おいで、愛する人よ、臥床（ふしど）へいき横になってたのしもう」

といった。養父ゼウスのもとからかえってきたばかりのアプロディーテーも、久しぶりにアレースとねることを喜んだ。二人は寝台にあがり、たのしみののち眠りにおちた。このときへーパイストスの巧妙な鎖網が天井から落ちてきて、二人にまきついた。

へーパイストスは怒りの声をあげた。

「大神ゼウスよ、また神々よ、わしの寝台の上で愛しあい眠りこけている二人を見てくれ。わしがこの恥しらずの娘のためにした結納の贈物をゼウスがかえすまでは、けっしてこの鎖をとかないぞ。まったく、美しいが品行のよくない娘だて」

神々たち、ポセイドーン、ヘルメース、アポローンらがやってきた。女神たちは、さすがにはずかしがって家にとどまっていた。というのも、太陽はいぜん、裸のままの二人の上に照りかがやいていたからである。アポローンがヘルメースにきいた。

「お前なら、たとえつよいいましめをうけても、黄金のアプロディーテーとねたいと思うかね」

「ああ、この三倍のつよいいましめをうけ、男神のほかに女神たちみんなが見ていてもかまわん、黄金のアプロディーテーとねたいものだ」

神々はわらったが、ポセイドーンだけはわらわず、アレースに償いを支払わせるから、いましめを解くようにたのんだ。ヘーパイストスはなかなかうんといわなかったが、やがて二人を解きはなした。二人はとびおきた。アレースはトラキアへ、アプロディーテーはパポスへ去った。

この話には後日譚がある。ポセイドーンは、あのとき一糸もまとわないアプロディーテーの裸身に欲情をおぼえたのだったが、彼女は仲介のお礼に彼の愛欲をみたしてやり、ロードスとヘロピロスの二人の息子をうんだ。アレースは償いを払いはしなかったが、ヘーパイストスも美しい妻を手ばなすつもりはなかったから、このために別れることなど、あるはずはなかったのである。

（山田宗睦著『ギリシア神話』保育社より）



第三章 憲法論

二十歳を過ぎた男女には、宗教の自由が保障されている。これが日本国憲法である。この日本国憲法の内容を考えるならば、二十歳を過ぎたものは、出家し、そして修行することが認められている。それは何人の反対にあったとしてもである、ということができる。つまり信仰は、父母、兄弟、夫や妻などの反対に左右されてはならないということである。

しかし、今回の強制捜査において、国家権力である警察が行なっていることは、まずビラを配っていると、それだけで逮捕し、そして警察へ連れていき、そして肉親を呼び、肉親のもとに帰らせる。つまり、親族のもとに帰らせるのである。もちろん、彼らの意思は出家修行を続けたいという意思があったとしても、そのようにさせるのである。これは明らかに警察権力の憲法違反であると考えることができる。

わたしは憲法違反についてなんら否定するものではない。というより、もし本当に国家がそのようにしたいとするならば、憲法を改正するべきなのである。つまり、権力に都合の悪い宗教に対しては、たとえ二十歳を越していたとしても国家権力である警察あるいは公安はそれに立ち入ることができる、それに介入することができるという明文をはっきりと出せば、それでいいのである。

このような言い方をすると非常に投げやりに聞こえるかもしれない。しかし、現実がそうである以上、そして一般の国民がそれを支持するとするならば、憲法改正をなし、法改正をなすべきであると考える。しかし、もしそれができないとするならば憲法において日本国民は平等であるがゆえに、このような弾圧をやめないと、この日本はとんでもない悪業の蓄積をなすことになるだろう。

ここでまた権力が出家修行者教団に介入してどのようになったかを仏典を引用し、その後選挙、波野村から始まるオウム真理教に対する弾圧によって、その弾圧の中心の者たちがどうなったのか、あるいは神々が管理している気象がどのように変わったのかについて、これから見ていきたいと思う。

これはまさにオウム真理教が、仏典と同じようにしっかりと、法則、真理の法則を実践している教団であることを裏付けている一つの証明であるとわたしは確信したのである。

犬激苦地獄の大王

輪廻転生談五二二「サラバンガ輪廻転生談」註釈より
原訳：オウム真理教パーリ聖典翻訳チーム

国王ナーリキーラは、遊戯地に苦行者たちが来ていると聞いた。一人の偉大な苦行者が、五百人の弟子たちを引き連れて、雪山からやってきたのだ。この苦行者たちはダンタプラ市民に法則を説き明かし、評判となっていた。

市民たちだけではなく、大臣たちもその苦行者から話を聴き、誉め称えた。そこで、国王ナーリキーラもその苦行者に会うことにしたのである。

「苦行者よ、わたしに法則を語ってくれ」

「わかりました、国王陛下。はばかりながら、陛下は人々を正しく統治なさっておられますか?」

「どういうことだ?」

「陛下は法則に従って、正しい統治を行なっておられるのでしょうか? 人々は抑圧されているようです」

「何、余の統治の仕方が間違っているとでも申すのか」

「そのとおりでございます、陛下」

国王は心の中で激しく怒った。

「許さん! この大ボラ吹きの修行者は、市民の面前でわたしの統治を批判した。絶対に許さん、覚えていろ!」

だが、ナーリキーラ王は口ではこのように告

げたのだ。
「明日、宮殿に来てください」

＊　＊　＊

翌日、苦行者たちは宮殿を訪れた。そこで国王はにっこりと笑って、
「苦行者方、『食べ物』を施しましょう。皿をこちらへお渡しください」
苦行者たちは素直に皿を差し出す。だが、返ってきた皿には、食事など載っていなかった。残飯ですらなかった。皿に盛られたのは、糞だったのである。
「わっはっはっは、お前らにはそれがお似合いだ!」
下品に笑うナーリキーラ王の合図で、門が重々しく閉じられた。苦行者たちを取り囲むのは、棍棒や銅の棒を持つ男たち。襲いかかって五百人の苦行者たちの頭を次々に叩き割る。
宮殿の門の中は血でまみれた。
さらにそこに何かがやってきた。犬だ。犬の群れが放たれたのだ。逃げようとする苦行者を、国王の配下たちは捕らえ、足を引っ張る。そこへ犬たちは食らいつく。目を覆うような悲惨な光景が繰り広げられた。
「ざまあみろ、思い知ったか。余の統治を批判するような苦行者どもめ、結局犬に食われて死んでしまい……」
だが、国王も最後まで言うことはできなかった。突然、大地が裂けた。そして、国王はその裂け目から堕ちてしまったのである。
そこは「犬の大激苦地獄」であった。地獄に流転して国王の身長は三百メートルもの巨大な身体となったのだ。

この巨大な身体を、大きな象の腹ほどもある大きさの五色の犬たちが追いかける。逃げても逃げ切れるものではない。激しい恐怖の中、国王は犬に肉を食いちぎられてしまう。

国王の体は、犬たちによってさらに追い落とされた。そこは燃え上がる鉄の大地。百キロメートルを越える焼けた鉄の上で、彼はさらに犬に食われる。犬は口いっぱいに国王の肉をほおばり、引き裂いていく。もがく国王に対して、犬たちは全く容赦ない。

五百人の師である苦行者は、大地を裂いて、この激苦地獄を人々に見せたのである。

「聖なる修行者に対して攻撃する者は、このような激苦地獄に堕ちるのだ」



槍と杭の激苦地獄

輪廻転生談五二二「サラバンガ輪廻転生談」註釈より
原訳：オウム真理教パーリ聖典翻訳チーム

アッジュナ王は千の腕を持つ。

王の楽しみは鹿狩りだった。数多くの鹿を狩り、その肉を炭火で焼いて食べるのである。彼の弓の腕は確かに一流であった。

鹿の群れがやってきた。アッジュナ王は潜んで、狙いを定める。静かに静かに、弓を引く。

コトリ、と音がした。

木の実のついた枝が落ちてきたのだ。驚いた鹿たちは逃げていく。アッジュナ王は弓を下ろした。

「いまいましい枝だ……」

とよく見ると、木の上には人影がある。見れば、木の実を抱えているではないか。その男が枝を落としたのに違いない。

「よくもわしの鹿を逃がしやがって……!」

アッジュナ王は、矢を取って、弓を引き絞り、狙い定めて男を射抜く。

「うわあっ」

王の弓の腕は確かだった。矢は見事に男を貫いた。しかも、そのやじりには毒が塗ってあったのだ。

男はぐらりと揺らぎ、倒れて木から落ちる。それだけでは済まなかった。ひっくり返って落ちた男は、頭を根株に打ちつけたのだ。さらに

悪いことに、先のとがった杭が頭に刺さった。
男は死んだ。

＊　＊　＊

その男は、偉大な成就者アンギーラサ・ゴータマであった。もしアッジュナ王の腕が劣っていれば、あるいはその男が成就者でなければ、結果は違っていたかもしれない。しかし、修行者を殺したアッジュナ王に、すぐさま報いが返ってきたのは当然である。

大地が裂けた。そして大地に呑み込まれたアッジュナ王は、「槍や、先のとがった杭の激苦地獄」へと流転したのである。

王の体は三百メートルになった。そこへ激苦地獄の番人たちがやってくる。燃え上がる武器で王は打ちのめされた。そして追いたてられて王は山へ向かう。燃え上がり、焼けつく鉄の山を登るよう強要されるのだ。

全身を焼き焦がすように燃えている鉄の山を何とか登りつめると、突然風が吹いてくる。王は風に吹き飛ばされて、まっ逆さまに落ちていく。

眼下に広がるのは百キロもの広さの燃え上がる鉄の大地。その大地から直径一メートルもの太い大きな鉄の杭が立ちのぼる。杭の先は鋭くとがっている。そこに頭から落ちてきた国王は、まさに頭から太い杭に刺し貫かれ、まっ逆さまに立っている。

その瞬間、地は燃え上がり、このとがって太い鉄の杭は燃え上がり、国王の体まで焼きつくす。国王の悲惨な叫び声が、地獄中に響きわたった。

偉大な成就者を迫害する者は、このような苦しみを永い間、味わい続けなければならない。

力ある人食い鬼神の破滅

「狂喜句」第四　メーギヤ品【四】サーリプッタより
原訳：オウム真理教パーリ聖典翻訳チーム

二人の人食い鬼神が歩いていた。まさに月の夜。鬼神たちは北から南へ、所用があって歩いていた。そろそろカポータカンダラーという場所である。

「あそこにいるのは出家修行者か」

「そのようだな。あの頭は剃ったばかりのようだ。きれいになっている」

「……面白いことを思いついたぞ」

一方の人食い鬼神がいたずら気を出して、もう一人にささやく。

「この出家修行者の頭を殴りつけてやろうと思うんだ」

「だめだよ。出家修行者を襲ってはいけない。その出家修行者は、偉大なる神通を持ち、大いなる威神力を持っているのだ」

普通の人間から人食い鬼神は見えない。鬼神は出家修行者をのぞき込む。

「いやあ、やっぱり殴りつけてやりたくなるツラだなあ」

「だめだったら。その出家修行者を襲ってはいけないよ。彼は偉大なる神通を持ち、大いなる威神力を持っているのだから」

その出家修行者は静かに座り、あるサマディに入っていた。人食い鬼神に狙われていること

など、全く気づいていないように見える。
「ようし、この出家修行者の頭を殴りつけてやる！」
「だめだ！　その出家修行者を襲ってはいけない！　この修行者は偉大なる神通を持ち、大いなる威神力を持っているんだ」
　その人食い鬼神は、もう、友の言うことを聞く気がなくなっていた。拳を振り上げる。――この鬼神の一撃は、実は三十五メートルから三十七メートル半ほどもある龍を一撃で叩きのめし、水中に沈ませるだけの力がある。また、壮大な山の峰を一撃で叩き落とすだけの力があるのだ。どう考えてもこの修行者は、一瞬後には血と骨と肉の塊と化しているはずだ。
　もう一人の人食い鬼神は目をつぶった。
　悲鳴が上がった。

＊　＊　＊

「焼かれる！　焼かれる！」
　叫んだのは、修行者ではなく人食い鬼神であった。炎に包まれているかのようにあがきながら、彼は大激苦地獄に堕ちていったのである。
　修行者はそのまま座っていた。そこへ、もう一人の修行者が現われた。
「聖者サーリプッタ、大丈夫か？　命に別状はないか？　苦しみはないか？」
　殴られた出家修行者サーリプッタ――つまりサキャ神賢の第一の弟子――は、頭をさすりながら答えた。
「聖者モッガッラーナ、わたしは大丈夫だよ。それに、命に別状はない。でも、頭に少しだけ痛みがあるんだ」
「ああ、それは素晴らしい。聖者サーリプッタ

には、何とも偉大な神通があり、何とも大いなる威神力があるものだ」
「一体、何があったんだ？」
「一人の人食い鬼神が、君の頭を殴りつけたんだ。その人食い鬼神は、巨大な龍を一撃で倒し、壮大な山の峰を一撃で崩すような力の持ち主だったのだよ。だが、逆にその人食い鬼神自身が地獄に堕ちてしまったんだ。それに、君は痛みを少ししか感じていないという。何と素晴らしいことだろう」
「それはまた素晴らしいことだね、聖者モッガッラーナ。君には、何と偉大な神通があり、何と大いなる威神力があることだろう。人食い鬼神を見ることができるのだから。でも、わたしは泥の悪鬼すら見ていないんだよ」
さすがはサキャ神賢の高弟たちである。サーリプッタは全く傷つくことがなく、マハーモッガッラーナは人の目に見えない鬼神をありありと見ることができたのだ。
このような聖者に対しては、危害を加えることはできず、逆に危害を加えた者が地獄に堕ちていくのである。

＊　＊　＊

さて、この二人の会話を遠く離れたラージャガハ市の竹林精舎から聞いている人物がいた。二人の偉大なる師、サキャ神賢である。この事実を知って、サキャ神賢はこのような狂喜句を唱えられた。

「岩のような心を保つ者は、
心が揺らぐことがない。
様々な欲求に対する愛著を離れ、



感情を害するようなものにも感情を害さない。
このように練り上げられた心の持ち主に、

どこから苦しみが来ることがあり得ようか」

出家修行者迫害の報い

輪廻転生談四九七「マータンガ輪廻転生談」より
原訳：オウム真理教パーリ聖典翻訳チーム

❖一　神聖天の妻

月に一度か二カ月に一度、ディッタマンガリカーは遊戯地に来る。この裕福な商人の娘は従者たちを大勢引き連れて遊ぶのだった。

その日、見慣れない男がじっとこちらを見ていた。ディッタマンガリカーのいる幕の近くへやってきて、じっと見ている。

「この人はだれ？」

「賤民（せんみん）です」

と従者が答えた途端、ディッタマンガリカーは香水を取り寄せた。

「見てはならない者を見てしまった」

その香水で両目を洗い清め、彼女はさっさと帰ってしまったのである。

怒ったのは彼女の従者たちだった。

「こら、賤民！　お前のせいで、俺たちが今日ここでもらえたはずの酒やごちそうが台無しになってしまったじゃないか！」

「許さないぞ」

拳が賤民を打つ。蹴りが入る。賤民は気を失って倒れた。

＊　＊　＊

　ディッタマンガリカーの父は、門を出ようとしたところにだれかが横たわっているのを見た。
「何だね、君は。人の家の前で横になって」
「わたしはあなたの娘さんの従者によって、何の落ち度もないのにこんな目に遭わされました。他に何もいりません。わたしにはディッタマンガリカーさんだけが必要なのです」
　父親はそのまま放置した。
　そして一日が過ぎ、二日が過ぎ、そして六日が過ぎて七日目。ずっとその場所にとどまった賤民に、父親はついに根負けした。
「わかった。娘を与えよう」
　ディッタマンガリカーは納得し、家から出てくると、この賤民を助け起こそうとした。
「立ってください。あなたの家に行きましょう」
「いや、だめなんだ。お前の取り巻きによって、わたしはずいぶん殴りつけられて、衰弱してしまった。わたしを背中に乗せて行ってくれないか」
　白昼堂々と、市民が見ている前を二人は市から出ていき、賤民の村へ行ったのだった。

＊　＊　＊

　今やディッタマンガリカーの夫となった賤民は、マータンガ賢者と呼ばれていた。生まれた身分は低いが、智慧はあったのだ。
　しかし、この社会では身分の違う者たちが交わることは禁じられていたのである。
　結婚して三日後、マータンガ賢者は、妻ディッタマンガリカーに語りかけた。妻に最高の利益と最上の栄光を与えようとしたのだ。

「わたしは今から森へ行く。それは、わたしたちが生活を続けるためなんだ。その間、浮気してはいけないよ」
マータンガ賢者は、森に行き、そして出家した。一週間後、家に帰ってきて言うには、怠惰になることなく熱心に修行し、わずか一週間で八つの生起のサマディと五神通を身につけてしまったという。そして妻に何事かを告げ、再び雪山に去っていった。

＊　＊　＊

賢者が再び雪山に帰ったあと、ディッタマンガリカーはバーラーナシー市へ行き、奇妙なことを言い出した。
「わたしの主人はマータンガではありません。大神聖天、つまり創造神がわたしの主人なのです」
「では、今、あなたの主人はどこにいるのだ？」
「神聖天の世界に行きました」
「いつこちらに来ますか、ご主人は」
「今日から七日目の満月の日、月を壊してここに来るでしょう」

＊　＊　＊

予言は成就した。
「これはまぶしい！」
カーシ国の首都、一五〇キロメートルもの広さのバーラーナシー市すべてを煌々と照らし出す光が月から舞い降りる。
「月が大変だ！」
「壊れた！」
人々は一様に奇跡を見た。月が壊れ、そこか

ら大神聖天が舞い降りてきたのである。偉大な姿の素晴らしい神は、バーラーナシー上空を三回旋回すると、市中に降り立ったのだ。バーラーナシー市は興奮に満ち満ちた。

人々が香料・花飾りなどを捧げて大神聖天を賛美する。

「我こそは大神聖天なり。これより賎民の村へ向かうぞ」

唯一神を崇拝する人々は大慌てで賎民の村へ行き、ディッタマンガリカーの家を飾りに飾った。清潔な布、四種の香料、花、煙、天蓋、寝台、香油の灯明……。門には銀色の砂粒と花と旗。

こうして飾りたてられた家に、偉大なる大神聖天が降り立ち、そして中に入ったのである。

＊　＊　＊

もちろんこれは、マータンガ賢者が大神聖天の姿をとって降りてきたのであった。だが、バーラーナシー市の人々はだれもが大神聖天その人だと信じたのである。

「ディッタマンガリカーは大神聖天の妻だ」

さらにもう一つの出来事が起こった。ディッタマンガリカーの懐妊である。マータンガ賢者が妻のへそを親指で触れると、妻の子宮に胎児が宿ったのであった。

偉大なる「大神聖天」の役の賢者は、妻に予言した。

「お前は男の子を出産することになるよ。お前も、息子も、最高の利益を得、そして最高の栄光を受けることだろう。お前の足を洗った水は、バラリンゴの大陸のすべての王たちが神聖なものとして扱うだろうし、お前の水浴した水は不死の薬になるだろう。その水を頭に降り注ぐ者

たちは、ありとあらゆる病から解き放たれることになるだろう」
　ディッタマンガリカーも半信半疑で聞いている。だが、これほどの力を持つ聖者の言葉だ。成就しないわけがあろうか。
「不吉な者はお前に近づかないだろう。逆に、お前が足を乗せる台の上に頭を置いてご機嫌うかがいに来る者たちは金千個を施してくれるだろう。聞こえる場所にやってきて挨拶する者は、金百個を施してくれるだろう。見える場所で挨拶する者は、一枚の四角い銅貨を施してくれるだろう。だから、怠けてはいけないよ」
　そう言い残し、家から出、衆人環視の中、月の中に去っていったのである。

＊　＊　＊

　神聖天の崇拝者たちは夜通しそこで過ごし、朝になるとディッタマンガリカーを黄金のみこしに乗せて、かつぎ上げて市に入った。
「大神聖天の奥様がいらっしゃったぞ！」
　どこに行っても彼女のまわりには人垣ができた。だれもが香料と花飾りで迎える。
　彼女が足を乗せる台の上に頭を置いて挨拶することができた者は、金千個を置いていく。声が聞こえるところまで近づいた者は、金百個を残していく。そして一目彼女を見た者は、一枚の四角い銅貨を置いていった。
　こうして、彼女が一五〇キロのバーラーナシー市をぐるりと巡っただけで一億八千万の財産を得たのである。
　それだけではとどまらなかった。
　市の中心に巨大なテントを建て、豪華な暮らしをさせたのだ。その目の前で、今度は宮殿建

設が始まったのである。七つの門、そして七階建ての巨大な宮殿だ。

＊　＊　＊

テントの中で息子が生まれた。「テントにいる状態」ということでマンダヴィヤと名づけられたのだった。

建設に十カ月を要した大宮殿もようやく完成し、ディッタマンガリカーとマンダヴィヤの母子はそこに住むことになる。

息子マンダヴィヤは七、八歳のときから教育を受けた。それはこのバラリンゴの大陸の平原に住む者の中でも偉大な師たちが集まり、三つの祭司の聖典を習得するに至ったのである。

なんとも恵まれた環境の中で、マンダヴィヤは育つことになったのだ。

❖二　マータンガとマンダヴィヤ

マンダヴィヤ少年は少々鼻が高くなりすぎていたかもしれない。

その日の大宮殿の状況を描写してみよう。この宮殿には一万六千人の祭司たちが養われている。彼らを常に養っているだけでも大変なものだが、その日は特別な祭典の日であった。大量の乳粥が特別に用意されたのだ。

一万六千人の祭司たちは、第四の参道の門に座り、乳粥を味わっている。ただの乳粥ではない。黄金の味の新しい透明な上級のバター、蜂蜜、粒の砂糖で煮られた何とも贅沢な乳粥だ。

マンダヴィヤ少年も、全身を装飾品で飾り立て、黄金の上履きを履き、手には金の棒を持って、

「ここに透明なバターを乗せて」
「ここに蜂蜜を乗せて」
と歩き回っていたのである。

＊　＊　＊

マンダヴィヤ少年は、奇妙な男を見た。
染められた二枚の布でできたマントを着て、腰帯を結び、ごみ捨て場から拾ったボロでつくった衣服を正装衣とし、粘土の鉢を持っている。
その場所はまさに、第四の参道の門の布施の会館であった。市民に布施を施すための場所である。
「何だ、このきたならしい、ごみくずの中の鬼神のようなこの出家者は」
少年は男に問いかけた。

「みすぼらしい身なりの男よ、
お前はどこからやってきたのか。
ボロ切れを着て、
泥の悪鬼のような姿、
ゴミの布きれをのどに結んで、
寄贈を受けるに値しないお前は
一体全体何者だ?」

「栄光のある者よ。
あなたの食べ物は有名だ。
それは噛まれ、食べられ、飲まれる。
施されたものによって生きる者を、
つまり、残飯を施される者を
あなたは知っているはずだ。
犬の料理人、つまり賤民に施しなさい」

「祭司たちのためである、と

このわたしの食べ物は知れ渡っている。
あるいは自分自身のために、
このわたしの食べ物があると信じる。
ここから立ち去れ！
どうしてここに来たりするのか。
わたしのような生まれの者は、
お前に施すことはない」

「乾いた土地と低い土地、水の多い田畑に、
実がなることを望んで種をまく。
このようなことを信じて、布施しなさい。
するとあなたは、
寄贈を受ける立場になるだろう」

「世界には多くの田畑がある。
このわたしが多くの種をまき、
わたしの出生を見守り、
わたしにマントラを授けた祭司たちが、
ここでは、優れて穏やかな多くの田畑だ」

「出生の地位を自負し、高慢になり、
切望し、邪悪心を持ち、
官能的に不節制であり、迷妄の中にある。
これらは悪い状態だ。
まさにそういうすべての者は、
ここでは、穏やかでない多くの田畑だ」

男がこのように諭すと、少年は怒り始めた。
無駄口を叩かれているように思われたのである。

「おい、どこに行ったのか、
門衛のウパジョーティヤとウパッジャーヤ、
それからバンダクッチ！
こいつを処罰し、殺害しろ！

のど首を捕まえ、惨めに打ちのめせ！」

三人の門衛たちはすぐにやってきた。

「愛欲神のように偉大なお方よ、何をいたしましょうか」

「お前たちは、この賎民が門を通るのを見ていたか？」

「見ていません。どこからここに来たのか、わかりません。空からでも飛んできたのでしょうか。魔術師、あるいは神秘力を身につけているのでしょうか。今、どうしてこんな者がここにいるのでしょう」

「そうか、わかった。この男の顔を殴りつけ、顔を裂き、棒や竹べらで背中を引き裂き、攻撃し、のど首を捕らえて、この惨めな男を打ちのめせ。そして、ここから追い払ってくれ！」

「かしこまりました」

門衛たちが飛びかかるその直前、男は飛び上がり、空中から言葉を投げかけた。

「山岳を爪で掘り、
鉄を歯で噛み、
火炎を飲むような運命に至ろうとする者は、
尊い人を罵倒(ばとう)する」

男は空中を飛んで東の門へ向かった。そこで施し物としてもらった雑多な食事を寄せ集めて食べたのである。

彼の歩いた後には、なぜか足跡が残っていた。

＊　＊　＊

突然、マンダヴィヤ少年の首がねじれた。

少年は何が起こったかわからなかったが、頭

はねじれて背中に向いた。手足は垂直になり、硬直してしまう。目は死んだように白目になり、硬直した体で横たわった。だが、殺されはしなかったのである。

祭司たちは口からよだれを垂らし、あちらこちらに首がねじれていた。

＊　＊　＊

知らせを受けてやってきたのは、母親のディッタマンガリカーである。一万六千人の祭司と息子が倒れている惨状を見て、彼女は思わず尋ねた。

「背中に向けて頭がよじられ、
腕を伸ばし、動けない。
白い目は死んだ者のようだ。
だれがわたしの息子を
こんな目に遭わせたの？」

「みすぼらしい身なりで、
ボロ切れを着て、
泥の悪鬼のような姿で、
ゴミの布きれをのどに結んだ出家者が、
ここにやってきたのです。
彼があなたの息子を
こんな目に遭わせたのです」

居合わせた人の証言を聞いて、彼女は思い当たった。

「こんな力を持つ人は、あの人しかいない。間違いないわ、その人はマータンガ賢者以外のだれでもない。それにしても、あの方は聖慈愛を完全に身につけておられるのだから、こんなに



多くの人を苦しめたまま去ってしまうということはないでしょう。一体、どちらに行かれたのかしら」

そして、周囲の人に尋ねる。

「一体どちらの方向に、
広大な智慧を持つ方は行かれたの？
青年たちよ、わたしに教えてください。
行って、過ちを償わなければなりません。
そうすれば息子の命は助かるでしょう」

「広大な智慧を持つ方は、
空に向かって行きました。
あたかも満月、十五夜の月のように、
まっすぐまっすぐ、
彼は東に向かっていきました。
絶対の真理を獲得した、
素晴らしい容姿を備えた尊い方は」

そして彼女は、マータンガ賢者を探しに行った。黄金の水瓶（みずがめ）と黄金の器を女奴隷たちに持たせて、東の方へ進んでいくと、賢者が残していた足跡が見つかった。

その足跡をたどっていくと、汚い格好の出家修行者が椅子に座って施し物を食べていた。まさしく、それはマータンガ賢者である。

ディッタマンガリカーは黄金の水瓶で、彼に水を施した。賢者はその水で手を洗い、口をゆすいだのである。

そこでディッタマンガリカーは尋ねた。

「背中に向けて頭がよじられ、
腕を伸ばし、動けない。
白い目は死んだ者のようだ。

だれがわたしの息子を
こんな目に遭わせたの?」

だが、その「犯人」はマータンガ賢者ではなかったのだ。

「人食い鬼神に大いなる威神力があることは間違いないことである。
彼らは素晴らしい容姿の尊い人たちに従う。
彼らは、出家者が心を害されたと知った。
だから、人食い鬼神たちが、
あなたの息子をそのような目に遭わせた」

「そうですか、わたしの息子を
このような目に遭わせたのは人食い鬼神。
神聖行を送る方、
あなたはわたしの息子に対して怒らないで。
わたしには、あなただけが救いなのです。
出家修行者よ、息子への悲しみのために
あなたに従います」

「彼はわたしに敵意を抱いた。
わたしには何の感情もない。
あなたの息子は、
祭司の聖典を習得したという自負によって
酔ってしまっている。
せっかく祭司の聖典を習得したのに、
何にもわかっていないのだ」

「出家者よ、まさに確かに間違いなく、
彼の意識は瞬く間に理性を失いました。
広大な智慧を持つお方、
一つの罪をお許しください。
賢者方に、激怒の力はないはずです」

「残飯としてわたしに与えられた
この施し物を、
智慧少なきマンダヴィヤに食べさせなさい。
そうすれば、人食い鬼神たちは、
彼に力を及ぼせなくなる。
そしてあなたの息子は、
その病気から回復するだろう」

こうして薬が与えられた。マータンガ賢者は、残した薄粥を黄金の水瓶に注いで、そして雪山に帰っていった。

母親はすぐに帰り、息子の口に薄粥を落とした。その瞬間、首をねじっていた人食い鬼神は離れたのである。

彼らは、市を司る神々であった。賢者が誹謗されたのを見て怒り、少年と祭司たちをこのような目に遭わせたのだが、賢者の息子であるということで手加減していたのである。

少年マンダヴィヤは泥を拭いながら立ち上がった。

「お母さん、これはどういうことですか」

「マンダヴィヤ、あなたが何をしたのか、自分でわかっているでしょうね。来なさい。布施を受けるにふさわしいお方に、あなたがなした仕打ちの報いを、その目で見なさい」

倒れる一万六千人の祭司たちを見て、マンダヴィヤはさすがに深く後悔した。

「マンダヴィヤ、あなたはとんでもない愚か者です。布施の大いなる果報について、全くわかっていないじゃないですか。寄贈を受けるにふさわしい者たちは、この祭司たちではありません。まさにマータンガ賢者のような方々です。これからは、こんな破戒者に布施を施してはなりま

せん。戒を守る者たちに施しなさい、いいですね」

そして、さらに詳しく説いたのである。

「マンダヴィヤ、あなたは愚か者、
智慧が少ない。
様々な功徳の田畑がありながら、
正しい智慧を持っていないあなたは、
大いにけがれに染まった者たち、
けがれたカルマの者たち、
自制力のない者たちに布施を施した。

結ばれた髪、そして黒いカモシカの革の服、
古井戸のように長く伸びた髭。
みすぼらしい容姿のこの修行者たちを見よ。
結髪、黒いカモシカの革をまとった
出家修行者は、

智慧が少ない者を保護したりはしない。
愛著と、邪悪心と、非神秘力から離れ、
煩悩の漏れを破壊した供養値魂たちに、
大いなる果報が施されるべきなのだ」

マンダヴィヤ少年はうなずいた。母の訓戒はさらに続く。

「だから、マンダヴィヤ、あなたはこれから、このような破戒者たちに施してはなりません。八つの生起のサマディを得、五神通を身につけた出家修行者、あるいは祭司、独りで成就した者たちに布施を施しなさい。——さあ、息子よ、来なさい。あなたの親しくしていた者たちに不死の薬を飲ませて、病気を取り去ってあげましょう」

賢者のくれた薄粥の残りを水で薄めて、一万

六千人の祭司たちの口にそそぎ込んだ。彼らはたちまち起き上がれるようになったのである。
　だが、他の祭司たちによって、彼らは祭司ではなくなった。
「彼らは賎民の残り物を飲んだのだ」
　そこで、一万六千人は名誉を傷つけられたと感じ、バーラーナシー市を去っていったのである。
　もちろん、マンダヴィヤとその母親は宮殿にとどまった。

❖三　昇らない太陽

　さて、話はマータンガ賢者に移る。
　ヴェッタヴァティーという河の岸に、一人の祭司が出家して住んでいた。名をジャーティマンタという。彼は名のとおり、出生（ジャーティ）がよく（マンタ）、その生まれの良さを誇りにしていた。
「よし、彼の高慢さを打ち砕いてあげよう」
と考えたのが、マータンガ賢者。彼はジャーティマンタの居場所の上流で生活することにしたのである。

＊　＊　＊

　ある日、ジャーティマンタが河で髪を洗っていると、髪に爪楊枝がまとわりついた。取ってみると、噛まれた跡まである。
「卑賎な者がいる。滅びてしまえ！　この不吉なものがどこから来たのか、調べねばならない」
　ジャーティマンタが上流へ向かうと、マータンガ賢者が飄々（ひょうひょう）と座っている。

「お、お前はどの身分の生まれだ！」
「わたしか？　賎民だ」
「この河に爪楊枝が落ちていた」
「あ、それはわたしのだ」
「こ、この、賎しい奴め、賎民め、不吉な者め、滅んでしまえ！　ここに住むな。下流に住め！」
そこでマータンガ賢者はジャーティマンタの下流に住むことにした。
ところが、再びジャーティマンタはマータンガのところへ怒鳴り込むことになる。
「おい、お、お前か、この爪楊枝は」
「それ？　そうだ」
「お前の爪楊枝は流れに逆らって、俺の髪にまとわりついたんだ！　賎しい奴め、滅びろ！　もしここに住み続けるつもりなら、七日目に頭が七つに割れてしまうぞ！」

＊　＊　＊

七日目はやってこなかった。
というのも、太陽が昇らなくなったからである。人々は困って、苦行者ジャーティマンタに尋ねに行った。
「尊者よ、太陽を昇らせないのは、あなたの仕業ですか？」
「いや、そうじゃない。わたしにはそんなことはできやしない。できるとしたら、あいつだ」
ジャーティマンタは川下を指さして、
「河岸に一人の賎民が住んでいる。こんなことをするのは、奴しかいない」
そこで人々はマータンガ賢者のもとに押し寄せた。
「あなたですか、太陽を昇らせないのは」
「そう、そのとおり」

「どうしてそんなことをなさるのですか」
「あなた方と親しい苦行者は、罪のないわたしを呪いました。しかし、わたしが怒るなら、戒を破ることになります。そこでこのように太陽を昇らせないようにし、彼の呪いの期限である七日目が訪れないようにしたのです」
「それでは、どうすればいいのでしょう」
「あの苦行者ジャーティマンタがここへ来て、許しを乞うためにわたしの両足にひざまずくなら、太陽を昇らせてあげましょう」
人々は今度はジャーティマンタのところへ押し寄せ、引きずり出し、賢者の足元にひれ伏させた。
「これでよろしいですか、尊者よ。太陽を解放してください」
「いや、まだだめだ。今、わたしが太陽を昇らせたら、逆にこの苦行者の頭が七つに割れてしまう」
「それでは、どうすればいいのでしょう」
「粘土を持ってきなさい」

＊　＊　＊

太陽が昇った。
苦行者は水の中にいて、頭に粘土を乗せていた。太陽の熱が照りつけ、そして粘土が頭の代わりに七つに割れたのである。
こうして苦行者の高慢は打ち砕かれた。

❖四　メッジャ国滅亡

さて、あのマンダヴィヤ少年とともにいた一

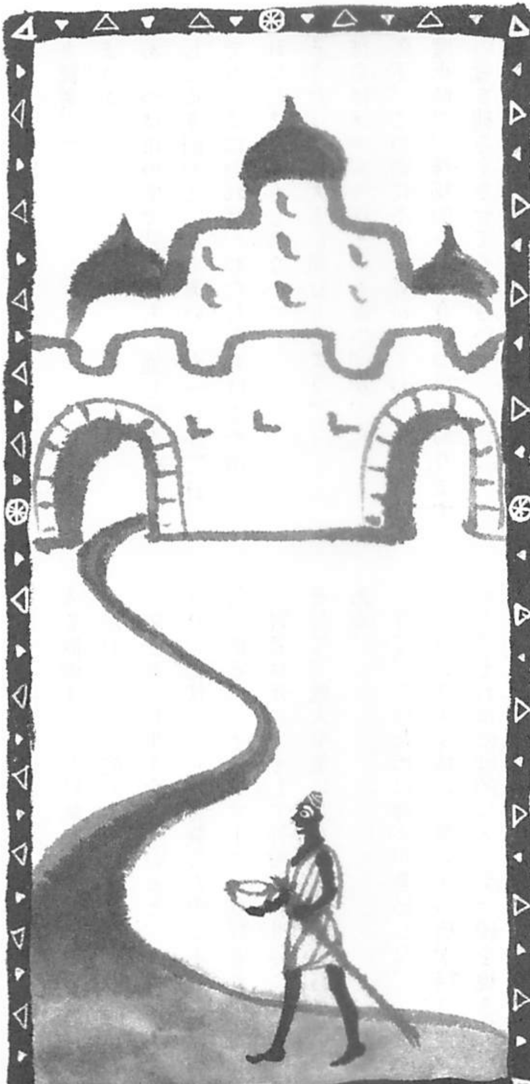
万六千人の祭司たちはどこに行ったのであろうか。彼らは、バーラーナシー市を去り、メッジャ国に移っていた。

ある日、その中の一人の祭司が顔色を変えて仲間たちに告げた。

「大変だ！　あいつがいる！」

「あいつとは、もしかして……」

「あいつといえば一人しかいない。俺たちがバー



ラーナシーを離れる原因となった、あのマータンガ賢者だ」
「まさか……」
「あいつは市の中で鉢を持ち、施し物を得ようとして歩き回っている。あいつが一日か二日だけでもここにいれば、わたしたちはまた追いやられてしまうかもしれない」
「そうだ。では大王に頼むとしよう」
彼らはメッジャ国王のもとへ向かった。
「陛下、この街に不吉な者が来ております。彼は魔術師で、神秘的な力を身につけております。その者を捕らえさせてください」
「よし、わかった」

＊　＊　＊

マータンガ賢者は、祭司たちを改心させようとしてこの街に来たのだった。彼は、まさに他人を調御することに熱心だったのである。
だが、これが彼の最期だった。
施された食事を食べていると、国王から派遣された召使いたちが急襲したのである。彼らは剣を振るい、そしてマータンガ賢者を殺した。
賢者は死に、そして神聖天の世界に転生した。そして、他人を気にしながら生命を終えたのである。
さて、このために神々が激怒した。
メッジャ国全域に、熱い灰の雨が降り注いだのだ。それは徹底的にメッジャ国を焼き尽くしたのである。メッジャ国は滅亡した。
栄光あるマータンガ賢者が殺されたとき、メッジャ国は祭司もろとも滅亡し、メッジャの森となったのである。

聖者を誹謗して堕ちる地獄

増支部経典十節【八九】コーカーリカより
原訳：オウム真理教パーリ聖典翻訳チーム

❖一　コーカーリカの悲惨な死

コーカーリカはサキャ神賢の弟子である。熱心に修行をし、煩悩滅尽に向かい、多く学んでいる修行者であった。

あるとき、彼はサキャ神賢の二大弟子サーリプッタとマハーモッガッラーナの行動が理解できず、彼らが悪をなそうとしているのだと勘違いしたのである。サキャ神賢に、コーカーリカはそれを告げに行った。

「尊師よ、サーリプッタとモッガッラーナは悪を望む者です。様々な悪い望みを持ち、その欲望を満足させています」

「コーカーリカよ、そうではない。決してそんなことはあり得ないのだ。サーリプッタとモッガッラーナに対して、清浄な心を持ちなさい。サーリプッタとモッガッラーナは友好的である」

コーカーリカは再び申し上げた。

「尊師よ、世尊はわたしにとって信じるに値し、信頼できるお方です。しかし、サーリプッタとモッガッラーナは悪を望んでおり、その欲望を満たそうとしています」

「そうではない。サーリプッタとモッガッラー

ナに対して、清浄な心を持ちなさい」

コーカーリカはもう一度だけ、申し上げた。

「尊師よ、世尊はまさにわたしにとって信じるに値し、信頼できるお方です。しかし、サーリプッタとモッガッラーナは悪を望んでおり、その欲望を満足させているのです」

「コーカーリカよ、そうではない。決してそんなことはあり得ないのだ。サーリプッタとモッガッラーナに対して、清浄な心を持ちなさい。サーリプッタとモッガッラーナは友好的である」

＊　＊　＊

コーカーリカの体にできものができ始めたのは、そのすぐ後だった。カラシの種ほどの小さなできものが全身を埋め尽くした。これはどんどん大きくなっていく。じわじわとそのできものは大きなものになってくる。最後には直径十センチほどにもなって、全身が破れて膿と血が流れ出た。彼は仕方なく、バナナの葉に横たわっていた。

そこへ訪れたのが、トゥドゥという名の独覚神聖天である。

「これはまずい。コーカーリカが高弟たちに謝らなければ、彼は悲惨なことになってしまう」

トゥドゥは空中から話しかけた。

「コーカーリカよ、サーリプッタとモッガッラーナに対して、清浄な心を持ちなさい。サーリプッタとモッガッラーナは友好的である」

「だれだ、あんた」

「わたしはトゥドゥ神聖天である」

「あんたは、この愛欲の世界へ還ってこないという不還者である、と世尊によって断言された者ではないか。そのあんたがなぜここに来る？

あんたは神聖天なんかじゃない。ゴミ捨て場の人食い鬼神に違いない」

　サキャ神賢に帰依していながら、二人の高弟と神聖天を誹謗したコーカーリカは、間もなく、このできものの病によって死んだ。そしてコーカーリカは、二人の高弟に対して心の中で嫌悪を持ったがために「紅蓮華のようなできものができる激苦地獄」に流転したのだ。

❖二　紅蓮華激苦地獄

「尊師よ、『紅蓮華のような状態になる激苦地獄』での寿命は、どのくらい長いのでしょう」

　ある出家修行者がサキャ神賢に質問した。

「『紅蓮華のような状態になる激苦地獄』は、実に長い。これを数字で言い表わすことは極めて難しい」

「たとえ話で表現することはできますか」

「できる。たとえば、二〇〇〇リットルのゴマを積んだ二輪馬車があるとしよう。そこから百年、あるいは千年に一度、一粒のゴマを取り除いたとしよう。このゴマがこの方法ですべてなくなったとしても、一つの『できもの激苦地獄』よりは短いのだ。

　そして、二十『できもの激苦地獄』は、一『これ以上にないできものの激苦地獄』である。

　二十『これ以上にないできものの激苦地獄』は、一『大期間激苦地獄』である。

　二十『大期間激苦地獄』は、一『悲痛苦痛の叫び声激苦地獄』である。

　二十『悲痛苦痛の叫び声激苦地獄』は、一『地獄徘徊流転激苦地獄』である。

二十『地獄徘徊流転激苦地獄』は、一『黄蓮華のような状態になる激苦地獄』である。

二十『黄蓮華のような状態になる激苦地獄』は、一『白睡蓮のような状態になる激苦地獄』である。

二十『白睡蓮のような状態になる激苦地獄』は、一『青蓮華のような状態になる激苦地獄』である。

二十『青蓮華のような状態になる激苦地獄』は、一『白蓮華のような状態になる激苦地獄』である。

二十『白蓮華のような状態になる激苦地獄』は、一『紅蓮華のような状態になる激苦地獄』である。

死んだコーカーリカは、この『紅蓮華のような状態になる激苦地獄』に流転したのである。

人が生まれると、口の中に斧が生まれる。
愚者は悪い話を話し、
それによって自分自身を叩き割ってしまう。

非難すべきものを称賛する者、
称賛に値するものを非難する者、
彼らは口によって不運を積み、
その不運によって楽しむことがない。

バクチで負けて、自分自身だけでなく
全財産まで失ったとしても、
まだ不運というわけではない。
最上善逝（さいじょうぜんせい）方を傷つけるなら、
この方がはるかに大きな不運となる。

聖人を叱責するような、
悪い言葉と意識に精神集中すれば、

十万ニラッブダ※に加えて
さらに三十六ニラッブダ、



そして五アッブダ※を流転する間、
激苦地獄に堕ちるのである」

※ニラッブダ：一説によると2×10^{38}年。
※アッブダ：一説によると10^{37}年。

激苦地獄へ至る道

輪廻転生談三一三「忍辱の教義を持す輪廻転生談」より
原訳：オウム真理教パーリ聖典翻訳チーム

クンダカクマーラの両親が死んだ。

彼が相続した財産は総計八億。その財産の山を前にして、クンダカクマーラは腕を組み、じっと考える。

「これだけの財産を作ったというのに、わたしの両親は、死んだとき、これを持っていくことはできなかった」

せっかく貯めた財産だが、死んだらそれを持っていくことはできない。その証拠に、財産はみなここに残されているではないか。

「わたしはこれを持って行かなければならない」

クンダカクマーラは、この財産を布施することによって功徳を積み、その功徳を持って来世に転生しようと考えた。彼はすべての財産を、布施すべき相手に施し、雪山に入って出家したのだった。

* * *

「おや、どなたですか?」

「わたくしは修行者です。ずっと山にこもっていたのですが、塩と酸味のものが必要になりましたので、この町へ施しを受けに参りました」

「そうですか」

と屋敷の主はクンダカクマーラを値踏みするように見る。どうやら彼は合格したようだ。
「どうぞ、中にお入りください。わたしがみたところ、あなたは立派な修行者のようだ」
この主は、わざわざ自分で料理をつくって修行者に施した。それは食べ物の布施の中では最も心のこもったものだ。
それだけではなかった。
「修行者どの。しばらくこの国に滞在なさるのですか」
「ええ、そのつもりですが」
「では、どこにお泊まりになるつもりでしょうか」
「それはまだ決まっていないんですよ」
「それでは国王の庭園にお住まいなさい」
「……ご主人、あなたは何者ですか」
「わたしはこのカーシ国の将軍なのです」

＊　＊　＊

クンダカクマーラは庭園に向かった。なかなか瞑想するのによさそうな場所である。満開のサーラ樹があったので、その下に座って瞑想することにした。禁欲を守っている彼には楽が生じている。
そこへ何かわいわいとにぎやかな女性たちの声が聞こえる。
「ねえねえ、出家者の方が座ってらっしゃるわ。この方にいろいろとお話をうかがいましょうよ」
「それがいいわ」
女性たちは集まってきて、クンダカクマーラを取り囲んだ。
「修行者さま、何かお話をしてください。わたしたちに教えを説いてくださいませんか」
「わかりました。では、よくお聞きなさい……」

修行者は女性たちに法則を説いた。

＊　＊　＊

「こらーっ！　何をしておるか！」

恐るべき形相で、激しい勢いで一人の男が剣を振りかざしてやってくる。

「あっ、いけない！　国王陛下がお目覚めになったのだわ」

「あの方が国王ですか。どうして怒っているのでしょう？」

クンダカクマーラは冷静だが、女性たちはあわててしまった。カーシ国王カラーブが怒ったらどうなるか……。

「わたしたちは国王のために歌を歌い、楽器を演奏し、踊っていたんです。でも、陛下は、一番のお気に入りの女性を枕にして眠ってしまったの。それで楽器を放り出して、遊戯地で遊んでいたら、修行者さんがいらっしゃったのでここに来たというわけなんです」

「なるほど、目が覚めたらあなた方がそばにおらず、わたくしのところに来ていたので怒っているのですね」

国王に気に入られている女性たちが国王に駆け寄り、剣を取って制止した。国王は、自分の剣で殺すことは思いとどまったようである。だが、その怒りが治まっていないことは一目でわかる。

「こら、この大ボラ吹きの結髪修行者！　お前はどういう教義を守っているのだ、言ってみろ！」

「忍辱の教義を守っております、陛下」

「その『忍辱』とは何だ、こら」

「毒づかれても、殴られても、罵倒されても怒らずにいることです」

「そうか……ではそれを見てやろう。お前に本当に忍辱があるかどうかをな」

＊　＊　＊

　赤っぽい黄色の衣を着、花飾りをつけて正装した男がやってきた。その服装は死刑執行人だ。彼は手斧、そして棘のある植物でできた鞭を持っている。
「陛下、何のご用でございましょうか」
「この無法者、極悪苦行者を痛めつけよ！」
　忠実な死刑執行人は、国王カラーブの言うとおり、修行者を痛めつけた。苦行者を捕らえ、引っ張って地面に転がす。倒れたところを、棘のある鞭で叩きつけた。
　前から、後ろから、右から、左から、体の四方をなんと二千発も鞭打ったのである。修行者の皮膚は破れ、真皮まで裂け、肉が叩き割られ、そして血が吹き出した。
　血まみれの修行者に、国王が問う。
「おい、乞食。お前はどういう教義を守っておるのか、言え！」
「忍辱の教義を守っております、陛下。ところで陛下は、わたくしの皮の中に忍辱があるとお考えのようですね。しかし、わたくしの真皮の中に忍辱はございません。陛下に見えない心の中に、わたくしの忍辱は確立されているのでございます」
「そうか……よし、わかった」

＊　＊　＊

　命令された死刑執行人は、手斧で修行者の両手を断ち、そして両足を断ち切った。手足の端

からは、どくどくと血が流れ出した。辺りは真っ赤に染まっている。
「さあて、お前、どういう教義を守っておるのかな」
「忍辱の教義を守っております、陛下。陛下は、わたくしの手足の中に忍辱があるとお考えのようですね。しかし、わたくしの手足の中に忍辱はございません。わたくしの忍辱はもっと深いところに確立されているからなのです」
「なるほど……よし」

＊　＊　＊

耳と鼻を切り落とされた修行者が横たわっていた。もう修行者は頭から胴まですべて血まみれだ。ほとんど肉の塊と化している。
「お前はいったい何の教義を守っておるか、言ってみろ！」
「陛下、まさしく忍辱の教義を守っております。当然、耳や鼻の端に忍辱が確立しているのだろう、などとお考えになってはなりません。わたくしの忍辱は、深い心の中に確立されているのですから」
「この大ボラ吹きの結髪修行者！　お前の忍辱を取り上げて座ってみろ！」
国王カラーブは修行者の心臓を足で痛めつけた。

＊　＊　＊

「尊者よ、大丈夫でしょうか」
国王が去った後、あの心の澄んだ将軍がやってきた。体から血を拭き取り、手足や鼻・耳を置いて、修行者を優しく座らせた。

「尊者よ、もしあなたがお怒りになるのなら、あなたに危害を加えた国王のみに対してお願いいたします。他の者に対してはお怒りになりませんように」

将軍は、修行者に重ねて懇願する。

「あなたの手と足と、
耳と鼻を切った者に、
お怒りください、偉大な勇者よ。
この王国を消さないようにお願いします」

「わたくしの手と足と耳と鼻を切った、
その国王が長生きしますように。
というのは、わたくしのような者は、
怒るということがないからです」

＊　＊　＊



当の国王は遊戯地から出た。

「ふん、バカな修行者だ」

突然、国王の目の前で、三百万キロメートルの厚みのある大地が破裂した。そして、その大地の下から火炎が吹き出したのである。

「うわあっ、これは……」

国王が叫ぶ間もなく、超期間地獄から吹き出した巨大な火炎が、ちっぽけな国王を包み込み、そして大地の中へ引きずり込んだ。

カラーブ国王は遊戯地の出入口で大地の中に堕ち、超期間大激苦地獄の中に固定されたのである。

一方の修行者も、同じ日に亡くなった。国王の臣下や市民は、香料や花飾りを持ってきて、修行者を手厚く葬ったのである。

*　*　*

「過去世において、
忍辱を示した出家修行者がいた。
忍辱によって祝福された者を、
カーシ国王は叩き割らせた。
彼の乱暴なカルマの結果は苛酷であった。
カーシ国王はそのことを、
地獄に堕とされて経験したのだ」

そのときのカーシ国王カラーブはデーヴァダッタの前生、将軍はサーリプッタである。そして、忍辱の教義を守る苦行者は、まさにサキャ神賢なのであった。

聖者への殺人容疑

輪廻転生談二八五番「水晶と豚輪廻転生談」より
原訳：オウム真理教パーリ聖典翻訳チーム

自分の美貌を鼻にかけているのか、少々高飛車なところがあるようだが、それも上品な物腰でごまかされてしまう。
そんな女が、この「バラリンゴの大陸」インドに現われた偉大な救世主、サキャ神賢のもとに通ってくるのだから、目立たないわけがない。
その名前は、容姿そのままの名前だった。「スンダリー」……それはまさに「美人」という意味である。

*　*　*

❖一　パーラ

彼女が通ってくるようになったのは、つい一カ月ほど前のことだった。
彼女は確かに目立った。目は大きくてぱっちりとしているし、鼻筋も通っていて、ちょっと厚めの唇はいつも湿っている。肌はなめらかで色つやもよく、体型も太すぎず細すぎず……一言でいえば、いわゆる美人という部類に入る。いや、美人という中でも何か目立つところがあった。

スンダリーは熱心にサキャ神賢のもとに通っていた。毎日欠かさず、決まった時間に現われる。

「おい、スンダリー、何がおもしろくってあんなまじめくさったインチキ宗教屋のところに通うんだ?」

「人生、楽しまなくっちゃダメだよ。俺たちと遊ぼうぜ」

と、町の若い男たちが誘っても、スンダリーは首を回して少し笑うだけ。その妖しげな笑顔に、男たちは何も言い返せなくなる。

それにしても不思議なのは、スンダリーが通う時間であった。

朝、サキャ神賢のところに行き、夕方、暗くなるころに帰るというのならわかる。だが、彼女は逆なのだ。夕方、サキャ神賢のところへ行き、帰るのは明け方。

一体、彼女は何をしに行くのだろう?

＊　＊　＊

「パーラ、それは考え過ぎじゃないか?」

「いや、あれはどう考えてもおかしいよ」

パーラと呼ばれた男は、乳粥を飲みながら断言した。

「だいたいだよ、我々在家の信者が偉大なる真理勝者のお話をうかがいに行くときには、昼間に行くもんだ。奉仕作業をするにしても、暗いときにはできやしない。スンダリーは何をしに行くんだ? なあ、セーナ、どういうことなんだろうな?」

「と聞かれてもな……何か特別な事情でもあるんだろうよ」

サキャ神賢のまじめな在家の弟子であるパー

ラとセーナ。パーラは商家の息子、セーナは下級の役人で、仲のいい友人同士だった。真理勝者サキャ神賢との縁ができたのは、たまたま聖者サーリプッタの説法を聞いてからだ。それ以来、機会があればサキャ神賢の説法を聴きに行き、聖者たちの忠告を聴き、奉仕に励み、戒律を守り、そして毎日の生活の中で修行も行なってきた。

「妙な女のことなんて、気にしない方がいいよ。俺たちはそろそろ出家しようって身なんだからな」

「それはそうだけどね……」

セーナは、パーラがスンダリーに気を寄せているとでも思っているようだ。だが、パーラにはそういうつもりはなかった。

ただ、何となく、不吉な予感がするだけなのだ。

＊　＊　＊

日が沈もうとしている。

もちろん、まだ空は明るく、人の顔くらいは見分けられる。

パーラはサキャ神賢のおられる精舎の門のところに立っていた。そろそろスンダリーがやってくるはずだ。今日こそは問いつめてやらねばならない。

もちろん、何もなければそれに越したことはない。きちんと白黒をつけなければ気が収まらないというだけのことだ。

腕組みをして門にもたれ、西の空を見上げた。明星が西の地平線近く沈んでいこうとしている。

「そろそろだな……」

目を転じたパーラは、並木の下を近づいてくる女の姿を認めた。——来た。背筋を伸ばし、

上品な物腰で歩いてくる姿は、紛れもなくスンダリーだ。その表情は冷たい。
「ちょっと待て」
横を通り過ぎようとするスンダリーに、パーラは振り返りもせずに声をかけた。スンダリーはパーラの横で黙って立ち止まる。彼女も顔を正面に向けたまま。
「どこへ行く?」
「真理勝者のところへ」
「こんな時間に、何をしに行く?」
「……そんなことを聞いてどうするの?」
パーラが顔を横に向けると、スンダリーもこちらを向いている。無表情。スンダリーは体もパーラの方に向けた。薄暗い夕暮れの光の中で、スンダリーの顔はいっそう妖しげな雰囲気を見せる。
「どうしてあなたにそんなことを言わなければいけないのかしら? あたしが何をしようと、どうだっていいじゃない」
その投げやりな言い方に、パーラは思わずスンダリーの肩をつかんだ。
「おい、どういうことなんだ、その言い方は!」
だが、スンダリーの方が一枚上手だった。物憂げにゆっくりと細い腕を持ち上げ、パーラの手を軽く払いのける。
「いい加減にしてよね」
全く動じる風もないスンダリーの様子に、パーラは気圧されてしまった。そのままの姿勢で身動きできないパーラを後目に、スンダリーは奥にゆっくりと歩いていく。
「……完全に呑まれてしまった……どうも修行不足だな……」
パーラはみぞおちのすぐ下辺りに何かがつかえるような気持ち悪さを感じ、門にもたれかかっ

た。
「絶対、あの女、おかしい……」
パーラは、門にもたれたまま、そこで朝まで待つことにした。

＊　＊　＊

いつのまにか眠り込んでいたようだ。
人のざわめきを聞いて、パーラは眠りから引き戻された。目を開けると、そこにはどういうわけか人だかりができている。
目をこすりこすりその群衆の顔を見ると、どうも見覚えのない人相ばかりだ。少なくとも、パーラの知っている、サキャ神賢の信徒ではない。
「どうかされたのですか?」
まだ早朝、日の出の少し前、明るくなりかけた時分である。こんなところに人が集まってくるとは不思議だ。
「いや、最近スンダリーがここに通っているというので、何をしに来ておるのか、確かめようと思ってな」
同じようなことを考えている人たちがいる。これで真相が明らかになるに違いない。パーラは、人々と一緒にスンダリーの出てくるのを待った。
スンダリーはすぐに出てきた。夕方と比べると、少し疲れたような表情で、心なしか服の着方がだらしないのはどういうわけか……と思う間もなく、群衆がスンダリーをさっと取り囲んだ。
「ねえ、なにすんのよぉ」
気だるそうに答えるスンダリーに、群衆は詰め寄る。少し離れたところに取り残されたパー

ラは、その会話を遠くから聞くしかなかった。
「俺たちの質問に答えろ。どこに行って、何をしていた！」
「そんなの、どうだっていいじゃなぁい」
「ふざけるな！　お前、どうなってもいいのか！」
「あんたたちにお前なんて言われる筋合いはないわよぉ」
「うるさいっ、黙れ！　しゃべらねえってのか？」
このままでは、スンダリーが暴行を受けかねない雰囲気だ。いくら怪しいとはいえ、暴力を許すことはサキャ神賢の教えに反する。
「ちょっと、ちょっと！」
とパーラが割り込もうとすると、スンダリーもちょうど観念したようだった。
「わかったわよ。言うわ。言うから離してってば」
「本当だな？」
スンダリーは、一瞬パーラと目を合わせると、うつむいた。そして、いつもの居丈高の態度とは逆の、弱々しい声で答える。
「サキャ神賢のところに行って、一夜を過ごしてきたのよ」
パーラは膝から崩れた。
「あの真理勝者サキャ神賢が、こんな女と……？」
膝をついて地面に座り込むパーラに、男の一人が話しかける。
「おい、あんた、もしかしてあのインチキ宗教屋ゴータマの信徒なのか？」
「インチキ……って……」
「今のスンダリーの言葉を聞かなかったのか？　偉そうなツラしてふんぞり返ってても、やってるこたぁいいかげんなんだよっ！　あんたも早く目を覚ますこった。ひどい目にあわねえうちにな」

「そうだ、そうだ」
周囲の者たちも口をそろえて言いはやす。
「あんなインチキ宗教屋の言葉を信じるなんざ、気が狂ってるに違えねえよな」
「まったくだ。煩悩破壊だの何だのって誇大妄想なんじゃねえか」
「宗教なら宗教らしく、道の掃除でもしてればいいんだ」
騒ぎながら、男たちは去っていく。声高に「インチキ宗教屋ゴータマは毎日女を連れ込んでお楽しみだ!」などとわめきたてながら……。
スンダリーはいつの間にかいなくなっていた。一人取り残されたパーラは、しばらく立ち上がることができない。

＊　＊　＊

「全く、おかしなことになってきたね」
すっかり落ち込んだパーラを励ましにやってきたセーナの声にもやはり戸惑いが表われる。
「町中の連中が口をそろえて、世尊を悪しざまに言っている。これでかのお方の評判はがた落ちだ」
「……でも、スンダリーの言ったことは本当なんだろうか?」
「それが難しいところだな。だれも証明できないんだから。第一、世尊がご自身でそれを否定なさっても、だれもそれを信じないくらい、噂が広まってしまっている。みんな、スンダリーの不審な言動を見聞きしていたんだから、仕方ないだろうな」
「では、スンダリーが嘘をついていたとして、彼女はどこで何をしていたんだろうか?」
「さあて、なあ? もうしばらく、あの女の様

子は見張っておいた方がいいかもしれん」
噂の力というのはおそろしい。真理勝者サキャ神賢に対して絶対の浄信をもっていたはずのパーラすら、周りの言動に揺るがされ始めたのである。周りがみんな、口をそろえて「サキャ神賢はこういう奴だ」と言うものだから、どうしても逆らえない雰囲気ができてしまった。「スンダリーの証言」というあやふやな根拠しかないのに、なぜかそれが事実とされてしまったのだ。
噂はさらに広まった。だが、それだけでは終わらなかった。

＊　＊　＊

「パーラ、いるか！」
仕事を終えて、パーラがそろそろ修行でもしようかと思っていたところへ、セーナが駆け込んできた。
「おい、どうしたんだよ」
と、息を切らすセーナに尋ねる。セーナの顔は、極めて重大な事件が発生したことを示していた。
「パーラ……あのな……」
手近の椅子に座り込んで、セーナは机を叩いた。
「スンダリーが行方不明になったんだよ！」
「えっ？　行方不明？」
「ああ。しかも、噂によると、例の毎日の『お通い』の後、朝になってもサキャ神賢のところから帰ってこなかったっていうんだ」
「それって……」
「町の連中は噂してるよ。悪い評判が立つのを恐れて、真理勝者がスンダリーを殺したんだってね」
「……ひどい……」



「だが、スンダリーがいないのも事実だ。これから俺は捜索に加わるけれど、無実を証明したいと思っている」
「ああ……実際に虫を殺生しないように浄水器を持つように指示なさるほどのお方だ。徹底した不殺生と慈愛が最初に説かれるこの教団で、どうして殺人なんて起こせようか」
「それはわかってるよ。『我々には』な。でも、外部の人間からみたら、俺たちは狂信者かもしれない。要するに、彼らの既成観念や習慣では理解し難い部分があるのも確かだ。だから、何をしてもおかしくないと思われてしまう」
「第一、これほど明確に疑われやすい状況で、こんなバカな事件を起こしたら、自分たちの首を絞めるようなものじゃないか」
「そのとおり。だが、そんな簡単なことにも気づかないで、噂に振り回されてしまうのが現実なんだよ」
「まったくだ……。セーナ、よろしく頼むぞ。是非、真理勝者の潔白を証明してくれ」
「任せてくれ！」
勢いよく駆け出していくセーナに期待を寄せるしかない。

＊　＊　＊

だが、事態は、悪い方向に進展した。
うなだれて入ってきたセーナの姿は、見るも哀れだった。声をかけるまでもなく、恐ろしい事態が発生したことが見てとれる。
「パーラ、どうしよう……」
入ってくるなり、セーナは机に倒れ込んだ。パーラは何も答えることができない。セーナの次の言葉を待つ。

しばらくの沈黙が重々しく二人にのしかかった。
「真理勝者のおられた建物の近くで、スンダリーの死体が発見された」
「何ーっ！」
「やられたよ、完全に。謀略だ」
「しかし、それを証明することは……」
「極めて難しいな。町のだれもが、犯人は世尊か、その周囲の者だと思いこんでいる。今、何を言っても聞いてもらえる状態じゃないんだ。うちの上司も同じだ。町の中心の方じゃあ『あのインチキ宗教屋ゴータマがやったに違いない』の大合唱が始まっている」
「……世尊はどうなさるんだろうか」
思い立つと同時にパーラは立ち上がり、駆け出していた。
「おい、ちょっと待てよ」
セーナが後ろから走ってくるが、それにもかまわず、パーラはサキャ神賢の住居へ向けて走っていったのである。
「世尊！　ぜひその偉大な神通力で証明してください！」
心の中で叫びながら、パーラは真っすぐ駆けていった。

＊　＊　＊

門の前まで来たとき、パーラはようやく立ち止まった。セーナもすぐ後ろにいる。
そこには、今まさに町の中へ出かけようとするサキャ神賢の姿があった。その表情はいつもと変わらず、穏やかな微笑をたたえている。全く動揺の気配がないのだ。その後ろには、聖者サーリプッタ、聖者マハーモッガッラーナといっ

た出家修行者たちが列をなして従っている。
感極まって、パーラはサキャ神賢に呼びかけた。
「世尊!」
「おや、パーラにセーナ。あなた方は一体どうしたのか? 心を乱し、悲しみに揺れている」
「世尊よ、それはまさに世尊がかぶせられた無実の罪によってなのです」
サキャ神賢はにっこりと笑った。
「わたしの素晴らしい後援者たちよ、よく聴きなさい。わたしの着せられた無実の罪に関して思い悩むことはない。必ずや近いうちに、わたしたちの無実は証明されるはずだからである。間もなく、神々の怒りが満ちようとしている」
「世尊よ、すぐに無実が証明されることはないのですか?」
「パーラよ、焦らずともよい。物事には時期というものがある。しばらくは非難を浴びることも必要なのだ。それは、あなた方が今までの数え切れない輪廻転生の中で積んできた悪いカルマを落とすことにもなる。カルマを落とすことによって、あなた方はさらに修行が進むはずだ。このことを認識し、理解しなさい」
サキャ神賢は再び歩いて行こうとしたが、パーラにはまだよく理解できなかった。
「一体、だれがこんなことを仕組んだのですか?」
「悪業をなした者には悪果が返る。それは必ず返る。自ずからすべては露見するはずである。それが絶対の真理なのだ」
サキャ神賢とその一行は、町の中へ入っていった。パーラとセーナもその後をこっそりついて行く。
「人殺し!」
「ぬけぬけと出てきやがってどういうつもりだ!」

「お前なんか死んでしまえ、殺人鬼め！」

予想したとおり、いや、それ以上に市民の反応は激しかった。もちろん、この事件の犯人がサキャ神賢かどうか疑わしいと思っている者もいただろうが、そのことを口にするだけでも共犯のように扱われかねない。

パーラとセーナは、まだ心が弱いな、と自覚しながら、群衆の後ろから見守っていた。サキャ神賢と出家の弟子たちは、時折投げつけられる石などにも屈せず、ただ黙々と歩いている。

「お前たちはどこか山の中にでもこもっていればいいんだ！　俺たちの目の前から消えろ！」

「お前ら気が狂ってるから何でもできるんだろ！さっさと死んでしまえ！」

「お前たちが犯人に決まっている！　こういう怪しげな宗教はいかん。伝統的な祭司の教えのようなもの以外は廃止せねば」

怒号の中で、真理勝者の一行はやはり心を乱すことなく歩き続けている。

「図々しい連中だ。自分たちがやったにもかかわらず、平然と人前に出て来やがる。どんな凶悪な犯罪だってできるんだろうな」

全く、事実という証拠が何もなくても、ここまでののしることのできる連中というのは、自分の精神性の低さを露呈しているとしか思えない。それにしても……とパーラは思う。昨日まで聖者を誉め称えていた者たちが、今日は噂に惑わされて聖者を非難している。人の心というのは何とも移ろいやすいものだ。

＊　＊　＊

それから毎日、真理勝者とその一行は、日課を欠かさなかった。つまり、町の中を歩き、そ

してののしられ続けたのである。罵声は日に日に大きくなる。
「教祖さまとやら、あんたがやったんじゃないなら、お得意の神通力で犯人を挙げてみたらどうかね？」
「別の犯人を連れてこない限りは納得できねえな、え、そうだろ、インチキ宗教屋さんよ？」
だが、真相はなかなか明らかにならなかった。本当にサキャ神賢は犯人ではないのだろうか？もしかしたら……。
どうしても浮かんでくる疑念を、そろそろパーラは押さえきれなくなりそうだったが、しかし、やはりそのような犯罪を犯す必然性が全く感じられない。疑念は、周囲の大合唱に影響されたものだと考えることにする。
それに、セーナが毎日、情報収集に駆けずり回っているのだから。必ず、何らかの証拠が挙がるはずだ。

❖二　セーナ

一方のセーナは、もう我慢ができなくなってしまった。在家の信徒の戒律の一つに「酒を飲まないようにすること」というのがあるが、もう酒をあおらなければやっていけそうにない。
世尊よ、申し訳ありません、と口でつぶやきながら、セーナは酒場に入っていった。店主がからかい口調で言う。
「おや、セーナさん、禁酒はやめたのかね？」
「あ、ま、そういうことかな」
「あんなインチキ修行者の勧める不飲酒なんて、守る必要はないよ。人生は楽しまなければな。

さあ、飲んだ飲んだ」
「……ちょっと待ってくれ、親父さん。そこまで割り切ったわけじゃないから」
「……そうかも知れねえが、犯罪者だろ、あの人は」
「だから、そういうふうに言うのはやめてくれって」
酒を出してもらうのを待つあいだ、セーナは店内を見渡した。酒好きで有名な資産家、商売の羽振りのいい男たち、そしてあまりガラのよくなさそうな男が二人。聞くともなく、その会話を聞いてしまう。
「それにしても今回の仕事はなかなかよかったな。ま、あのベッピンさんはちょっともったいない気もしたが」
「いいさ。ちょっと危ねえ仕事だったが、おかげでこんなに金が入ったんだから」
体格のいい二人の男はもう真っ赤な顔をして飲み食いしている。セーナは声を落として尋ねた。
「親父さん、あの連中はだれだ?」
「ああ、あの連中か? よくはわからんが、最近急に大金を手にしたそうだ。あんまりつきあいたくはない連中だがね。はい、お酒」
「あ、もう二杯追加してくれるか」
「え、一気に三杯も飲むのかね?」
「いいから、いいから」
セーナは両手で三杯の酒を抱えて、二人の男たちの横に座りに行った。
「兄さんたち、あまり見かけない顔だね」
二人の男は不審げにセーナの顔をじろじろと見たが、その腕に酒があるのを見ると急に相好を崩す。
「いやあ、俺たちゃちょっと雇われたもんでね。

もうじきこの町ともお別れなんだが」
「そうか。じゃあ、お別れのあいさつがわりに、この酒を受け取ってくれないかな」
「おう、あんちゃん、いい奴だなあ」
男たちはセーナから酒を受け取ると、ごくりと飲み干した。
「ところで兄さんたち、そんないい仕事はどうやって手に入れたんだ？　俺にも紹介してくれよ」
「こんないい仕事がまたあるとは思えないけどな」
「そうそう。当分、こんな仕事はあるわけねえな」
「どうしてなんだ？」
自分の分のつもりだった酒も二人につぎ足してやる。
「いやあ、これであのインチキ出家修行者も終わりだからな」
「え？　インチキって、あのゴータマとかいう？」
「そうそう。あんちゃん、よく知ってるじゃねえか。サキャ神賢とかいう変な名前を名乗りやがって……ま、あのバカを陥れる必要がもうなくなったからな」
酒でごまかしたいという気持ちなど、完全に吹き飛んでしまった。だが、ここで焦ってはならない。もう少し探りを入れてみる。
「ということは、兄さんたち、あのゴータマとかいう野郎（世尊、ごめんなさい）の評判を落とすのに一役買ってくれたってことなのか？」
「そのとおりさ。感謝してくれよ」
「（こいつら……）ゴータマがいなくなることは俺たちの幸福ってもんだが（申し訳ありません、世尊）、その幸福の代償として、兄さんたちはどれだけ儲けたのかね？」

「幸福の価格は一人頭、金一〇〇枚！」
「ほう、いい儲けじゃないか」
「安いもんだよ。最初は三〇〇枚で交渉してたんだが」
「そうか、がっかりだな、兄さんたち」
「全くそのとおりだ。俺たちはがっかりだよ」
「で、だれのところへ行けばそういう仕事をもらえる？」
「そいつはなかなか教えるわけにはいかねえな」
と渋る男の手に金貨を一枚ずつ握らせる。その途端に口が軽くなるのは無法者の常である。
「あんちゃん、これは秘密だぞ。パーパヤだ」
パーパヤといえば、とある宗教団体の教祖。やはり、この事件は陰謀だった。あとは、彼らに白状させるだけである。
「仕事というと、女一人殺すことか？」
「そうだよ。スンダリーを殺ったのはこの俺たちさ！」
得意げに大声で宣言する男。酒場のだれもが振り返った。
「今の言葉、間違いないな？　他人の手柄を奪おうってわけじゃなかろうな？」
「ああ。パーパヤの指示でスンダリーを殺したのは俺たちだ！」
次の瞬間、セーナが懐から取り出した縄が二人に向かって飛ぶ。二人の無法者たちは、自分たちの身に何が起こったか、酔ったままでわからない。
「スンダリー殺害事件の真犯人はここにいるぞ！」
男たちを踏みつけて、勝ち誇った声でセーナは高らかに言った。
「サキャ神賢は陥れられたのだ！　真犯人はパーパヤとこの二人の無法者たちだ」

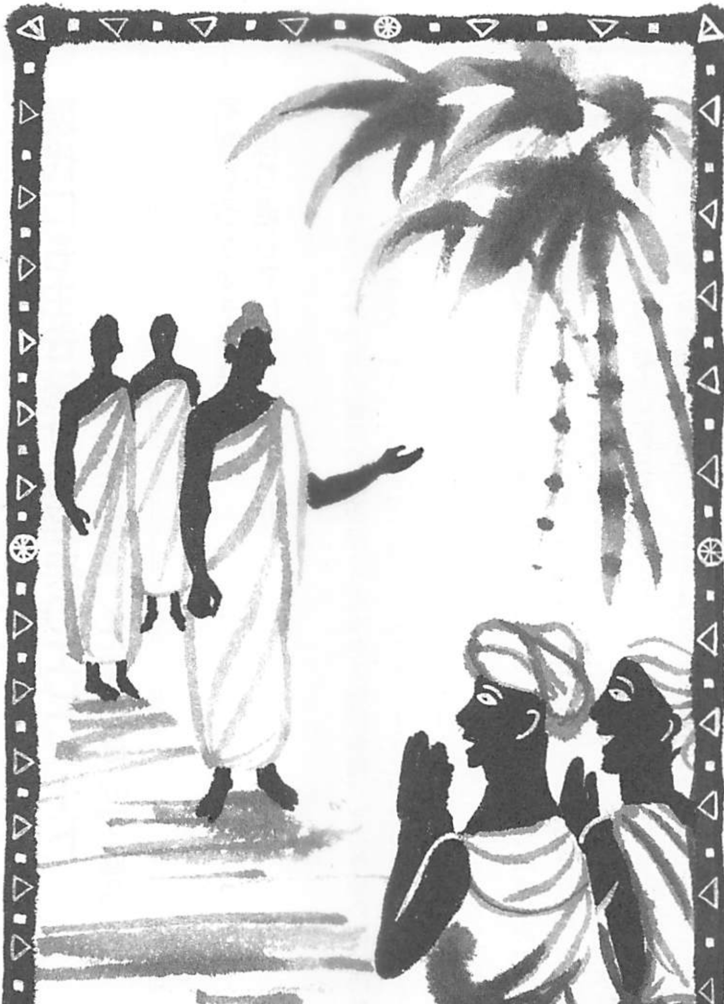
「大手柄だな、セーナ」
「いや……実は……」
折しもそのとき、そこへサキャ神賢の一行が通りがかった。
「そこにいるのはセーナとパーラか」
「そうでございます」
二人は合掌してサキャ神賢を迎えた。
「セーナ。酒はもう飲みたくないんじゃないか?」
セーナは、自分が実は酒を飲みに行こうと思っていたことなど、まだだれにも話していない。冷や汗をかきながらセーナは、パーラと顔を見合わせて笑った。サキャ神賢も声をたてて笑っていた。

＊　＊　＊

セーナたちが調べたところ、殺されたスンダリーはもともとパーパヤの教団の一人であったことが判明した。また、実際にはスンダリーはサキャ神賢と会ったことすらなかったのである。また、スンダリーを取り囲んで、何をしていたか「白状」させた者たちも、またパーパヤの教団の者たちであった。つまり、すべては茶番劇だったというわけである。

＊　＊　＊

サキャ神賢の名誉は回復し、いや、以前をはるかに上回る名声を得た。
だが、セーナの心にはひとつだけわだかまりがあった。



現代にも生き続ける経典のエピソード
――聖者を冒瀆した報いは必ず返る

◎

1. 無智なるがゆえの結末
〜繰り返してはならない大罪

真理の法則を説き、人々を真の意味で救済しようとなさる麻原尊師。その尊師の救済活動を妨害することは、まさしく大悪業であり、これまでに経典で見てきたように、その悪業には必ずやダンダキー王国をはじめとして、ナーリキーラ王やアッジュナ王、コーカーリカたちに降り懸かったような悪果が返ることは間違いない。

人々が煩悩的な生き方を好み、人間の悪業が頂点に達した現代は、まさに破滅に向かって一直線にひた走る最悪の時代である。そして、さすがにその最悪の時代だけあって、真理の灯明が尊師によって灯されたにもかかわらず、迷妄に覆われた魂たちはそれに気づかず、目先の利益に目を奪われるあまり、この真理勝者の救済活動を妨害しているのである。これはサキャ神賢の時代なら、まさに生きたまま超期間激苦地獄（無間地獄）に堕ちてしまうほどの大悪業であろう。

しかし、迷妄のエネルギーが強い現代、彼らはそれほどの顕著な悪業の報いは受けてはいない。が、これは彼らにとってむしろ悲しむべきことである。この現世で悪業の果報のすべてが返らないということは、彼らは来世、つまりその死後に、耐え難い苦しみを信じられないほどの永い期間にわたって受け続けなければならないからである。四無量心を実践する者として、哀れみを感じざるを得ないことである。

ところで、生きたまま超期間激苦地獄に堕ちるほどの顕著な悪業の報いは現われないとしても、やはり目に見える悪業の返りは、彼ら無智なる魂を襲っているのもまた事実である。ここではその主なケースを紹介しよう。

◎言葉とペンを取り上げられたジャーナリスト
──『サンデー毎日』元編集長・牧太郎氏の場合

一九八九年に始まったマスコミのオウム・バッシングは、週刊誌『サンデー毎日』の連載記事がきっかけとなった。「オウム真理教の狂気」と題する記事で、オウム真理教が未成年の若者を「超能力」であおり、洗脳し、布施を集める悪徳宗教であると書き立てたのである。この報道にならって、テレビ・ラジオなど多くのマスコミが当時まだ無名の宗教団体だったオウム真理教を追いかけ、報道した。

しかし、この発端となった『サンデー毎日』の記事は、「売らんかな」という姿勢が露骨に表われ

た、事実の歪曲と捏造に満ちた悪質なものであった。それは、後に宗教学者をして「戦後最大の宗教弾圧」と言わしめるほどのすさまじいバッシングへと発展させてしまったのだから、その罪は重い。その急先鋒となったのが、当時の『サンデー毎日』編集長・牧太郎氏なのである。

この『サンデー毎日』の報道がいかに悪意に満ちていたか、その一部を紹介しよう。そもそもこの告発シリーズは一人の成年の出家からスタートした。しかし、当時三十四歳のこの成年の年齢には一切触れずに「子供」とだけ表現し、いかにも若い人たちを教団側がだましているようなイメージを読者に与えた。また、教団側に悪いイメージを植え付けるために、過去の事件について、裁判資料には触れずに、検察が初期の見込み捜査段階で発表した情報を意図的に使うなど、その取り上げ方はマスコミに携わる者としての常識を逸脱していた。

もちろん、『サンデー毎日』誌での連載中にこれら捏造の事実は次々と明らかにされ、テレビ局の中には謝罪を伴う訂正放送を行なうなど、『サンデー毎日』の報道をうのみにしてしまった関係者が厳しく問いただされる場面もあった。しかし、そんな中でオウム真理教問題をリードする『サンデー毎日』は事実の捏造になんら謝罪せず、その後も捏造と悪意に満ちたデタラメ報道を繰り返し、他のマスコミを引っ張り続けた。そして、この虚偽の報道は情報に流されやすい現代人に大きな効果をもたらし、「オウム真理教は悪徳宗教である」というイメージが植え付けられてしまったのである。

その結果は悲惨なものだった。真の幸福への道を模索しながらオウム真理教で修行を行なう者は変な目で見られるようになり、その教えに価値を見いだしていた者たちが生活を守るためには、世間の


オウム真理教の狂気 第5弾
ビフテキ弁当を売る
告発スクープ第1弾!!
オウム真理教の狂気
これは「イエスの方舟」とは違う
オウム真理教の狂気
記者座談会
「勇気」の報道60日間」
タブーに挑戦!! 男と女の「平等誌」
サンデー
WEEKLY MAGAZINE
毎日
オウム真理教の狂気
土地の値段が動き出した!
野村証券が大儲け ワラント債に便乗せよ
麻原彰晃 ニセ薬の過去
ニュースキャスター「現場の評判」
子供を学校に返せ!オウム真理教の狂気
小学校長が怒りの訴え
「相場の半値」マイホーム全調査
田中角栄とこの人たち
欺しのテクニック

目を気にして教団と一定の距離を置かざるを得ないような状況さえ生み出されてしまったのである。
ちなみに、この問題以降、さらに激化したオウム・バッシングを通じても、オウム真理教の教義を真っ向から否定した報道は見られなかった。いや、正確には、〝できなかった〟というべきか。それはオウム真理教の教義が、原始仏教や原始ヨーガ、チベット仏教などの伝統に裏づけられており、現代において最高と呼ばれる修行体系を有しているからである。それは世界の聖者方あるいは日本の有識者の方々が認めるところである。そして、もしこのとき正当な評価を受けていれば、いかに多くの人に真の利益が与えられていたかと考えると残念でならない。
この『サンデー毎日』誌の報道に始まった一連のオウム・バッシングによって、情報に流されやすい現代人の多くが真の幸福に至る道、真理から遠ざけられてしまったのは紛れもない事実である。彼らの罪は重い。そして、その急先鋒ともいえる『サンデー毎日』誌の編集長、牧太郎氏の悪業は人一倍重いはずである。
九一年三月、この悪業に対する果報は返ってきた。牧太郎氏はパーティーの席上で突如意識を失い、病院にかつぎ込まれたのである。病名は脳出血。そして右半身マヒ、および失語症を生じさせた。
失語症はご存じのとおり会話ができなくなる症状である。週刊誌の記事という、言語による悪業を積んだために、このようなかたちでカルマが返ってきたのであろう。そして、右半身マヒにより、彼が真理を迫害する記事を書き続けてきた右手は使えなくなった。これもまさに自らが犯した罪の報いであるとしかいいようがない——。

◎病に伏して失墜した権力の亡者

――熊本県波野村元村長：楢木野惟幸氏の場合

熊本県阿蘇郡波野村――。この小さな村で、オウム真理教に対する村ぐるみの大弾圧が始まったのは一九九〇年のことであった。そして、この弾圧の責任者ともいえるのが当時の波野村村長、楢木野惟幸氏である。

この小さな村がオウム真理教弾圧に乗り出した大きな理由は、村の権力者が自分の地位・権力を守ろうとしたところにある。当時、楢木野氏は村長選で初当選を果たしたばかりだったのだが、そのときの選挙戦は今までにない熾烈なもので、対立する候補者との票差はわずか百五十票。過疎化が進む波野村は年々人口が三十～四十人流出しており、これでは転入者が増えた場合、票差が逆転して再選が危うくなる恐れがあったわけである。

オウム真理教はこの波野村へ道場を建立するため、九〇年五月から建立予定地の整地作業に入り、多くの修行者がこの村への移転を開始した。その理由は、高山の環境が修行に適しているからである。困惑したのは、村長と村長から利益を受けていた村役人たちである。大勢の人の村への転入に危機感を強め、一部の者が中心になり、かねてからオウム真理教を弾圧し続けてきた警察と一体になって、オウム真理教追放運動に乗り出したのである。これが波野村騒動の始まりである。

この弾圧の中心となった楢木野村長は、地域住民を反オウムへと駆り立てるため、オウム真理教を誹謗する週刊誌記事と「あなたの町や村がねらわれている――オウム真理教をみんなの力で追い出し

ましょう」といった内容の文書を作成して阿蘇郡内に回覧した。その後、オウム真理教追放の決意を村議会において堂々と表明。その模様はテレビのニュースでも放映されたのでご存じの方も多いはずである。

しかし、一方で、中立であるべき村行政が公然と追放運動を展開することに批判の声が上がったのは当然のことである。が、この批判を巧みにかわすために、楢木野村長以下村の幹部は、今度は住民組織をよそおって「波野村を守る会」を結成。村の有権者全員を半強制的に入会させて追放運動に組み込んだ。ちなみに、この会の会長は村長のいとこである楢木野元一氏だった。

彼らの行動は、激しく、そして常識を逸脱していた。阿蘇郡内の生コン、砕石業者に、オウム真理教に建築資材を売らないように申し入れを行なったばかりでなく、村民にも同様にオウム真理教関係者への「不売」を強要。各家庭の入り口に「オウム関係者立入禁止」の立札を掲げさせ、政治家や報道関係者に宛てて「オウム真理教を何とかしてください」との救援を求める手紙を書くように要求した。

一方で行政サイドとしての権力も行使。村役場にオウム真理教関係者の転入届の受付を拒否させるという、前代未聞の暴挙に出たのである。このためオウム真理教の数百名の修行者が、二年以上にわたって住民票がない状態が続いたというから信じ難い話である。

この他にも波野村側がどのようにしてオウム真理教に物理的・精神的な弾圧行為を行なってきたか、その事例を一つ一つ挙げていったら、それこそ枚挙に暇がない。



波野村の楢木野村長

病気を理由に辞表

阿蘇郡波野村の楢木野惟幸村長(五九)は十八日、病気を理由に山口定喜村議会議長を通じて村選挙管理委員会に辞表を提出した。

楢木野惟幸村長

日午後にも委員会を開き、選挙日程などを決める。二月六日から岩瀬治茂助役が職務を代行する。

同村総務課によると、楢木野村長は昨年十月から脳塞栓(そくせん)などのため、入退院を繰り返していた。十二月末に退院したものの、一月も五、六日しか出勤できず、自宅から電話

あなたの町や 村が ねらわれている

オウム真理教 の阿蘇進出を

住民パワーで絶対阻止しよう

みんなの力で オウム真理教を 追い出し

阿蘇を守る会

〒869-26 熊本県阿蘇郡波野村

波野郵便局私書箱１号

☎0967-24-2570

今こそ見せよう

村民の底力を！

団結あるのみ

「主役はあなた」です

広報第３号　　波野村を守る会

村民の総力を結集しての総決起大会は明治２２年村制施行以来初めてのことでしたが、その成果は雨天にもかかわらず予想以上で、今後の運動展開にさらに弾みがつきました。　何と言っても、主役は村民１人１人であるという責任感の表れであったと思います。

資金カンパも問題の重大さを充分認識され、御協力いただいたことに役員一同心から感謝申し上げます。　大切な浄財です。有意義に使用させていただきます

今後長い長い運動が続くものと覚悟していますが、物心両面からも決して「オウム」に負けることなく、更に団結して初期の目的完遂まで最大の努力を傾注していただきたく、次のことを守って下さい。

記

１各戸に下記のような看板を宅地入口に立てて、全村民が真剣にこの問題に取り組んでいることを示して下さい。（大きさや、材料は適当に作って下さい。）

オウム真理教と
その関係者は
私有地への立入を禁ず
波野村を守る会

２近時、村外において必ずしも村民は一体でなく「オウム」協力者もいるとの噂が流れ出たようです。　どうか、そのような噂に負けることなく、さらに団結して総力を結集して下さい。

＊広報についての、ご意見・ご助言をお待ちしています。

第370号　　広報なみの

広報なみの

発行　波野村役場　編集　総務課

TEL　0976-24-2001

6月分

計　2,088人

世帯数　553

工事中止命令を無視し次つぎに建つプレハブ

オウム真理教進出問題

役場に届いた

オウム真理教進出問題

（その2）

この弾圧の中心人物、波野村村長の楢木野氏にもカルマは返ってきた。九二年十月から脳塞栓で入退院を繰り返していたが、九三年一月、病気回復の見通しが立たないことを理由に村長を辞職。彼が守り続けようとした権力の座をあっけなく手放さざるを得なかったのである。

◎気が狂った右翼の末路
——阿蘇で弾圧に加担した右翼幹部

この波野村の弾圧事件にはこんなエピソードもある。このオウム真理教の弾圧の際に村側が利用したのが右翼団体である。彼らは当初、村民とは無関係を装っていたが、その後の村民や右翼の証言により、村側がお金で右翼団体を雇っていたことが明らかになった。そして、この弾圧に手を貸した右翼団体の人間にもカルマが返ってきた。数カ月もしないうちに、幹部二人が心筋梗塞によってこの世を去ったのである——。

ではなぜ、右翼は心筋梗塞で死んだのだろうか。真理のエネルギーというものは光である。その光をシャットアウトする暴言を吐いたり、行為を取ったり、心を持ったりするとどうなるか。当然、その光をシャットアウトするために闇のエネルギーを発散することになる。

するとまず、自分の周りが闇になっていく。地獄へ堕ちる者にも本性には光り輝く仏性が存在しているのだが、それを闇のエネルギーによって遮断することになる。すると、意識の本質と世界との間

がブチ切りになり、ショックが起き、心筋梗塞が起きる。というのも、わたしたちの意識の本質は心臓に宿っているからである。そして、心筋梗塞で逝ったということは、彼らの業が結果を出したということを意味している。つまり、彼らが地獄へ落ちたということである。地獄の本質は闇、これは経典どおりである。

ところで、被害者の会も悪業を積んでいるはずなのに、なぜ右翼にはそれだけ早くカルマが現われたのか。それは、右翼はまず直接の利害関係にないにもかかわらず、まず上九一色、富沢において暴力事件を起こした。その上、熊本では、いろいろオウム真理教の活動を妨害した。若干の威し、暴力もある。これをトータルすると身・口・意、三つの悪業が重なったことになる。

次にカルマが落ちるのは警察である。出家修行者を捕まえ、殴る蹴るの暴行を働いたためだ。実際に波野村事件後ほどなくして気の狂い始めた警察官もいる。

真理に対する違反は、狂うことあるいは死というかたちで必ず精算される。そして、真理に対して闇のエネルギーを放った者が苦しみの世界へ落ちたならば、なかなかそこから這い上がることはできない。

カルマというものは必ず返る。そして、人はみんな死ぬ。それまで吠えていても、がなっていても必ず死ぬ。死んだらその報いを受けなければならない。その報いを済度することができるのはグル(霊的指導者)だけである。警察官にも済度できないし、天皇にも済度できないし、国会議員にも済度できない。済度できるのはグルだけなのである。

◎閑職に追いやられた警察官
——麻原尊師の弟子を取り調べた熊本県警警部

一九九〇年、国土法事件がデッチ上げられた際、検察側は、先に逮捕された青山弁護士や早川氏、満生氏の無罪を立証するための証拠を提出するようにと、麻原尊師に対して要求した。しかし、麻原尊師は目が不自由である。そこで、尊師の弟子であり経理責任者である石井女史が、十一月七日、証拠となる「仮払金精算書」を提出するために熊本地検に赴いた。

すると検察は、石井女史が提出した証拠を「偽物」と断定し、石井女史を「証憑隠滅罪(しょうひょういんめつざい)」であるとして逮捕したのである。そもそも検察側が提出を要求してきたから提出したのであって、出頭するや否や突然逮捕するということは、検察側に最初からワナにかける意図があったとしかいいようがない。

そして、石井女史の取調べを直接担当していた県警本部の某警部が精神的におかしくなった。若い、ばりばりのエリートだったのだが、急にぼーっとした感じになってしまったというのだ。痴呆症(ちほうしょう)ではないだろうが、無気力になって、仕事もできないような状態になったという。そのため、部署替えになり、閑職に追いやられたのだ。

◎テロリストに爆殺された独裁者
――スリランカ前大統領：故ラナシンハ・プレマダサ氏の場合

世界中で仏教が形骸化されていく中で、サキャ神賢が説かれた教えに最も忠実なテーラヴァーダ（上座部）仏教を有するスリランカ。それだけにこの地はカルマの現象化も早く、直接的である。このスリランカの前大統領、故ラナシンハ・プレマダサ氏の例などもその典型といえる。

一九九一年九月、麻原尊師とオウム真理教の一行は招待を受け、スリランカを初めて訪れた。このとき一行を招待したグナロカ氏（前スリランカ福祉協会会長、ナーガビハーラ寺院副住職）は、「尊師は世界を救うことのできる唯一の方であり、オウム真理教は世界を救うことのできる唯一の宗教」と尊師を高く評価していた人物である。このとき尊師と会見されたこの南伝仏教の聖者たちもまた尊師を高く評価され、スリランカ最高の僧とされるアーナンダ・マイトリー高弟は、「尊師が今の時代、この地球に現われた偉大な聖者の一人であることを理解しました。尊師は偉大な宗教的グルです」と、会見後、高い評価を与えていた。

このようにスリランカの人々は尊師に最大級の敬意を示していたのだが、ただ一人違ったのが前大統領の故ラナシンハ・プレマダサ氏だったのである。スリランカの国民から「独裁者」と呼ばれて恐れられていた彼は、アーナンダ・マイトリー高弟の勧めにより、尊師との会談を予定したが、それを突然一方的にキャンセル。その後、スリランカの伝統的なテーラヴァーダ仏教の保護を目的としたオウム真理教の活動に協力的だった大臣たちに、あろうことか政治的な牽制（けんせい）さえ行なったのである。プ

レマダサ氏のこうした嫌がらせはその後もさらに続けられ、スリランカの国営テレビがオウム真理教の修行を取り上げた特別番組を企画した際には、これをつぶして自らの政見放送を放映するなどオウム真理教の活動をことごとく妨害する暴挙を繰り返していたのである。

そのプレマダサ氏にも悪業の果報は返ってきた。事件が起こったのは、この国営テレビへの圧力の直後だった。九三年五月一日、スリランカの首都コロンボでメーデーの行進を先導していたプレマダサ氏は、爆弾を抱えて突っ込んできたタミール人のテロリストによって爆殺されてしまったのである。スリランカが抱える民族問題が引き起こした不幸な事件だが、大統領の警護に当たっていた者もすべて犠牲になり、現場にはバラバラに吹き飛ばされた彼らの手足が散乱する、悲惨な状態だったという。まるで仏典に記されているような壮絶なカルマ返しである。

なお、その後、スリランカの新大統領には自らもテーラヴァーダの教えの実践者で、麻原尊師を高く評価し、麻原尊師に仏舎利（釈迦牟尼の遺骨）を贈呈した元総理大臣のD・B・ビジェトンガ氏が就任した。これは功徳の果報というべきか。

ところで、やはりこのスリランカの地はカルマの顕現化が速いだけあって、こうした類いの話は枚挙に暇がない。テーラヴァーダ仏教の保護を目的に作られたオウム・サッチャ・サンガ・アソシエーションに侵入した盗難グループのボスが、次に侵入した先で運悪く電線に触れてショック死するという事故も発生している。カルマは必ず返るのである――。

スリランカ大統領暗殺。

メーデー行進中に爆発

護衛ら10数人死亡

全国に外出禁止令

【ニューデリー1日 長岡昇】スリランカのコロンボで一日昼、メーデーの行進を先導していたラナシンハ・プレマダサ大統領(六六)らの一行に爆弾を抱えたテロリストが突っ込み、同大統領や側近、警護官ら十数人が死亡、約六十人が負傷した。政府は全国に外出禁止令を出し、ウィジェトンガ首相が大統領代行に就任した。同国では、北東部に住む少数民族タミル人が分離独立を唱えて武装闘争を続けており、タミル人過激派の犯行の疑いが強い。



1日、スリランカのコロンボで、プレマダサ大統領が爆殺された現場 =ロイター

タミル過激派の犯行か

コロンボからの報道によると、メーデーの行進はプレマダサ大統領が党首を務める与党、統一国民党が主催したもので、同党の支持者や労働者ら数千人が参加した。

同大統領ら要人がコロンボの中心街に差しかかったところ、自転車に乗った人物が近づき、高性能の爆弾をさく裂させた。現場には爆弾で吹き飛ばされた手足が散乱、大混乱に陥り、大統領の死亡もしばらくしてから確認された。

同国では一九七〇年代後半から、北東部に住むヒンズー教徒の少数民族タミル人の分離独立運動が強まり、八三年からは仏教徒の



プレマダサ大統領

◎加害を続ける被害者の会の末路
——胃を切り落とした永岡会長

オウム真理教に対して、「被害者の会」というものがある。これは、オウム真理教から被害を受けたという主張のもとに結成された、信者の肉親の集まりである。親子間のトラブルに端を発し、ことあるごとにオウム真理教問題に顔を出す。すでに成年に達している信者に対して、〝子供離れ〟のできない親たちが、信教の自由を様々なかたちで妨害する。

この「被害者の会」というものは、本来は「加害者の会」である。本当の意味で、自由・幸福・歓喜を得ようとしている自分の肉親に対して、その道を阻むからである。憎悪によって結成された団体であり、些細なことをことさら大きく取り上げて、トラブルを起こしているのである。これは、完全に地獄へ堕ちる道を歩んでいる「加害者の会」と言わざるを得ない。

これは断言しよう。だれが否定しようと、あるいはだれが「それはあり得ないよ」と言おうと、間違いなく「被害者の会」の者たちは地獄へ堕ちるだろう。それは、二千五百年前、仏陀釈迦牟尼が約束していることだからだ。同じように、マスコミを使って中傷し続けた者も地獄へ堕ちるだろう。それは、真理というものの芽を摘み取ろうとしているからだ。それは、この宇宙の秩序が約束した、絶対的な真理である。

カルマというものは確実に存在する。「被害者の会」の会長の永岡氏は胃潰瘍になり、そして胃を切り、生命が縮んだ。

◎汚職が暴かれ失墜に追い込まれた政治家
——熊本県知事から首相になった細川護熙氏

熊本県における弾圧の中心人物であった熊本県知事も、同様に自らの悪業から逃れることはできなかった。当時の知事、細川護熙氏は、波野村による住民票不受理処分を黙認したばかりでなく、オウム真理教を国土法違反の疑いがあるとして熊本県警に告発、大弾圧のきっかけをつくった張本人である。

細川氏は、その後、内閣総理大臣に就任。政治改革をスローガンに掲げ、クリーンなイメージも手伝って一時は人気を博した。ところが、九三年に入ると、佐川グループとの深いつながりや資金の不正運用などが次々と暴露され、クリーンどころか自らが汚職の根源となっていた過去の事実が明らかとなり、信用は一気に急落。野党の厳しい追及にあって、国会空転の原因をつくり、九四年四月、事実上の失脚に追い込まれた。こうして細川内閣は、わずか八カ月の短命政権として、その幕を閉じたのである。

細川氏は、熊本においては、マスコミを通じて広くオウム真理教のイメージを低下させてきたため、自分自身もマスコミに叩かれて権力の座を追われるというカルマとなって返ってきたのであった。

また、その後も、マスコミからその失政ぶりなどを叩かれ続け、五月には元右翼団体員から銃撃され、また、六月には金銭疑惑で国会に証人喚問されるなど、悲劇的な境遇に直面しているのである。

◎確実に存在するカルマ

これらの現象は、まさに真理を実践している魂に対して迫害を行なったために起こることである。これ以外にも多くの現象が起きている。一九九〇年に清流精舎に対して火炎瓶を投げたり、あるいは実際に突っ込んできたりした二人のやくざのうち一人は自分のナイフで死に、そしてもう一人は交通事故で足がなくなった。すべてはカルマである。善業には善果が、悪業には悪果が必ず返る。カルマの法則は絶対である。

このように言うと、皆さんはこう考えるかもしれない。「カルマの法則というものは全く慈愛がないのか」。しかし、これは正しい目から見るならば、真の慈愛なのである。もともと本当の慈愛、本当の哀れみというものは、対象に対してカルマの法則をしっかり認識させ、この生死の輪廻から脱却させることがただ一つの慈悲だからである。したがって、対象に対する単なる同情や、あるいは単なる愛が対象を増長させ、そして真理を見失うような現象が結果として現われるとするならば、それは真の慈悲ではないということになる。なぜならわたしたちは無始の過去から〝生まれ・死に・生まれ・死に……〟を繰り返しているからである。

救済活動の妨害を行なう無智なる魂が、自己のなしている悪業の重さに気づき、一日も早く心を入れ替えられんことを願う。何よりもそれは自分自身のためなのだから。

2. 神々の怒りを知れ

◎天候を司る神の力

宇宙の構造において、人間界よりも高いパートが存在する。それが神々の世界である。神とは、人間よりも優れた智慧、超自然的な力の持ち主のことである。その神々の世界の中に、天候を司るパートがある。この神は、統治変化自在天空天（広目天）と呼ばれ、天候を自在に変化させる力を持つ。それ

統治変化自在天空天は、心の良き魂が集合している場合には、適度に雨を降らせ、日を照らせ、それによって穀物の成長を促進し、豊かにさせる。そうではない不徳の魂が集合している場合には、異常天候を形成する、といったことを担当している。

ところで、現在、真理に対して悪業を積み続けているこの日本は、一体どのような果報があるのだろうか。当然、それは天変地異となって現われることになる。

◎九州地方を襲った大災害の理由

一つ例を挙げよう。

一九九〇年七月、九州地方が大災害に見舞われたことを覚えているだろうか。九州地方――特に阿

蘇を中心とした地方は、オウム真理教に対してひどい悪業を積んできた。彼らは、阿蘇郡波野村にあるオウム真理教の所有地からオウム真理教を追い出そうとして、数々の謀略を用いてきたのである。それも、地域の上層部が、自分たちの私利私欲を満たすためにだ。

例えば、波野村の楢木野村長は、前述のように常識外れのひどい行動に出て、オウム真理教に対して迫害を加えた。そしてあげくの果てには、「波野村を守る村民総決起大会」なるものを催す。七月一日のことである。この大会では、社会問題化するのを避けて村長は表面に出ていないが、村長が裏で糸を引いていることが明らかとなっている。

◎雷はとどろき大洪水が——死者、行方不明者続出

この大会終了直後、雷がとどろきわたり、雨足が突然激しくなった。これが、この地方を襲った大災害の始まりだった。雷雨はその後ますます激しさを増し、波野村近辺を中心に四〇〇ミリから五〇〇ミリの雨量を記録。その結果、大洪水が発生し、死者・行方不明者三一名、負傷者一〇八名、建物全壊二一九戸、崖崩れ三一一五カ所を数える未曾有の惨事となったのである。波野村内でも村道七七カ所が破損するなど、河川や道路に大きな被害が生じ、今に至るまでその深いツメ跡を残している。

特に、被害の多かった熊本県の阿蘇町、一の宮町、そして大分県竹田市に災害救助法が適用されたが、これこそまさに、神によって悪業を清算させられたとしか言いようがないだろう。なぜなら、阿



毎日新聞
阿蘇(一の宮)で土石流 15棟の
九州・山口 豪雨禍広がる
福岡・高田町
一家生き埋め死
死者16人 不
明2人に
めど立たぬ
国道に土砂
大分合同新聞(朝刊)
平成2年(1990年)7月3日
〝直撃〟また竹田…
悪夢さめず…一の
死者24人 不
1990年(平成2年)7月4日

蘇町、一の宮町ともに反オウム真理教の動きが強く、何よりも当時の熊本県知事自身が、反オウム真理教的な発言をしていたからである。

例えば、阿蘇町で、尊師をはじめとするオウム真理教の一行は、「簡易保険保養センター」に一泊したのだが、翌日も宿泊を申し込んだところ「一室も空いておりません」と断られた。これはオウム真理教関係者であることがわかり、追い出しにかかったのである。こう断定できるのは、後で数人の人間が名を変えて電話したところ、いずれも空き室のあることが確認できたからである。

一の宮町では、何といっても町長自ら、オウム真理教に土地をお布施しようとしていた一の宮町の住人に圧力をかけたという重大な事実があるのだ。一方、竹田市も反オウムの会が結成された所である。問題の波野村も道路破損、ガケ崩れ、畑の損傷と大変な損害を被り死者も出ている。

この現象は、モーセがイスラエル人と共にエジプトを出る以前、イスラエル人を奴隷として虐待していたエジプト人の身に降りかかった禍(わざわい)を思い起こさせる。しかし、天からの報いはこれだけでは収まらない。悪業は必ず神によって清算させられるものである。

◎神々の裁き

わたしたちは、自分の内側をクリアにすることによって、超自然的な力、神の力を身につけることができる。布施・持戒を土台とし、例えば、事業や国家の運営において関係する人たちに多くの利益

を与えた者は堅固王国天へ至る。生きものを慈しみ傷付けず、その成長に携わった者は成長天へ至る。自分と関係のある魂の肉体を傷つけない、あるいは傷ついた魂を治した者は守庶民外傷天へ至る。そして、天候の正常な状態を祈り、五穀豊饒の状態を導いた者は統治変化自在天空天へ至る。

この四つのパートが第一天界であり、天候・成長・医学・政治等を担当する。そして第二天界は徳、第三天界は裁き、第四天界は慈愛、第五天界は個人的な神通、第六天界は集合的な神通、といったことを担当している。

これらの神々は、人間の善業・悪業に応じて、果報を与える。つまり、この人間界は神々の意向によって形成されているのである。そして、人間の悪業の集積がある点を超すと、それ以上この人間の世界に存在することはできなくなり、神々により大いなるカルマの清算が行なわれる。そしてそのカルマの法則によって、間もなく、阿蘇で発生した水害などとはとても比較にならないような、地球的規模の巨大な災いが襲いかかるはずである。それは、あたかも、悪業多き魂を一掃するために神が引き起こされたという、あの――〝ノアの洪水〟に匹敵する災いとなるのだ。

そして、この世に本当の大異変が起こったとき、オウムを迫害してきた人々は、取り返しのつかないことをしたことに気がつき、取り乱し、悲痛な叫びを上げることになるだろう。

●島田裕巳氏に対する回答

島田裕巳氏は、「朝まで生テレビ」でオウム真理教の出家の形態がどんどん変わってきたのではないかとの意見を述べておられた。これはまさにそのとおりである。島田裕巳氏が言うとおり、オウム真理教の出家修行者は被害妄想に陥っているのかもしれない。しかし、実際オウム真理教に出家をし、そして生活していると、世の中のあまりにも間違ったデータに対して憤りを覚え、そして徐々に徐々に出家修行者としての閉鎖的な空間を形成していっていることは疑う余地のないことなのである。

ところで、出家は閉鎖社会を作った方がいいのか、それとも開放社会を作った方がいいのかという問題になってくるが、これは明らかに閉鎖社会を作った方が理想なのである。

なぜならば、まず現世の法則によってどこへ転生するかを理解すると、例えば、他人に対する邪悪な心は地獄へといざなわれ、聖者を誹謗することは同じように地獄へといざなわれ、また生と死という見解を離れて目の前の欲望だけにとらわれるとするならば、これは疑念によって動物界へといざなわれる。なぜ「疑念によって」ということになるのかというと、目の前にある欲望にとらわれる、真理の法則に反した生き方自体、疑念によって

生じたものであるからである。
また、必要以上のものをどんどん蓄えるならば、それは貪りのカルマによって、低級霊域へといざなわれる。また、恋人に対する強い愛著、あるいはセックスに対する強い欲求を持ち続けるならば、それは人間界へといざなわれる。
ところで、愛情が強いことを現代では称賛する。しかし、仏典では、末法の様相の中心的な心の状態が、この愛情であると言っているのである。

◉

パセーナディ王の十六の夢

輪廻転生談七七「大いなる夢輪廻転生談」より
原訳：オウム真理教パーリ聖典翻訳チーム

◉

「陛下、ゆっくりとお休みになられましたか？」

祭司たちに問われて、コーサラ国王パセーナディは首を横に振った。

「どうして心安らかに眠れようか。今日、余は明け方に十六の夢を見た。それはなんとも恐ろしい夢だった。大師たちよ、何とかしてくれ」

「どのような夢をご覧になったのでしょう」

王は十六の夢を伝え、

「このような夢を見たならば、余には何が起こるのであろうか」

と尋ねると、祭司たちは手を振っている。

「どうして手を振る？」

「それは極めて厳しい夢でございます」

「どういうことになるのだろうか？」

「王権が妨げられるか、生命が妨げられるか、あるいは財産が妨げられるか、そのどれかでありましょう」

「解決できるか、それともできないか？」

「はっきり申し上げましょう。これらの夢は極めて危険なものであり、解決法がないようなものですが、わたくしどもは何とか解決させることにいたしましょう。この夢の危険を退けることができずして、わたくしどもの学んだことは何の役に立つというのでありましょうか」

「で、何をするのだ？」
「陛下、あらゆる四つ角で犠牲祭を捧げることにいたします」
「……ということは、余の運命は諸君の手中にあるということだな。早速、余を安心させよ」
「ご心配には及びませぬ」
　おびえるパセーナディ王を見て、祭司たちは心の中で密かに喜んでいた。
「これで多くの財産を巻き上げることができるぞ。そして、様々なごちそうを得ることにしよう」
　祭司たちはそれから何度も宮殿に通うことになる。犠牲祭用の祭壇を設け、様々な四足獣や鳥をいけにえとして集めたのだが、それを何度も何度も繰り返したのである。もちろん、祭司たちの行なっていることに何の効果もあるはずはない。単に、彼らの収入を増やしただけのことであった。

＊　＊　＊

　祭司たちが足繁く通ってくる様子を見て不審に思ったのは、王妃マッリカーであった。
「陛下、いったいどうして祭司たちは、何度も何度も繰り返してやってくるのですか？」
「マッリカー、お前は知らないのだな。余の耳元に毒蛇が這っているということを」
「どういう意味ですか、それは？」
「多くの悪い夢を見たのだ。そこで祭司に聞いたところ、三種の妨げがあるという。その災いを除くため、犠牲祭を行なっているのだ。祭司が何度もやってくるのはそのためだ」
　マッリカーは少し考える。
「陛下は、人と神の世界で最上の祭司に夢の解

決法を質問なさいましたか?」
「おい、その、人と神の世界で最上の祭司とはだれのことだ?」
「あら、陛下、人と神の世界で最上の魂、全智のお方、清浄にして煩悩を離れた偉大なる祭司をご存じないのですか?」
「ええと……」
「世尊、サキャ神賢ですよ。あの方なら、夢の影響をおわかりになるはず。さあ、行って質問なさいませ」
「ああ、では行くとしよう」

＊　＊　＊

「大王よ、どういうわけでこんなに早くここに来たのだ?」
甘美な声のサキャ神賢に迎えられて、パセーナディ王は夢の話をした。
「……この夢を払うため、祭司たちは、犠牲祭をしています。このため、数多くの生き物たちが死の恐怖に脅かされているのです。尊師よ、あなたは人と神の世界で最上の魂であります。過去・現在・未来を通じて、尊師の精通によって見えない法則はありません。これらの夢の結末を、どうかご教示ください」
「大王よ、そのとおりだ。人と神の世界で、わたし以外のだれも、この夢の重大な影響や結末を見抜くことはあり得ない。さあ、見たとおりに夢を語りなさい」
パセーナディ王が夢の内容を語ると、一つずつ解き明かされていったのである。

一　牡牛の夢

四頭の、漆黒の牡牛が、闘争するために四方から宮殿の中庭にやってきた。そこへ「闘牛を見よう」と多くの人が集まってきたのである。

牡牛たちは、闘争しているように見せかけて、吠え、うなったが、闘争はせずに退いたのであった。

「大王よ、この夢の結果は、あなたの時代やわたしの時代には生じない。未来の話である。

未来において、法則を無視する欲深い王たちが現われ、法則を無視する人々が住む時代が来る。そのとき世界がひっくり返り、善人が落ちぶれ、善からぬ者が優勢となる。世界が衰退するときに、空からは激しい雨が降らず、雷雲は絶え、穀物はしおれ、飢饉になるであろう。

あたかも雨を降らせようとするかのように、四方から雷雲が立ち上がる。女たちは広げて日にさらしていた籾などが濡れるのを恐れて、室内に運び入れる。男たちはシャベルとざるを手にして、堤防を修理するために出かける。

すると、雷雲は今にも雨が降るかのようにとどろき、雷光を発するが、その牡牛の群れが闘争しなかったのと同じように、雨を降らせずに行ってしまうのだ」

二　木々の夢

小さな木々、低木が大地を分裂させた。二十五センチ、あるいは五十センチも伸びないうち

に花が咲き、そして実までなったのである。

「大王よ、この夢の結果は、世界が衰退し、人々の寿命が短くなったときに生じるであろう。

　未来において、生命体たちは痛烈な愛著を持つようになり、青年になってもいないのに、少女たちの中に男が入り、生理があるだけではなく妊娠までして、息子たちや娘たちが増えるであろう。

　小さな木々の花は彼女たちの生理の状態であり、実はその子供たちのことである」

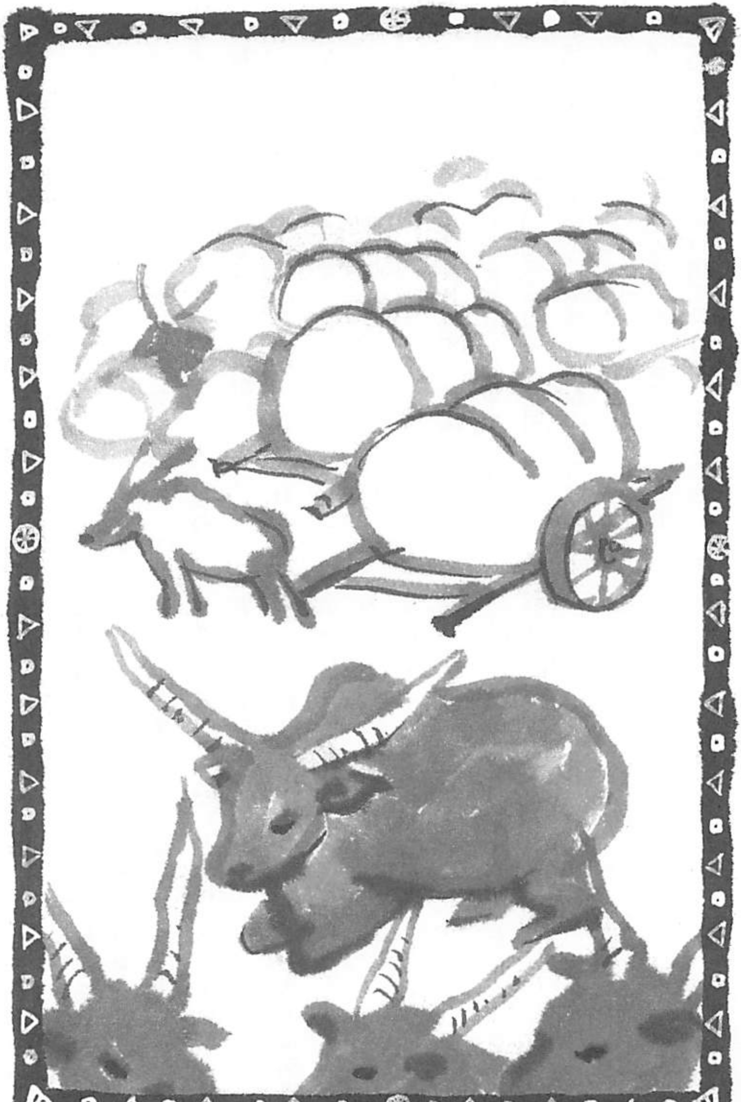
三　雌牛の夢

雌牛の群れが、その日生まれた子牛の乳を飲んでいる。

「この結果も、まさに未来において、人々が年長者に敬意を払わなくなったときに生じるであろう。

　未来においては、人々は父母・舅姑たちに遠慮もせず、自分たちだけで家族の財産・家屋敷を管理する。年老いた者に対しては、少しの食物や衣類でさえも、気が向いたときにしか与えなくなる。老人たちは孤独で、子供たちを制御できず、子供たちの機嫌をうかがいながら生きていかねばならない。

　まさに、その日に生まれた子牛の乳を飲んでいる雌牛のようなものである」



四　雄牛の夢

二輪車の積み荷が多くあった。身の丈があり、頑丈な、大きな雄牛の群れがいたのだが、その二輪車はその雄牛たちにはつながれなかった。幼く、若い雄牛の群れにつないでいるのである。若い牛は積み荷を運べず、捨ててとどまっていた。当然、牛車は前進しなかった。

「未来において、法則を無視する欲深い王たちは、賢明でしきたりを熟知し、仕事をこなすような大臣たちに栄光を与えない。賢明で司法上の慣習を熟知していて、老練な信頼できる顧問は、裁判官に任命されない。

逆に、非常に未熟な者たちが栄光を与えられ、裁判官となる。彼らは国王の仕事にふさわしいこともわかっておらず、栄光を高らかに示すこともできず、国王の仕事を成し遂げることもできない。その上、仕事の責任を放棄してしまう。

一方、老練で賢明、信頼できる顧問たちは、栄光を得ることがないために、できるはずの仕事であっても、

『これは我々に何の関わりもない。我々は部外者になったのだ。未熟者たちがなんとかするだろう』

と言って、仕事をしないであろう。こうして国王は衰退する一方なのだ。

それはまさに、二輪車の積み荷を大きな雄牛の群れにつながないようなものである」

五　馬の夢

両側に口のある馬がいた。人々は両側からまぐさを与え、馬は両方の口で食べる。

「未来において、法則を無視する愚かな王たちは、法則を無視して素行の悪い人々を裁判官とするだろう。

彼らは悪人で、功徳というものを軽視し、愚かである。裁判官となっても、原告・被告双方から賄賂(わいろ)を受け取って私腹を肥やす。

それはまさに、馬が二つの口でまぐさを食べるようなものだ」

六　黄金の鉢の夢

多くの人が、金数十万の値打ちのある黄金の深い壷を掃除して、一頭の老いたヤマイヌに与え、「ここに小便をしろ」と言う。それで、ヤマイヌはその壷に小便をした。

「未来において、法則を無視する世襲の王たちは、良家の者たちに対して猜疑(さいぎ)心を抱き、栄光を与えない。逆に、下賎な者たちだけを繁栄させる。

良家は悲惨になり、下賎な者たちが支配権を持つようになるだろう。そして、良家の者たちは生きていけなくなる。

そのため、良家の娘が下賎な一族に与えられるようになるのだ。そうして生活を援助しても

らうのである。
　このように、良家の娘たちが下賤な一族に嫁ぐのは、老いたヤマイヌが黄金の深い鉢に小便するのと同じである」

七　雌のヤマイヌの夢

　一人の男が繰り返しロープをなって、足元に置く。その男の座っている椅子の下には、一匹の空腹な雌のヤマイヌ。男が気づいていないうちに、ヤマイヌはロープを食べてしまった。
「未来において、女たちは男を漁（あさ）り、酒をあおり、装飾品を貪り、街で遊びたがり、物質的なものをかき集め、素質は悪く、素行が悪くなる。
　主人とともに耕したり、牛を育てたりして、困難を乗り越え、苦労して集めた財産を使って、愛人たちと酒を飲んだり、花飾り・香料・化粧品を身につけたりする。家の緊急のこともせず、家の塀越しに割れ目からでも浮気の相手を探しまわる。
　明日まく予定の種をもすり潰し、お粥や料理を手に入れて食べたりする。こうやって財産を奪っていくのである。
　それはまさに、椅子の下に横たわったヤマイヌが、一生懸命なって足元におかれたロープを食ってしまうようなものだ」

八　瓶の夢

　宮殿の門に、一つの大きな水瓶（みずがめ）があり、水が

満ちていた。その周りに、空っぽの瓶(かめ)が数多くある。

四つのカーストの者たちが、四方八方からやってきて、陶器に汲んだ水を注ぎにくる。だが、満たされた瓶だけに注ぐため、満ちた水はあふれて流れていく。

彼らは空の瓶には見向きもしなかった。

「未来に、世界が徐々に衰退する。そのとき、王領には活気がなくなり、国王たちは破産していき、悲惨な生活をするようになる。国家資産が銅貨十万ほどしかない。

そこで王たちは、すべての地方を直轄地とし、苦しんでいる人々は自分の仕事をさせてもらえず、国王のためだけに働くことになるのだ。

人々は七種の穀物・野菜の種をまき、育て、刈り、脱穀し、収穫する。サトウキビ畑を作り、道具を作り、道具を運ばせ、砂糖を煮る。花畑と果樹園をつくり、各地で生産された七種の穀物などを持ち寄り、国王の貯蔵庫だけを満たすことになる。自分たちの空の貯蔵庫には見向きもしない。

それはまさに、空の瓶に見向きもせず、満ちた瓶をさらに満たすのと同じ状態なのだ」

九　蓮池の夢

五種の蓮華で覆われた深い蓮池があった。どこからでもその池に降りることができる。すると、二本足や四本足の生き物たちが近づいて、そこで水を飲む。その真ん中の深い場所では、水は濁っており、生き物たちが近寄る場所では、

澄み渡り、清浄で、濁りがなかった。

「未来において、国王たちは法則にのっとらなくなるだろう。衝動にしたがって悪政を行ない、君臨する。法則に従った判決などなく、賄賂を財産とし、財産を貪り集めるようになるだろう。王領に住んでいる者たちに対して、忍辱・慈愛・哀れみといったものはあり得ない。厳しく、乱暴なのだ。

彼らはサトウキビの圧搾(あっさく)機のように人々を抑圧し、様々な税金を設定し、財産を得るようになるだろう。

人々は重税に圧迫されて何も払えなくなり、村や町を捨て、国境へ行って住む。大陸の中央は無人になり、国境に人々が集まる。

それは蓮池の真ん中で水が濁り、端の方では澄んでいるような状態そのものなのだ」

一〇　炊けていない米の夢

一つの鍋で、ご飯が炊かれている。だが、きちんと炊けていない。

三分の一は水気が多すぎ、三分の一は米粒が多すぎ、そして三分の一はよく炊けているのである。

「未来において、国王たちが法則を無視するようになる。そのような国々では、宮中で働く者も、祭司・後援者・国民・地方人たちも、そして出家修行者や祭司たちまで、すべての人が法則を無視して生きるようになる。

すると、彼らを見守る神々、人々から供養を受ける神々、樹木の神々、空間にとどまる神々……も法則を無視するようになる。

法則を無視する王の統治する国では、激しい風が不規則に吹く。それは空中の天宮を揺り動かす。そこで神々は感情を害し、雨を降らせないようになる。降ったと思っても領土すべてに降るわけではない。また、降った場所でも、耕作や種蒔きに十分なほどは降らせない。

王領だけではない。地方にも、村にも、池や沼地にも、雨を降らせないだろう。池の一方で雨が降れば、もう一方では雨が降らないようになる。

ある地方では、水害で穀物をダメにする。別の地域では干ばつによって枯れさせる。また別の地域では適度に雨が降るだろう。

このように、同じ国の中で、収穫に差ができるようになるであろう」

二　ビャクダンの夢

金十万の値打ちのある最上級のビャクダンを、臭いバターミルクと引き換えに売っている。

「この結果は、未来において、わたしの救済計画が衰退するときに生じるであろう。

未来において、生活必需品を貪り、恥知らずの出家者が増える。

わたしが生活必需品に対する食欲を鎮めるために説いた法則をねじ曲げて、衣服などの必需品を得ようとするであろう。

また、生活必需品を得るために、誤った宗派の開祖になる。そうして、人々を煩悩破壊に向かわせることができなくなるのだ。

彼らはただ、このように考えるであろう。

『わたしの立派な言い回し、甘美な声の響きを聴けば、人々は大変高価な衣服などを施して与えてくれるであろう』

また別の者は、通りの中・四つ角・宮殿の門などに座り、小銭を得るために法則をねじ曲げて説くであろう。

このようにして、わたしが煩悩破壊に至るために指し示したはずの法則を、生活必需品のため、あるいは小銭を得るために売るようになるのは、まさにこの夢と同じなのだ」

三　空のヒョウタンの夢

空のヒョウタンが水に沈んだ。

「これは、未来において、法則を無視する王が現われるとき、まさに世界がひっくり返ることを示しているのである。

その時代、国王たちは、良家の者たちに栄光を与えず、下賤な者たちだけに栄光を与える。下賤な者たちが支配権を持ち、良家の者たちは貧しくなる。

国王の前でも、宮殿の門でも、大臣の前でも、法廷においても、下賤な者が発言権を得るであろう。それはまさに空っぽのヒョウタンが水中に沈み、しっかりと立つようなものである。

出家教団においても同じである。集会においても、総会においても、鉢・衣・修行者のための独房など様々な事柄について判定するとき、発言権を得るのは破戒した悪い者ばかり。彼らの言葉が済度の言葉とされ、恥を知る修行者の言葉は済度の言葉と思われない。

このように、すべての点で、空のヒョウタンが沈むような現象が起こるであろう」

一三　浮かぶ石の夢

家の屋根ほどもある大きな、重厚な石が、ボートのように水上に浮かんでいる。

「これも同じようなときに生じる。法則を無視する国王たちは、下賤な者たちに力を与えるようになり、彼らが支配権を持つようになる。彼らは崇敬されるであろう。一方、良家の者たちは悲惨な境涯となり、だれも崇敬する者がいなくなるのである。

国王の面前で、大臣の面前で、あるいは法廷において、重厚な石と同じく判定に巧みな良家の者たちの言葉は、浮いたようになってしまう。彼らが話すと、

『こいつらは何を言ってるんだ』

と嘲笑されてしまうのである。

出家修行者の集会でも同様である。人々は穏やかな修行者の言葉に耳を傾けることがない。石が浮かんでしまうかのように、正当な言葉はしっかりと確立されることがないのである」

一四　カエルが蛇を呑み込む夢

小さな花のように小さな雌カエルたちが、大きな黒蛇たちを素早く追いかけ、あたかも青蓮華の中空の茎のように引きちぎり、肉を噛み、

呑み込んでいる。
「これも、未来に世界が衰退するとき、生じることだ。
そのとき、人々は強烈な愛著を持つようになり、煩悩に振り回され、非常に若い妻の尻に敷かれるようになる。
家では、奴隷・召使いなども、牛・水牛なども、砂金・黄金なども、すべてが若い妻の思い通りになるだろう。
『砂金や黄金や衣服など、集めたものはどこにあるかな』
『あるところにあるでしょ。あなたにそんなこと関係ないじゃない。わたしの家に何があって何がないか、そんなことを知りたくなったの?』
若い妻は毒づき、辛辣な言葉で打ちのめし、夫を奴隷や使用人のように尻に敷き、自分の支配力を高めるだろう。
このように、ちっぽけな雌カエルたちが毒蛇・黒蛇たちを呑み込むようなことが起こるのである」

一五　カラスと鳥の夢

悪しき十の法則を備え、村で生活しているカラスがいた。そのカラスに仕えているのが、金色の羽毛を持つ『黄金』という名の白鳥の王様たちだ。
「これは、未来の弱い国王の時代のことである。
未来において、国王たちは象の操り方などは忘れ、逆に戦争にばかり自信を持つようになる



だろう。
王たちは王権の危機を恐れて、良家の者たちには力を与えず、自分の草履取り・浴室付添人・理髪師などに力を与えるだろう。
良家の者たちは王宮で地位を得ることができず、生計が立てられなくなり、支配者となった下賎な者たちに仕えるようになるだろう。
それはまさに、黄金の白鳥の王様たちがカラスに仕えるようなものである」

一六　羊におびえるオオカミの夢

本来、ヒョウの群れが羊の群れを食べるものである。ところが、羊がヒョウを追いかけてバリバリと食べていた。
それを見ておびえたオオカミたちは、羊の群れを遠くから見て、恐怖し、恐れ、逃げていき、ジャングルの茂みに隠れたのである。
「この結果も、未来の、法則を無視する王の時代に生じることである。
下賎な者たちが国王のお気に入りで、支配権を持ち、良家の者たちは名声を失い、悲惨な境涯になる。国王のお気に入りの者たちは、国王に自分たちの話を聴かせ、裁判所などでも力を持つのである。
『これはわたしたちの資産だ』
と良家の者たちが先祖伝来の土地や家屋敷について主張したところで、
『お前らのじゃない。俺たちのだ』
として、裁判で係争し、棒などで打ち、首根っこを捕らえて放り出す。

『お前らは自分たちの力がどの程度かわかっているのか? 俺たちと争うつもりか? お前らのことを国王に伝え、手足を切らせてやろうか?』などと脅すのだ。良家の者たちは恐れ、財産を放棄してしまう。

『この家もこの土地もこの財産も、まさにあなた方のものです。お取りください』

そしておびえたまま、布団の中に潜り込んでしまうのだ。

悪い出家修行者たちも、穏和な修行者たちを自分の好きなようにし、重圧感を与えることになる。穏和な者たちは頼る者もなく、森に入り、ジャングルに隠れることになるだろう。

このように、下賤な者たち、あるいは悪い出家修行者たちによって、良家の者たちや穏和な修行者たちが立ち去る。その様子は、まさに羊におびえたオオカミが立ち去るように見えるだろう」

＊　＊　＊

このようにして、十六の夢がすべて正しく解説された。

「大王よ、これらはすべて未来について語られたことである。あなたが恐怖することはないのだ。祭司たちは、この夢のことがわかっていて話したわけではない。財産を得ようと思い、物質的なものを得ようとして、あるいは生活のために、そのようなことを言ったのである。――さて、これらの夢によって、あなたに恐怖は訪れるはずがないことはよくわかったはずだ。犠牲祭をやめさせなさい」

こうして犠牲祭は行なわれなくなり、多くの生き物に生命を布施することになったのである。

これからもわかるとおり、愛情は決してよくない。なぜならば、その背景に、必ずや強い邪悪心を生起させるからである。

さて、話を元に戻そう。他人と激しく競争し、それを蹴落とし、それに勝利したとしても、それは意識堕落天、阿修羅の世界へいざなわれる。大いなる功徳を積み満足したとしても、欲望に対する充足感がある限り、それは愛欲神の世界、天界へといざなわれるのである。

したがって、今の世の中を見た場合、どんなにわたしたちが頑張って情報の捨断をしようとしたとしても、せいぜいが人間界止まりである。

これが仏教の教えなのである。したがって仏教の教えはわたしたちを裏切らないから、もしわたしたちがこの現世で普通に生活するとするならば、マスコミの情報を記憶修習することによって、苦しみの六つの世界の特に下の三つの世界へと流転することは間違いないのである。

なぜならば、まず物や財を貯蓄したり、また、大量のものを食べたり飲んだりすること

をよしとするデータを吸収することによって貪りが増大し、低級霊域（餓鬼）へと転生する。次に、マスコミの流す情報は現世幸福にどっぷりとつからせるものであり、それゆえに真理を否定する疑念が増大して動物界に転生する。そして、感情表現をドラマ等によって記憶修習することによって、邪悪心が増大し、地獄へと転生するのである。

現に、ある新聞の調査によると、日本人の四分の一の人は悪夢にうなされているのだという。そして、残りの四分の三のかなりの人は、夢も見ない状態なのである。そして夢も見ない状態というのは、まさに暗性の状態、それは悪夢にうなされるよりもっとひどい状態なのである。この夢を見ない状態というのは、まさに死後気絶の状態に至ることを表わしているのである。

死後気絶をするということは、次の輪廻転生においてコントロール不能の状態を意味するので、悪夢よりも悪いのである。

したがって、出家修行はそのようなものから解放され、八つの生起のサマディに至るように、また、七つの法則の実践を行なうためにも、閉鎖的な社会を形成する必要があるのである。

〈七つの法則の実践＝七覚支〉

①記憶修習覚支（教えを何度も何度も繰り返し記憶する）
②検討覚支（記憶修習した教えに基づいて法則を選択する）
③精進覚支（善法を増大させ悪業を減少させるよう努力する）
④喜覚支（真理の実践を大いに喜ぶ）
⑤軽安覚支（修行によって心身が軽快になることを思念する）
⑥サマディ覚支（心を停止させ対象を正確に認識する）
⑦無頓着覚支（現象に対して無頓着になり、ひたすら善を実践する）

現代では、オウム真理教に入信しているだけで、その人は周りから強い抑圧や弾圧を受ける。したがってこの強い抑圧や弾圧から抜け出すために、オウム真理教を続けるか続けないか、つまりその社会から抜け出し、出家するかの選択に迫られているのである。これが実状なのである。

もちろん、在家修行において、忍辱の実践（耐え忍ぶことの実践）をしている人も多い。

しかし、いくら耐え忍んだとしても、普通に目にする情報や耳に入る情報から見て、心に動揺を来し、不安定になることは間違いないであろう。したがって、教団としては来世高い世界へ生まれ変わるためには出家が素晴らしいですよ、という話をしているのである。

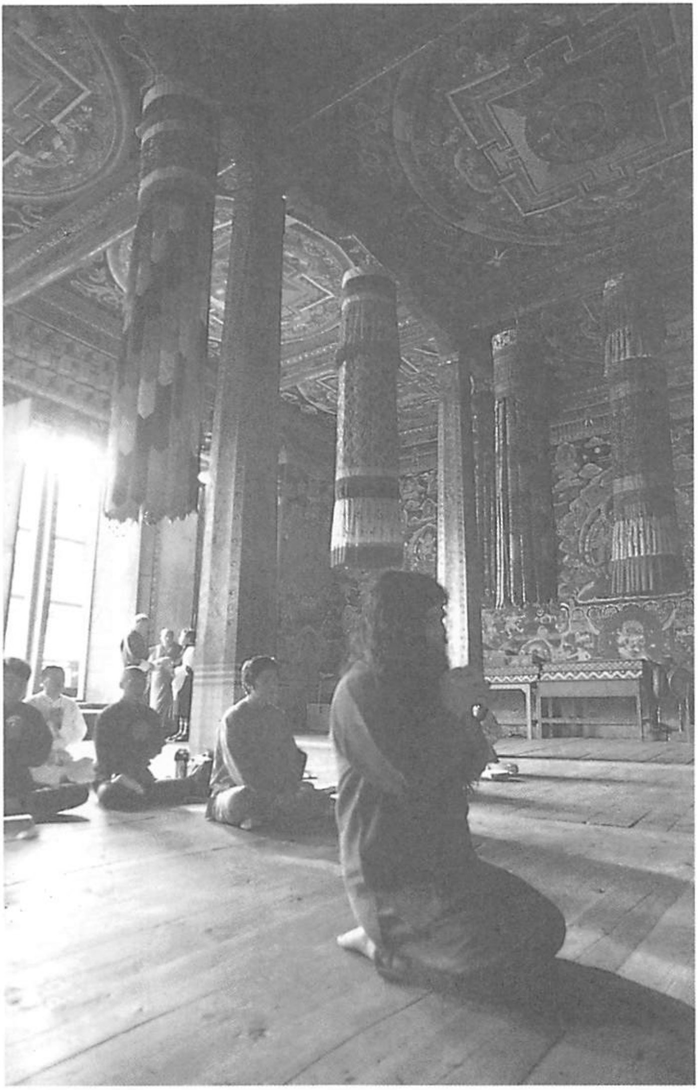
では、現実の世界とそれから出家の場合の違いは何か。出家の場合には、情報の捨断をすることができるという大きなメリットがある。そして、この捨断は、解脱するための四つのプロセスである証智・捨断・現証・修習の第二のプロセスである。この捨断が完璧にもしできるとするならば、次は神秘的な力が現われる。そして、高い世界の能力が身につくのである。

島田裕巳先生の見解は、宗教学者として大変正しい指摘だと思われる。しかし、オウム真理教の追い込まれている現状というものは、それよりもっともっとひどいのである。

わたしは在家修行者である。したがって、子供もいる。在家修行者に対する世間の誹謗中傷というものは、それほどカルマになるものではない。したがって、わたしへの悪口についてては、わたし自体それに対してなんら頓着していないから、誹謗されたとしても、あ

るいは中傷されたとしても、大した問題ではない。しかし、出家した弟子たちは違う。彼らは性エネルギーを保全し、そして出家修行者としての戒を守り、絶えずグル、シヴァ大神、すべての真理勝者方に対する帰依を培い続けている魂である。

したがって、今回の国家権力による弾圧は、それはちょうど、イエス・キリストを弾圧したユダヤが、その後流浪の民となったように、この日本に大きな大きな災いがふりかかることだろう。



流浪の民の悲しみ
——キリスト迫害のもたらしたもの

◎

今から約二千年前、ローマ帝国の支配下のユダヤにイエス・キリストが誕生した。「キリスト」とは「救世主」を意味する普通名詞であり、イエス一人を指す言葉ではないが、イエスが聖者であったことは間違いない。

イエスは、ヨハネから洗礼を受けた後、荒野に行き、四十日後、「悔い改めよ、天の国は近づいた」と説き、伝道を始めた。当時のイエスの教えは、仏教でいうところの「神聖天」へ至る道を説いたものであった。

イエスが伝道を開始して二、三年経った後、ユダヤの長老から、「自分を神の子だと称する」涜神（とくしん）の罪で訴えられた。しかし、最高法院は死刑にする権限を持たず、皇帝への反逆罪でローマの総督のもとに訴える。そこでもイエスに罪は見いだせないと判断されたが、祭司長をはじめとするユダヤ人の激しい要請により、イエスの処刑が決まった。

西暦三〇年、ゴルゴタの丘の十字架上で、イエスは悲惨な死を遂げる。

その報いといえばいいのだろうか。ユダヤはその後、国の衰退が始まり、そのカルマによって五十

年内外のうちに国外に逐われ、流浪の民と化したのである。聖者を迫害したカルマは、はっきりとした形で現われる。

西暦七〇年、ローマ支配下でかろうじて残っていたユダヤの王国はついに滅亡。神殿が炎上し、ローマ軍による虐殺、略奪が始まり、町は炎で焼き尽くされ、神殿の宝物もことごとく持ち去られた。この後一九四八年のイスラエル建国に至るまで、実に一八七八年間、彼らは祖国を失うことになる。「さまよえるユダヤ人」の時代が到来した。

それから、大本教団の出口王仁三郎、彼は第二次世界大戦の日本の敗北と大きなかかわり合いを持つ偉大な予言者である。彼に対する国家の弾圧と、そして第二次世界大戦の敗北の経緯を見てみよう。

悲劇の歴史は繰り返す？
——日本の運命と出口王仁三郎

◎

◎大予言者・出口王仁三郎

ちょうど六〇年前、一九三五年に第二次弾圧を受け、壊滅に追い込まれた大本教。それを率いる出口王仁三郎（おにさぶろう）は、決して当時のマスコミが書き立てたような「妖怪」「詐欺師」というような者ではなく、一人の優れた宗教家であり、そして予言者であった。

大本教が根こそぎにされるほどの大弾圧を受けた背景には、見事的中し続ける王仁三郎の予言を当局側が恐れたという事情もあったようである。

日露戦争勃発の日に始まり、第一次大戦、関東大震災と次々に予言を的中させてきた王仁三郎は、やがて日本とアメリカが衝突し、日本が負けるという不吉な予言を行なっていた。当然、国家当局がそれを看過（かんか）するわけにはいかない。王仁三郎の予言書は繰り返し発禁処分にされたのである。

「やがては降らす雨利加（あめりか）の、数より多き迦具槌（かぐつち）に、撃たれ砕かれ血の川の……」

米軍が焼夷（しょうい）弾を雨のように降らす悲劇、そして敗戦に至るまで、王仁三郎はすべてを見抜いていた。

◎大本教完全撲滅

政府当局による二度の大弾圧は、大本教と出口王仁三郎が、まさに政府にとって邪魔な存在であったことから断行されたのだった。そこには何ら違法行為などなかったのにである。

第二次大弾圧においては、検挙の口実は「不敬罪」ということだった。だが、当局側の行動はヒステリックなまでに大げさである。

三五年十二月八日早朝、完全武装警官隊約五百名が、綾部と亀岡の大本教本部を急襲。幹部約三百名を検挙した。

さらに島根県下の警官総数七百名の四割、約二百八十名の武装警官隊が、松江の島根別院を包囲。この大部隊は、なんと王仁三郎ただ一人を拘引するために動員されたのである! いかに警察当局が王仁三郎を恐れていたかがよくわかる。

さて、その後の治安当局の対応は厳しかった。王仁三郎以下教団幹部六十一名を治安維持法と不敬罪で起訴。さらに大本関連八団体に結社禁止令を出した。それだけではない。明治五年の大蔵省通達を拡大解釈して、大本全施設の徹底的破壊を強行したのである。

すべての神殿は破壊され、本部内の「金竜海」という池は埋められた。大理石と鉄筋コンクリート造りの「月宮殿」に至っては、三週間かけてダイナマイト千五百本を使って爆破したのである。

◎そして予言どおり……

「大本は潰され、日本が潰れる」

王仁三郎の不気味な予言を治安当局が笑っていられるのもわずかの間だった。

王仁三郎の予言どおり、日本は泥沼の戦争に突っ込んでいく。弾圧の翌年（三六年）、二・二六事件。三七年、日中戦争開始。四一年、太平洋戦争。そして、ミッドウェー海戦以降負け続ける日本は、沖縄戦、各地の大空襲、そしてヒロシマ・ナガサキの原爆を経て、最終的に四五年八月十五日の破局を迎えることになる。

大本大弾圧を境に、日本という国は焼け跡しか残さない悲惨な運命に投げ込まれていったのだ。そして、予言者出口王仁三郎が投獄されていた二四三五日と全く同じ期間、日本は連合国の占領下に置かれたのである。

なしたことは自分に返る、とカルマの法則は冷厳に宣告する。聖者を迫害した国家の運命は、このように悲惨なものとなることが定められているのだ。

「キリストを十字架にかけたユダヤの運命については、皆さんもよく知っているはずである。その後、ローマに追われ、そして流浪の民として一九〇〇年代の半ばまで彼らは放浪を続けなければならなかった。つまり、自国を持つことができなかったのである。それほど、一人の聖者を冒涜（ぼうとく）したり、あるい

は謗ったりすると、経典に書かれているように、激苦地獄への運命を歩かなければならないのである」

（九四年三月十三日　麻原彰晃尊師説法より）

これからもわかるとおり、予言者を弾圧した場合、このような激しい国家的な災難に遭わなければならないのである。

そして今存在しているオウム真理教は、それよりも精神的ステージの高い者がそろっている。しかも出家し、ボーディチッタを、つまり性エネルギーを保全している者たちである。この弟子たちに対する国家の弾圧は、果たして、これから迎えるであろうハルマゲドンにおいて、日本をどのような方向に導くのか、わたしはそれを考えると非常に悲しく、そして哀れみの心が出てくるのである。

麻原尊師の予言、驚異の的中一覧 ◎

1. 経済

◎日本は、アメリカ・ヨーロッパとのね、経済摩擦をきっかけとして、少しずつ少しずつじり貧の生活に入っていくだろう。いいですか。その本当の口火が切られるのは一九九〇年だ。

（八七年五月四日秩父集中セミナーにて／「イニシエーション」オウム出版刊所収）

一九九〇年を境にして日米経済摩擦は激化している。これは、湾岸戦争でさらに悪化し、米国では反日感情が高まる。バブル経済も崩壊し、円高による大幅な利益損失も加わって、日本にじり貧の生活がじわじわと迫っている。


湾岸戦争と経済
対日批判増大を懸念
ずるい印象恐れる企業
目立つまい
米議会、対日不満高まる
「中東派兵の経費負担少ない」
ゲッパート氏ら会見

◉この消費税がＯＫになったら、また消費税は大きくなるから、やっぱり止めるべきだと……。

（九二年十二月「おはようナイスディ」インタビューにて）

一九九四年十一月十一日、九七年四月より消費税率を引き上げる（三パーセントから五パーセントに）案が衆議院を通過した。

消費税率を5％に

与党税調、大綱原案固

増減税を一体処

社党内なお反対意見

実施は96年4月が大勢

与党税制案の骨子

税制改革法案

きょう衆院通過

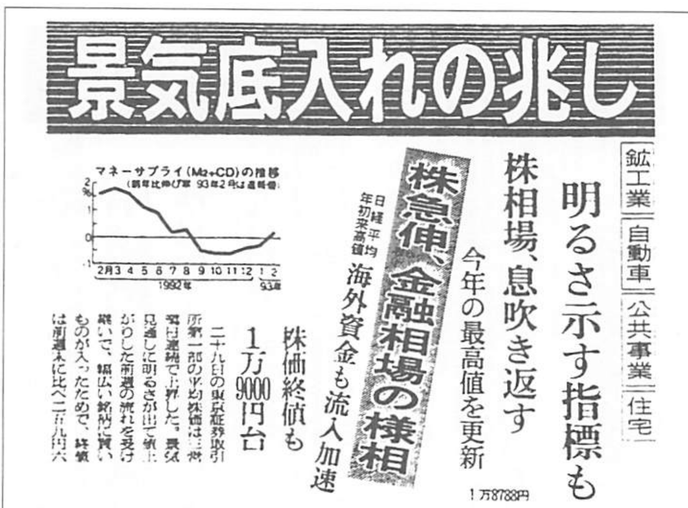
議長あっせん案で収拾

◉経済の予言なら、（九三年）二月、三月にちょっと上がりますよ。しかしそれはあくまでも貪り多き日本人に投資をさせて、で、その後一気に引き揚げてその金をなくしてしまうと。

（九二年十二月「おはようナイスディ」インタビューにて）

◉九三年の中盤、後半になると、もっともっと経済は悪化します。

（九三年三月二十一日杉並道場にて／『麻原彰晃、戦慄の予言 第二弾』オウム出版刊所収）



景気底入れの兆し

鉱工業 自動車 公共事業 住宅

明るさ示す指標も

株相場、息吹き返す

今年の最高値を更新

1万8788円

株急伸、金融相場の様相

日経平均年初来高値

海外資金も流入加速

株価終値も

1万9000円台

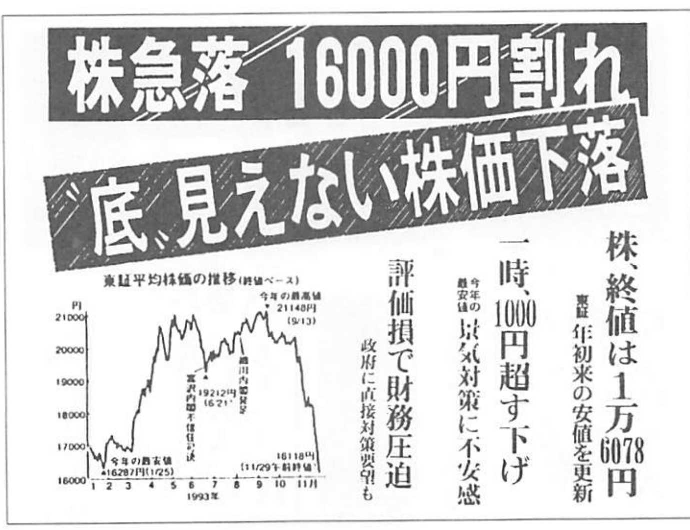
二十九日の東京証券取引所第一部の平均株価は三営業日連続で上昇した。景気見通しに明るさが出て値上がりした前週の流れを受け継いで、幅広い銘柄に買いものが入ったため、終値は前週末に比べ二百九円六

◉株の投資を行なっている人は、そうだね、六月ぐらいまでは、まあ様子を見ながら投資してもいいかもしれないが、七月以降は投資をしないように。

（九三年四月十八日杉並道場にて／『麻原彰晃、戦慄の予言 第二弾』所収）

一九九三年三月に株価は一時的に上昇し、十一月には一万六千円割れと急落した。

よくあるように自社の株を買わされていたある銀行員は、この予言を信じてまだ株価が上がり続けているうちに周りの反対を押し切って銀行株を売り払った。その後、株価は急落したが、その銀行員はちょうど高値で売ることができたため、結果的に約三百万円の現金をセーブすることができた。


株急落 16000円割れ
"底"見えない株価下落
株、終値は1万6078円
東証 年初来の安値を更新
一時、1000円超す下げ
今年の最安値 景気対策に不安感
評価損で財務圧迫
政府に直接対策要望も

◉円高はいっそう進むだろうね。わたしは一〇〇円を切ると考えています。

（八七年五月四日秩父集中セミナーにて／『イニシエーション』所収）

予言当時、一ドル＝一四五円。「一二〇円を切った段階で日本経済崩壊」と断言した専門家もいた当時、一ドル＝一〇〇円は、とうてい実現しそうにない予言だった。しかし、一九九四年六月二十二日、ニューヨーク外国為替市場で一ドル＝九九円九〇銭を記録。その後も円高は進み続けている。



◉円とドルとの関係は徐々に徐々に一ドル＝九〇円、一ドル＝八〇円といったかたちの円高が進むはずである。

（一九九五年一月一日　オウム真理教ラジオ放送「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」にて／『日出づる国、災い近し』オウム出版刊所収）

一九九五年三月八日、東京外国為替市場で一ドル＝八八円七五銭を記録。ついに八〇円台に突入した為替レートはその後さらに上昇を続け、三月下旬以降は八〇円台前半が当たり前の状況になっている。


東京円　一時88円75銭

(東京市場の日本銀行最終公表相場)

4月10日一時80円15銭

東京円、一時80円15銭

米欧91円台に

FRB議長表明「ドル安行

独も声明

2. 政治

◎日本における選挙だが、これは非常に波があるだろう。波があるというのは、例えば、自民党が大勝したり、逆に大敗したりということだ。

（八七年五月四日秩父集中セミナーにて／『イニシエーション』所収）

一九八六年七月の衆参同時選挙では自民党が圧勝。八九年七月の参議院選挙では消費税導入により自民党惨敗。与野党の逆転が起こった。翌九〇年二月の衆議院選挙、九二年の参議院選挙では自民党が勝利、九二年には与野党逆転状態が解消された。しかし、九三年七月の衆参同時選挙では自民党が過半数を割るという惨敗ぶり。結党以来の事態で、自民与党五十五年体制に終止符が打たれた。



◉国家の力、警察の力が増大していくだろう。

（八七年五月四日秩父集中セミナーにて／『イニシエーション』所収）

一九九二年六月十五日、ＰＫＯ協力法が成立し、政府はＰＫＯ参加等の国家的規模の活動に当たって、国内の人と物資を意のままに動かせるようになった。

また、一九九二年三月一日には、「暴力団新法」が施行。これにより、警察権力は「暴力団」と呼ばれる団体の活動を、司法手続きを一切経ずに封じ込めることができるようになる。「これは憲法に違反する稀代の悪法だ」（遠藤誠弁護士）という批判の声も多い。


PKO協力法成立
自衛隊の本格的海外派遣に
社党
社民連
本会議を欠
同日選なし確定的
暴力団情報を公開
全国の警察で
講習受けた人対象
組織暴力
●対策法スタート
新法の『治安法化』危ぐ

◉一九九一年から二年くらいの間に、農作物の輸入自由化が行なわれるだろうね。

（八七年五月四日秩父集中セミナーにて／『イニシエーション』所収）

農作物の輸入自由化は、一九九一年四月の牛肉・オレンジ自由化、九二年四月のオレンジ果汁輸入自由化、九三年十二月の米輸入自由化と、年を追って進んでいる。


牛肉 オレンジ きょうから自由化

牛肉、オレンジの輸入が一日から自由化される。百貨店やスーパーなどは大々的な販売キャンペーンを予定しているが、経過措置として牛肉に七〇％（初年度）の高率関税が課される一方、オレンジは品不足状況にあり、当面値下がりは期待できそうにない。

牛肉は過去三年間、毎年六万トンずつ輸入枠を拡大し、九〇年度は三十九万四千トンが輸入されている。ただ在庫がこの三分の一もあり、供給過剰感が強い。このため初年度の輸入量は前年比マイナスになるとの見方が多い。関税率が高いので価格も下がらない見通し。従って国内牛肉の値下がりにもつながらないとみられる。

一方、オレンジは八七年度以降四年連続輸入枠を消化しておらず、枠が撤廃されても影響はほとんどなさそうだ。主力のカリフォルニア州が昨年末の寒波で大幅に減産、小売価格はむしろ高くなる見込みだ。

牛肉 本番 自由化 オレンジ

商社など輸入拡大 ミカン農家は戦々恐々

オレンジ果汁自由化スタート

一部に供給過剰懸念

コメ開放 首相会見

断腸の思い

◉政治的には右傾化してくるはずだ。

（八七年五月四日秩父集中セミナーにて／「イニシエーション」所収）

一九八九年二月の新学習指導要領では、「日の丸・君が代」の義務づけをはじめとして、「右傾化」と呼ぶにふさわしい改訂がなされた。また九二年六月にはPKO協力法が成立し、九四年七月には社会党党首の村山富市首相が自衛隊を合憲と認める発言を行ない、右傾化が加速している。


新学習指導要領案

日の丸・君が代義務づけ

「道徳」の徹底図る

高校社会「地歴」「公民」に再編

元帥復活

PKO協力法成立

自衛隊「憲法の認めるもの」

村山首相 国会答弁で明言

村山首相答弁の骨子

◉一九九三年には再軍備だ。

（八七年五月四日秩父集中セミナーにて／「イニシエーション」所収）

一九九二年に成立したＰＫＯ協力法に基づいて同年カンボジアに派遣された自衛隊が、一九九三年、自動小銃を装備。その後、ＰＫＯ協力法による自衛隊の海外派兵はモザンビーク、ルワンダと続き、九四年十一月には、ルワンダで自衛隊が初の緊急出動を行なった。



◉天皇が「象徴」から「元首」に変わる。

（九二年九月に予言）

この予言がなされたわずか一カ月後の九二年十月、天皇訪中に伴い、NHKが天皇を三度にわたって「国家元首」と表現、朝日新聞の記事をはじめ、識者から非難の声があがった。



◉わたしの予想では、今年の終わり、あるいは来年の頭ぐらいに次のような現象が起きる。それは、カンボジアで自衛隊員が殺されるということだ。

（九三年三月二十一日杉並道場にて／『麻原彰晃、戦慄の予言 第二弾』所収）

一九九三年四月、カンボジアにて協力隊員として参加していた大阪の青年が殺害された。その後、警察官も殺害されている。


カンボジア選挙監視員
日本人殺害される
民間ボランティア
乗った車に銃撃
大阪出身
中田さん

◉九四年三月において、細川政権は倒れるはずである。

（九三年十月六日名古屋支部にて）

一九九四年三月、細川首相の一億円借金問題に関連して野党が予算審議を拒否、その引責というかたちで四月、細川首相は辞意を表明した。


細川首相が辞意表明
内閣あすにも総辞職
予算審議めど立たず
佐川借金 資料提出
首相、改めて拒否
国対委員長会談
細川首相の1億円借金
「返済に政治献金役立つ」

3. 風潮

◉日本の国民は徐々に徐々に、同じようなものの考え方に統一されていくだろう。

（八七年五月四日秩父集中セミナーにて／『イニシエーション』所収）



国際理解、道徳、伝統を重視

学習指導要領 文部省が全面改定案

中学に「習熟度別」

国旗・国歌を明確指導

小学、平成4年度から

新学習指導要領案

日の丸・君が代 義務づけ

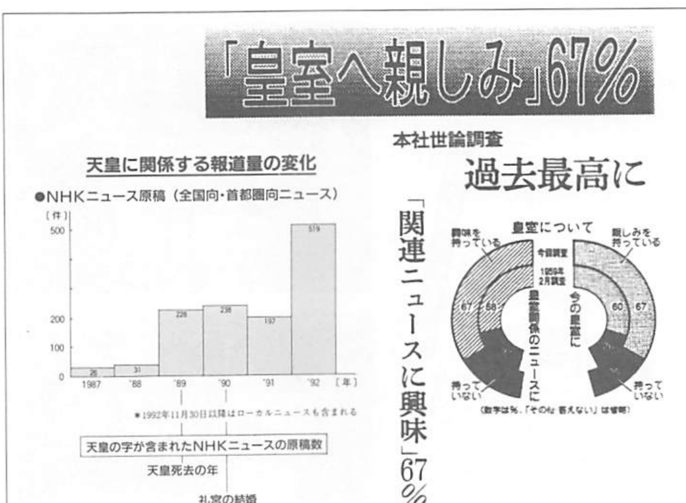
「道徳」の徹底図る

高校社会「地歴」「公民」に再編

マスメディアの流す情報は年々偏向してきている。八九年天皇死去の際には、全テレビ局が「自粛」し、コマーシャル抜き、番組総変更で皇室関係の報道を行なった。このような現象は九五年一月の阪神大震災の際にも見られた。

また、マスコミは、「即位の礼」「大嘗祭」「結婚の儀」など相次ぐ皇室行事を大きく取り上げ、「開かれた皇室」のイメージづくりに努めている。それを受けて九三年五月の朝日新聞による世論調査では六七パーセントの人が皇室に親しみを感じており、阪神大震災への皇室の「被災地見舞い」なども手伝って皇室賛美のムードも高まっている。

さらに、自衛隊の海外派兵に対する世論が九〇年から九二年にかけてのわずか一年で、反対から賛成へと大きく変わるなど、マスメディアによる世論の統一も、年を追って進んでいる。



◉人々は、よりいっそう現実主義にね、移行していくだろう。そして、わたしたちを操っているマスコミはだ、いいですか、わたしたちに食欲、性欲、それからスポーツというね、三つの享楽しか与えなくなるだろう。別の言い方をすれば、精神的な面を徐々に制約していく、ということだよ。

（八七年五月四日秩父集中セミナーにて／『イニシエーション』所収）



この言葉どおり、マスコミはテレビ、ラジオ、雑誌等を通じて、食欲、性欲、スポーツの情報を大量に垂れ流すようになり、マスコミ情報は低俗化した。



4. 自然災害

◉今年は、干ばつがあるよ。（八七年五月に予言）

◉しばらくの間、暑さに気をつけなくてはね。（八七年五月に予言）

一九八七年の夏は猛暑で、七月二十三日には日射病・熱射病で東京都内で五十八人が倒れ、翌日には全国各地で日射病・熱射病の死者も出た。また、二十五日には都内全域の救急車出動件数が一三〇一件を数えた。この夏は、日本だけではなく、東南アジア、インドなども記録的な大干ばつに見舞われた。



◉今年の終わりごろに、三原山が爆発するぞ。

（八六年三月に予言）

◉三原山は再噴火するよ。

一九八六年十一月十五日、大島三原山大噴火。

翌八七年十一月十六日、大島三原山再噴火。

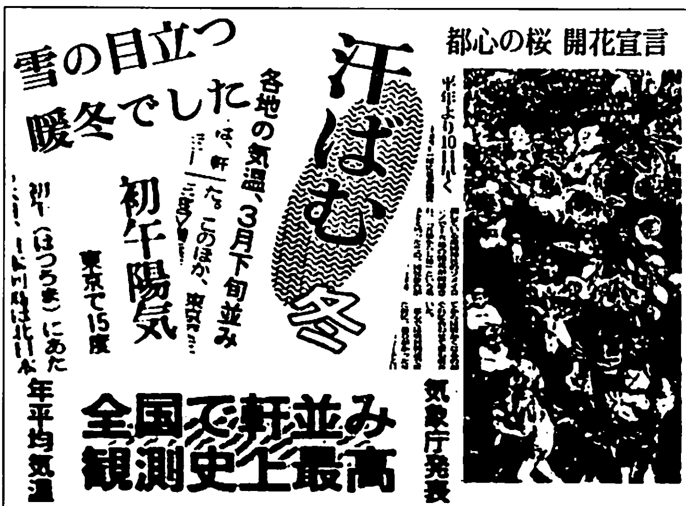


◉冬と夏の区別がつきづらくなってくるだろうね。例えば四月、五月になろうとしているのに急に冷えたり、あるいは十二月になってぽかぽか陽気になったりといった現象が起きてくるだろう。

（八七年五月四日秩父集中セミナーにて／「イニシエーション」所収）

八六年から九四年まで、東日本では八年連続、北日本では六年連続の暖冬。平年より二度以上気温が高く、九〇年十二月には東京で観測史上最高気温の二三・五度を記録するなど全国で記録的な暖冬が続いている。

一方、夏は八八年、九一年、九三年に全国的な冷夏が訪れ、最高気温平均値が、平年を五度も下回った。特に九三年夏は、一九五四年以来、三十九年ぶりの冷夏。平均気温は南西諸島を除



き全国的に平年を下回り、特に北日本の太平洋側は低かった。降水量は九州南部で平年の三倍近くに達し、北・東日本の太平洋側では平年の一・五倍を超えた。日照時間は全国的に平年を下回り、東北〜九州地方にかけては平年の五〜八割。この著しい低温・日照不足で不稔が全国で発生し、稲は青立ち状態。最終的なコメ作況指数は戦後最悪の七四という厳しい不作となった。

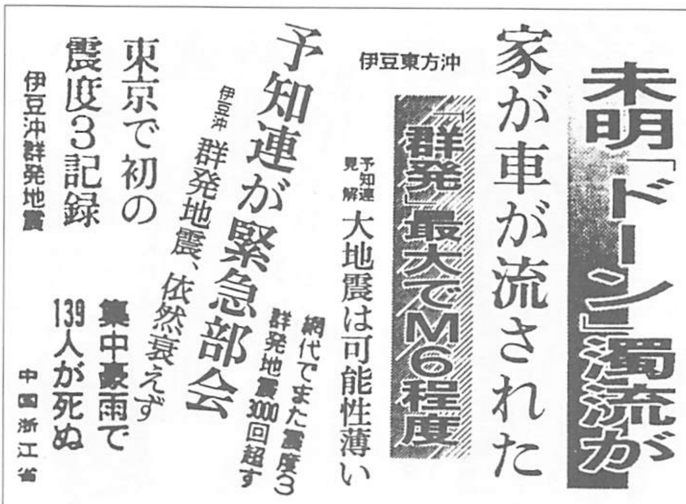
また、八九年から九一年の三年にわたって、五月に霜・雹（ひょう）・落雷・豪雨があり、栃木では平年の三倍の落雷が記録されたり（八九年）、群馬で農作物に五億円の被害が出たり（九〇年）、宇都宮で雷観測日十日、降雹連続三日という観測史上最多の記録が出たりした（九一年）。九三年五月には栃木県日光で平年より五・五度低い最低気温マイナス〇・八度も記録されている。



◉本期間中（七月十日から八月九日）は、地震・大災害・集中豪雨……という可能性が高いでしょう。

（『マハーヤーナ』八八年七月号寄稿）

一九八八年七月二十～二十一日、広島・島根で集中豪雨があり、死者行方不明者合わせて十五人を出した。また、七月二十六日～八月二日には伊豆半島東方沖で一万三百四十八回の群発地震が記録される。さらに、七月三十一日には中国浙江省にも集中豪雨が降り、死者行方不明者合わせて四百人以上という惨事を招いた。


未明「ドーン」濁流が
家が車が流された
「群発」最大でM6程度
伊豆東方沖
予知連見解 大地震は可能性薄い
網代でまた震度3
群発地震3000回超す
予知連が緊急部会
伊豆沖 群発地震、依然衰えず
東京で初の震度3記録
伊豆沖群発地震
集中豪雨で139人が死ぬ
中国浙江省

◉地震……やっぱりいちばん危険なのは神戸だということだね。

（九五年一月八日オウム真理教ラジオ放送「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」にて／『日出づる国、災い近し』所収）

一九九五年一月十七日、兵庫県南部を震源とするM七・二、震度七の直下型地震が発生。死者五千人以上という戦後最悪の被害となる。最も被害の大きかった神戸では、地震による家屋倒壊だけではなく、火災や食糧難などの二次災害にも襲われた。



5. 戦争

◉（八八年）四月中旬には、イラン・イラク戦争が激しさを増すかもしれません。このとき、アメリカが強く干渉したら、それを回避できそうです。

（『マハーヤーナ』八八年四月号寄稿）

一九八八年四月十八日、アメリカ軍がペルシャ湾の石油基地攻撃。四月二十五日にはイラン・イラク戦争の大国管理の色彩が強まる。


米・イランが交戦

ペルシャ湾 米、石油基地攻撃

イラン・イラク戦争

大国管理の色彩強まる

「米艦触雷

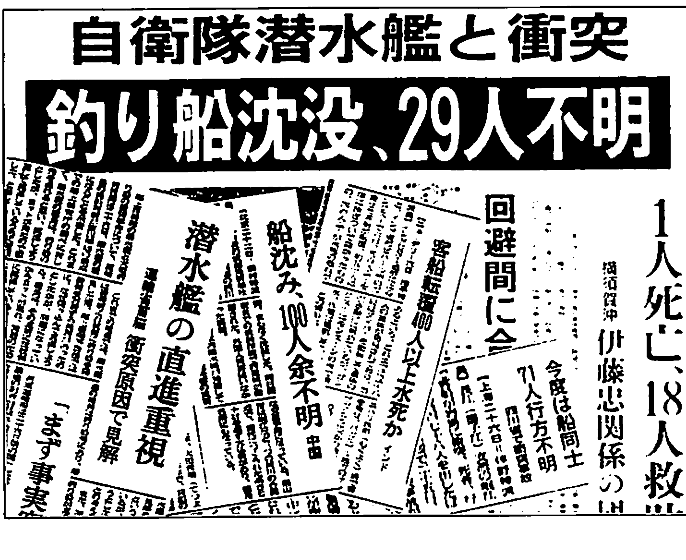
2艦

6. 事故

◉七月後半から八月前半にかけて、海での事故・惨事が起こる可能性があります。

（『マハーヤーナ』八八年七月号寄稿）

一九八八年七月二十一日、中国で二百五十人を乗せた渡し船が沈む。七月二十三日には海上自衛隊潜水艦「なだしお」の衝突事故が起こり、三十人の死者が出た。さらに八月六日には、インドで客船が転覆事故を起こしている。



自衛隊潜水艦と衝突

釣り船沈没、29人不明

1人死亡、18人救

伊藤忠関係の

回避間に合

今度は船同士

71人行方不明

客船転覆400人以上水死か インド

船沈み、100人余不明 中国

潜水艦の直進重視

衝突原因で見解

「まず事実

7. 宗教

◉（九二年の宗教界は）社会的な問題になる年であると考えています。……今まで安泰であった宗教にも、一つ一つメスが入っていくんじゃないかと思いますね。……一つではなく、二つ、三つはそのタイプになると思いますね。……少しずつ少しずつ、その教義の問題も出てくるんじゃないでしょうか。つまり、宗教の持っている、一つの俗世的なけがれですね、例えばお金が集まるとか、あるいは内部の権力抗争があるとか、そういう問題だけではなくて、その宗教のもう一つ持っている宗教的なものというんですか、そういうことがクローズアップされ出すと思います。

（九一年十二月「おはようナイスデイ」インタビューにて）



九二年は宗教団体では特に愛の家族、統一協会が叩かれた。雑誌では教養にもメスが入り始めている（『文藝春秋』など）。

◉五年後くらいにオウム真理教は真理だと定評が立つだろう。（八七年十一月一日福岡支部にて）

一九九一年九月、「朝まで生テレビ」で徹底討論。経済人類学者・栗本慎一郎氏、評論家・西部邁氏、宗教学者・島田裕巳氏、作家・中島渉氏らが麻原尊師とオウム真理教を非常に高く評価する。これ以降、オウム真理教の教義に対する認識が一般に深まり、評価されるようになった。また、同年十二月、「たけしのテレビ・タックル」で尊師とビートたけし氏が対談。話が弾み、高度な法則が交わされた。たけし氏の希望により、翌年、集英社『BART』誌上において再び対談がなされた。



わたしはすでに、様々な予言を行なっている。そして、そのほとんどが的中している。一九九五年の予言についても、まず一月一日のラジオ放送で、「一ドル九〇円、八〇円といったかたちの円高が進む」と予言し、これも的中した。そして、神戸地震も的中。それから、これから日本はどんどん災禍に巻き込まれますよ、と予言した。

ここでわたしがマスコミに問いたいことは、神戸地震をわたしが起こすことができたのだろうか、ということである。なぜ、的中したのか。「一ドル八〇円になりますよ」とわたしは予言したが、一ドル八〇円というその状態に、わたしはこの日本を陥らせることができるのだろうか。当然この二つは否である。

また、ダウが一万六千円を切った今、日本の経済的な苦しみはどんどん悪化するはずである。これも、わたしが原因なのだろうか。

ところで、これらのものがわたしが原因でないとするならば、今まで起きた災い、例えばそれは松本のサリン事件や、あるいは地下鉄サリン事件、これをどうしてオウム真理教が起こすことができると考えることができるのだろうか。それについてわたしは大変な疑問を有するのである。

◎報道されない拉致監禁事件の真相

1. 降ってわいた假谷氏「拉致」事件

◎白昼堂々の拉致事件

二月二十八日、目黒公証役場事務長假谷(かりや)清志さんが、白昼堂々目黒駅近くで拉致されるという事件が起こった。ワゴン車が用意され、若い四、五人のグループが假谷さんを連れ去ったのである。

ここまでは用意周到でありながら、午後四時半、人通りの多い表通りという衆人環視の中で、顔を隠そうともせずに犯行が行なわれている。わざわざ犯行を目撃されるために。

その上で「オウムの者だが、我々がやった」という電話がマスコミ各社にあったというのだ。

関係者の追及に取りかかった警察が事情を聞いたのは、犯行に使われたレンタカーを借りるときに提示された免許証の持ち主。彼は都内のスナック経営者だった。ところが、この男は最初「免許証が知らないうちに持ち出されていた」と言っていたにもかかわらず、後から「ある人物に貸したが、名前は言えない」と証言を変えている。

◎オウム真理教と結びつけられる

この事件発生後すぐ、假谷氏の妹さんがオウム真理教から脱会したがっていたという情報が流れ、そのトラブルに巻き込まれたのではないかという憶測がなされた。

また、「わたしがいなくなったらオウム真理教を捜してくれ」という「假谷メモ」があったという。さらに、マスコミにオウム真理教の者が電話したという情報もあり、完全に「オウム真理教がやったに違いない」ということになってしまった。

しかし、このように見え透いた事件が本当に起こるものだろうか。読者諸氏に事件の本質を見極めてもらうため、報道されなかった真実をここに公開しよう。

◎報道されなかったタイムテーブル

假谷氏の妹Nさんはオウム真理教に出家しようとしていたほどの熱心な信者である。

九四年二月二十四日、Nさんは箱根の知人に会いに向かった。そこから出家の準備をするために小田原へ向かったのだ。

このとき、Nさんを担当していたオウム真理教の出家修行者は、また二十七日に会う約束をして別れている。明らかにこの時点では、確実にNさんは出家しようとしていた。これがNさんと真理教のメンバーが最後に会った日である。

だが、それから音沙汰はなく、会う約束だった二十七日に、担当者がNさん宅へと向かった。だが、Nさんはおらず、代わりに対応したのが假谷氏だったのである。担当者が名刺を渡して話を聞くと、假谷氏は「Nさんをしばらく見ていない」という。そこで担当者は納得して帰った。

オウム真理教側の者が假谷氏と会ったのは、この担当者が初めてであり、しかもこのときだけである。他の者は假谷氏の存在すら知らなかった。この短い対応の中で、オウム真理教と假谷氏との間にトラブルは全くなかったのである。

假谷氏はいつ「拉致される不安」を感じたのだろうか?

◎そして二月二十八日

翌二十八日、假谷氏が拉致されたのは午後四時半ころである。体調が悪いということで、通常より三〇分早い帰宅だった。まじめな假谷氏がなぜわずか三〇分我慢できなかったのか、そして犯人は普段と違う行動をとった假谷氏をなぜ拉致できたのか、疑問が残る。

さて、オウム真理教にNさんから連絡があったのは午後五時十五分だった。担当者に、

「今、東京から離れたところにいる。一人で考えたのだが、出家はやめさせてもらう。信徒もやめさせてもらいたい」

と話したのだ。二十四日には熱心に出家の準備をしていたNさんが、一人で考えた末に四日間で心変

わりするというのは不自然だ。
しかし、本人がやめるというなら仕方がない。担当者が支部責任者に報告すると、
「しょうがないな」
ということで、この件は片づいた……はずだった。

◎二度目の電話

Nさんから二度目の電話が真理教に入ったのは午後八時だった。五時過ぎの段階では拉致事件のことには触れていなかったが、この八時の時点では、假谷氏が拉致されたことをNさんは知っている。電話では、拉致事件についてNさんは、公証人役場の事務所から聞いたということになっている。だが、これは不自然だ。最初の電話が、すでに事務所の閉まっているはずの五時すぎ。Nさんは本当は、だれから事情を聞いたのだろうか。

◎疑問だらけの拉致事件

その後の報道を見て、Nさんの担当者は「なぜこのような話になるのかわからない」と語る。
まず、オウム真理教側で假谷氏を知っていたのは担当者一人。しかも、事件の前日にたまたまちょっ



読売新聞
3月22日 水曜日
1995年(平成7年)
THE YOMIURI SHIMBUN
EVENING EDITION
1995年(平成7年) 3月22日 水曜日
真理教捜索
強制捜査
仮谷さんら致容疑
25カ所に警官2千500人
仮谷さん監禁の容疑
幹部1人に逮捕状
急展開
仮谷さん拉致事件

と会っただけである。他の者は、担当者からその話すら聞いていなかった。そんな假谷氏を拉致する動機もなければ必要性も全くない。

第二に、なぜ松本容疑者の名前が出るのか。松本剛は確かに以前、Nさんの担当をしていたこともあるが、最近は全く関わりがなかった。担当者は「なぜ松本君の名前がこの事件で出てくるのか理解できない」と首をかしげる。

第三に、これは完全に報道の誤りだが、Nさんが脱会する意思を告げたのは、拉致事件が起こったあとである。「脱会を防ぐために假谷氏を拉致したのでは?」という推測には、何の根拠もない。つまり、假谷氏が「拉致される不安」を感じる必然性もなく、またオウム真理教と假谷氏拉致事件を結ぶ「点と線」など、最初から存在しないのだ。

◎金銭トラブルすらなかった

一年の間に合計六千万円のお布施をNさんがしていたことに関し、マスコミはゆがんだ情報を流し、オウム真理教がNさんからお金を巻き上げ、それがトラブルを生んだかのような報道がなされている。だが、事実はこうだ。

このお布施は、最初に二千万円、そして次に四千万円のお布施がされている。最初の二千万円に関しては、最初、Nさんに確かに多少のためらいがあったようだが、もちろん本人の意思でお布施した

ものである。
そのためらいがすっかりなくなっていたことは、次の四千万円のお布施の仕方でわかる。ほとんど売れる見込みのなかったゴルフ会員権を売った四千万円を、Nさんは大喜びで自発的にお布施しているのだ。
「こういうお布施をしたかったんですよ！」
Nさんは担当者にこう語っている。もし先の二千万円を「巻き上げられた」などと思っていたら、その倍に相当する金額を喜んでお布施するなどということがあり得ようか。

◎そして松本君の指紋

そして、オウム真理教「幹部」（と報道された）松本剛の指紋がレンタカー内とレンタカー契約書から発見されたということで、完全にオウム真理教が疑わしいということになった。この時点で強制捜査が入る可能性も高かったようだ。
だが、警察は待った。二千五百名という史上最大の強制捜査を行なうために……。

2. 大阪「拉致監禁」事件の真実　稲見君の身柄は大丈夫か？

◎突然の強制捜査

三月十九日二十一時ごろ、オウム真理教大阪支部道場に、警察が強制捜査に入った。マスコミ報道では次のようになっている。

「箕面市でオウム真理教によって拉致された学生が強制捜査によって無事保護された」

いかにもオウム真理教が拉致監禁を行なったかのような印象を持っておられる方も多いだろう。いや、大半の人はそう信じているはずだ。

しかし、この事件にも假谷氏拉致事件と同様に、報道されていない真相が数多く存在する。

◎稲見君「軟禁」は親の仕業！

真実とは逆の報道はいくらでもあるので、真実だけをここで述べるとしよう。

熱心な信徒であった稲見聡君（二十一歳）はオウム真理教への出家を心から希望していた。そして、この三月十九日は、まさに彼の出家予定日だったのである。

だが、彼の両親は信仰に反対していた。ましてや、出家など許すつもりはなかった。もちろん、稲

見君は立派に成年に達しており、その信仰を妨害する権利は、たとえ親であろうともないことは明らかである。

そのことを理解せず、稲見君を自分たちの「所有物」と勘違いしている両親は、彼を軟禁するという暴挙に出た。

◎警察が大阪支部を急襲！

だが、十九日朝、出家に対する強い意思を持っていた稲見君は、自力でその軟禁状態を振り切り、迎えにきた大阪支部の者の車に乗り込んだのである。ここで、完全に自分の意思によって稲見君が大阪支部道場に向かったことは明らかなのだ。

その後、彼は自主的にオウム真理教大阪支部道場で修行していた。支部の者もずっと見張っていたというようなことは当然なく、修行内容も稲見君の自由意思に任されていた。

ところが、その間、稲見君の両親は「オウム真理教に拉致・監禁された」と警察に訴えていたのである。

警察は事実関係を全く調べずに、二十一時ごろ、オウム真理教大阪支部道場を急襲。百人前後の武装警察官が押し寄せ、立会人※を全く付けずに捜索を行なったのだ。もし立会人がいたとしても、大量の警察官に対して一人か二人。立会人制度の意義を度外視した暴挙である。

※立会人：捜索が公正に行なわれるよう、家宅捜索においては立会人を置くことが義務づけられている。立会人の見えない場所で行なわれた捜索は違法であり、証拠能力を持たない。

◎稲見君を警察官が拉致！

本人はそのとき道場で修行をしていたが、そこに警察官約十名が土足で上がり、彼を取り囲んで「帰りましょう」と脅迫。さらに両親も来たが、本人は拒絶して立とうともしなかった。すると、蓮華座という座法を組んだままの稲見君を、警察官たちが寄ってたかって担ぎ上げ、本人の声に耳も貸さず、強引に連行したのである。

本人の意思に反して拉致したのは警察。これが事実である。

さらに乱入してきた十人の警察官が狙ったのは、大阪支部長ボーディサットヴァ・ヴァジラチッタ・マハーガヴァッチャ師長。後ろ手に回し、首を羽交い締め、引きずるように外に連行、逮捕。マハーガヴァッチャ師長は全く抵抗しなかったにもかかわらずである！

それに対して「どういうことですか」と尋ねたスワミ・カタプンニャムッタは、いきなり約十名の警察官に囲まれ、逮捕された。

さらに、この混乱の中でもう一人が逮捕されている。

◎捜査の違法性

まず、稲見君は成人であり、本人の意志によって信仰し、本人の意志によって大阪支部道場に来たことが明らかである。拉致・監禁ではあり得ない。


ニッカン
オウム 3人逮捕
大阪支部を強制捜査
大阪市内 阪大生ら致監禁
日刊スポーツ
NIKKAN SPORTS
オウム東京総本部ビルに火炎瓶
1995年(平成7年)3月20日(月曜日)
東京新聞
オウム教信者ら3人逮捕
阪大生拉致の疑い
脱会絡み 支部で無事保護
大阪府警
オウム真理教大阪支部を捜索
信者の学生を監禁容疑 3人逮捕

午前十一時四十分…府箕面市内の大…子学生三二の家…団体オウム真…息子が拉致…されたと」との一一〇番が大阪府警にあった。
府警捜査一課と東署が午後九時ごろから、大阪市中央区のビル内のオウム真理教大阪支部を捜索、学生を発見し、保護するとともに支部にいた堺市赤坂台五、桜井章博容疑者(二〇)ら三人を逮捕監禁の疑いで緊急逮捕した。
他の二人は香川県生まれの多田成治容疑者(三五)と…十四、五歳の男。この男は…調べに対し、黙秘している。

次に、大阪支部道場は、法的に見て夜間強制捜査をする必要のある場所ではない。公衆が自由に出入りできるわけでもなく、また夜間の平穏が保証されるべきである場所で、夜間の強制捜査を行なうことはできないのだ。にもかかわらず夜間強制捜査を認めた国家権力の動きは非常に不自然なものである。

さらに、弁護士が連絡を取ろうとしても電話が通じないような工作が警察官によってなされた。つながっても警察によって瞬時に切られてしまうのである。これは捜査される側の人権を保護するための法律を蹂躙するものである。この捜査方法そのものが違法だったのだ。

そして、オウム真理教本部が管轄警察署に電話しても「知らない」の一点張りであった。これは極めて異常な状態で捜査が行なわれたことを示している。つまり、関係者に知られてはまずい、密室の秘密捜査を行なう必要があったのだ。

最後に、これが宗教弾圧である明らかな証拠として、本件容疑と全く関係のない名簿を押収したり(宗教者の名簿押収は刑事訴訟法第百五条に基づいて拒むことができる)、無関係の個人の所有物を捜索、あるいは無用の写真撮影を行なっているという事実がある。

事件と全く無関係のもの、例えばカレンダーを捜索する必要がどこにあるのか。

特に問題なのは個人の衣類の捜索であり、これは「極めて異常な捜査」(警察関係者)だということである。

◎この捜査の真の狙いは？

稲見君の件は明らかに警察にとって「タイミング良く」起こってくれたものだった。

この捜査の仕方を見る限り、「オウム真理教の内部事情を前もって知っておき、今後の本格的弾圧に備えよう」という警察側の意図が見え隠れする。

もう一つの不審点として、午前中に起こった事件に対し、夜、完璧な装備の警察隊が捜索に入ったという事実がある。警察は「いつでも強制捜査できる状態」にあったということだ。オウム真理教強制捜査は周到に準備されたものだったのである。

◎マスコミも共犯

捜査令状を発行するのは裁判官であり、警察と国家権力がつるんでいるのは言うまでもない。だが、それだけでなく、マスコミも関与している。

あるマスコミ関係者は証言する。

「警察から、『今日事件があるから来た方がいいよ』と言われていた」

オウム真理教側が別のマスコミ関係者に「どこから情報を得たのか」と尋ねたところ、「それは知らない方がいいよ」という答えが返ってきた。

この警察による拉致事件は、警察が裏でマスコミにリーク。「オウムは悪辣（あくらつ）だ」と印象づける報道

をさせようとして、計画的に仕組まれたことがわかる。

◎口封じされた稲見君

稲見君自身が、本人の意志で道場に来て修行していたことは、オウム真理教を攻撃し続けているジャーナリスト江川紹子氏も認めている。三月二十一日の夕刊フジで江川氏は、

「親は子供を脱会させたくて監視し、スキを狙って子供が道場へ逃げる、という事例がいくつもあります」

「そういう親のいうことだけに気をとられてはいけないといいたい」

と述べているのだ。もちろん、繰り返すが、稲見君は成年に達している。稲見君は警察によって、完全に違法なやり方で信教の自由を踏みにじられ、さらに真実を語れないように口を封じられたのだ。

警察のやり口を見てほしい。稲見君本人を連行し、その後、マスコミに会わせていない。さらに、事情をよく知る大阪支部の三名をすかさず逮捕。これで稲見君「拉致」事件の真相について語ることのできる者はいなくなったのだ。

わたしは純粋な国粋主義者の一面を有している。それはわたしが修行しているとき、これはいくつかの雑誌や出版物にも載せたが、聖徳太子が侍者を引き連れ現れ、そしてわたしに「日本をお願いしますよ」というメッセージを残している。

そしてまたあるときは、アビラケツノミコトという古神道的な、そしてヒンドゥーイズムの名前を授けられたものである。

わたしは日本の古来の文化が好きである。もちろんその文化の中に欠点もたくさん内在しているが、その中で仏教と共通する部分というのはたくさん存在するのである。例えば例をあげるならば、徳の高い年長者を敬うとかがその例である。もともと年をとるということは、その生活の経過によって、智慧が当然増大するはずである。そして、その人を敬うことによって自分自身も智慧を増大させることになる。これはちょうど四無量心の中の聖称賛の瞑想と近いと思われる。

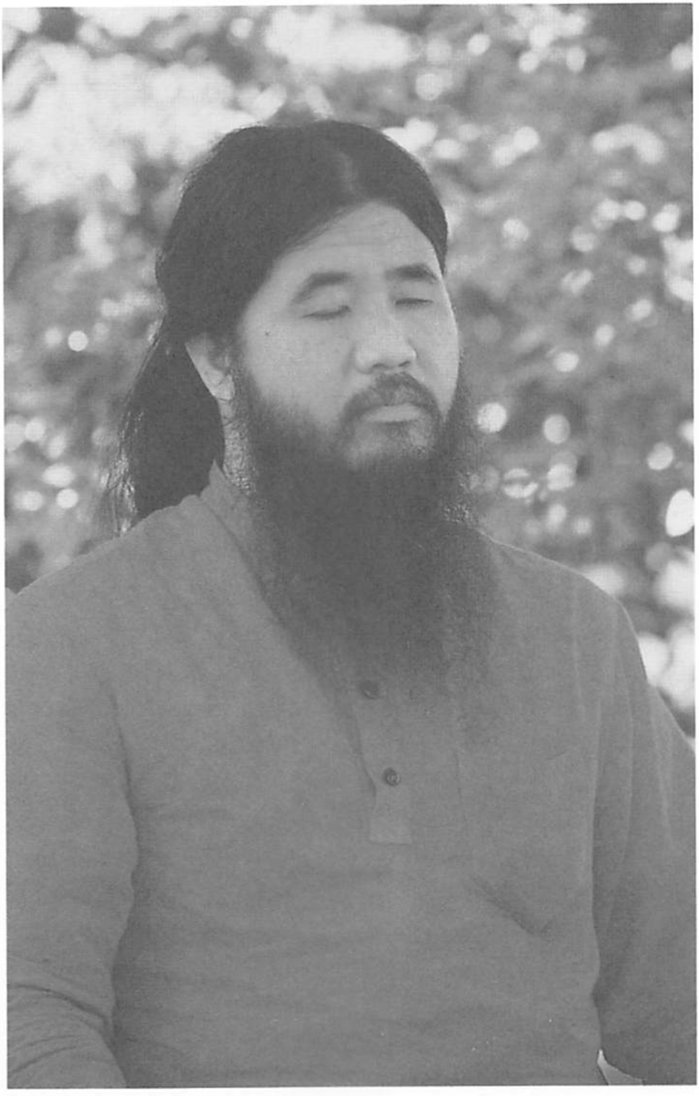
また、他人のために命を犠牲にする精神とか、あるいは父母のために生きるとかがそうである。

こう言うと一つ疑問を持たれる人もいるかもしれない。父母のために生きるのだったら、

今の出家制度はまさにその反対なのじゃないかと。しかし、仏教の教えには、その答えがあるのである。例えばそれはちょうど、真理勝者サキャ神賢の一番弟子であったサーリプッタが、自分の兄弟をすべて出家させたように——しかもそれは、もし近頃の警察権力のオウム真理教に対する見解からするならば、逮捕監禁罪に当たるような出家のさせ方をしているわけなのだが——それは、出家した子供を持つことがいかに両親にとって功徳になるかを考えるならば、おのずと理解できるだろう。

出家した子供たちは煩悩破壊の修行を行なう。そうするとそれを産んだ親には大きな利益が存在し、その親、親の親、親の親の親と七代まで先祖が浄化されると経典では説かれているのである。

したがって、この欲深き日本、欲望多き日本にとっては、その欲望多き日本を支えるだけの大きな出家教団が逆に必要なのである。これによって、善業のバランス、悪業のバランスが整うのである。



あの修行者は息子を奪う！

「律」大品第一第四誦品二四より
原訳：オウム真理教パーリ聖典翻訳チーム

「おい、あのゴータマとかいう出家修行者の話を聞いたか？」
「ああ、サキャ神賢とか呼ばれている奴だろ。知ってるとも。近ごろ有名だからな」
「あいつがこのマガダ国に現われてから、ろくなことにならん。大体、なんであんな奴に信奉者がいるというんだ？」
「信奉者がいるくらいはどうでもいいよ。問題は、出家だ」
「そう、この大マガダ国の名家と呼ばれる家の若い者たちが、次々とあのインチキ修行者にだまされて、出家している。神聖行とかなんとか言って、森や洞穴や墓場で何やら怪しげな修行をしているらしい」
「本当に問題だよ、あれは」
マガダ国でサキャ神賢が法則を説くと、その教えに従って多くの人が出家し、修行に打ち込んだ。だが、それを理解できない人々は、サキャ神賢を誹謗したのである。
「あのインチキ修行者は、俺の息子を奪っていった！」
「あのゴータマは、わたしの夫を奪っていったのよ！」
「ゴータマとかいう奴は、家庭を崩壊させてし

まう！」
「以前、あのゴータマという名のインチキ野郎は、千人の結髪修行者を出家させた。この間は、サンジャヤの弟子だった二百五十人の托鉢修行者を出家させている。そして今度は、このマガダ国の良家の息子たちだ。放っておくとどうなることやら……」
「お、おい、見ろよ！」
「どれ？……あれはサキャ神賢のもとで出家した者たちじゃないか。問いつめてやろう」
「おう、問いつめてやる！」
出家修行者たちは町の人々に取り囲まれた。
人々は口をそろえて言う。
「あの有名な出家修行者は、
マガダ国のギリッバジャに来て、
サンジャヤの弟子たち全員導いていった。
次はだれを導いていくつもりなのだ？」

＊　＊　＊

「世尊よ、町の人たちはこのように不満を持ち、



文句を言い、不愉快に思っているようです」

出家修行者たちから報告を受けたサキャ神賢は、いつもと変わらぬ表情で弟子たちに答えた。

「出家修行者たちよ、よく聞きなさい。彼らの非難の声は、長くは続かない。七日は続くだろうが、その後、消えていくだろう」

「では、町の人々の非難には、どのように答えればよいのでしょうか」

「それは、このように答えなさい……」

＊　＊　＊

「あの有名な出家修行者は、
マガダ国のギリッバジャに来て、
サンジャヤの弟子全員を導いていった。
次はだれを導いていくつもりなのだ?」

町の人々は、またやってきた出家修行者たちに同じ質問を繰り返した。だが、今度は出家修行者たちが町の人々をとがめ返す番である。

「間違いなく偉大な勇者であられる
真理勝者方は、
絶対の真理の法則によってお導きになる。
法則によって導き、
法則によって識別なさる方々が、
なぜ非難されねばならぬのか」

七日経って、非難の声は収まった。人々が出家の意義を知ったからである。

「出家修行者サキャ神賢とその弟子たちは、まさに法則によって導いているのだ。決して無法な行為ではない」

●皮肉な巡り合わせ

わたしのポリシーは、政治的には社会党の考えに近い。それは八九年の選挙公約を見てもわかるはずである。消費税反対、福祉充実、教育改革等がそれである。そして、去年村山氏が首相になったとき、わたしは、これから日本は少し変わるかなという期待を持った。また、その相棒が河野洋平氏だからなおさらである。というのは、わたしは彼が新自由クラブをつくったとき、これで政界の汚職がなくなり、清らかな政治が展開されるかもしれないな、と考え、またわたしの友人に新自由クラブの遠縁がいたから応援したものである。

しかし、運命とは皮肉である。この村山首相、そして河野副首相のときに、まさにこの二千五百名を動員した捜査、しかも一万二千人という完全武装の自衛隊が五分以内に飛び出せる状態での〝治安出動〟待機が、現実問題としてあったのだ。まさに、国家権力の歯止めの利かぬ大暴走。それに加えて、のちのオウム真理教弾圧が激しく始まったのである。

第四章 オウム真理教の実体

オウム真理教は三乗を掲げている。三乗とは、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナである。そしてこの全形態をテーラヴァーダとわたしたちは呼んでいる。

このオウム真理教の内容をもっとわかりやすく言うならば、まず大きく二つのパートに分けることができる。一つは個人の悟り・解脱である。そして、もう一つは、伝説のシャンバラではないが、具体的にこの地球の文明を守ることなのである。

この第一のパートについては、いろいろなオウム真理教の出版物が出ているから、ここでは省略するが、第二の部分についてはあまり出ていないので、少しお話をしたいと思う。

オウム真理教の掲げるシャンバラ化計画とは、まさに仏教的ファウンデーションのことなのである。このファウンデーションとは、「銀河帝国の興亡」という日本訳の原義なのである。この小説はまさにフリーメーソンが教典としているのではないかとわたしは考えている。この内容を現代的に置き換えるならば、まさに物理文明の発達した宇宙の端の惑星イコールアメリカ、それから、精神的な進化を遂げようとする宇宙の中心の星イコールイギリスを題材として、作られた小説であると思われる。

暗黒時代を救うために

「諸君、わたしは進行中の銀河帝国の衰退と滅亡のことを言っているのです」
心理歴史学者ハリ・セルダン

◎二つのファウンデーション

SFファンならだれもが知っているというアイザック・アシモフの名作が「銀河帝国興亡史」シリーズである。簡単にその骨子を紹介しよう。

銀河帝国は、一万二千年にわたって銀河全域を支配してきた。首都は、銀河の中心にある惑星トランター。帝国は繁栄し、安定している……とだれもが思っていた。

これに異を唱えたのが、心理歴史学者ハリ・セルダンであった。

心理歴史学――一定の社会的・経済的刺激に対する人間集団の反応を扱う数学の一分野、と規定されている。この学問を大成したハリ・セルダンは、過去と未来の社会がどのように変動するのか、計

算によって見事にはじき出すことができたのである。

その計算の結果は「帝国の滅亡」だった。繁栄を誇っているかのように見える銀河帝国は、実は崩壊を始めており、その滅亡後三万年の暗黒時代を経なければ第二帝国が出現しないというのである。

この暗黒時代には文明も失われ、人類は一から文化・科学・芸術をつくり出さなければならない。

だが、セルダンはこの暗黒時代をわずか一千年に縮めようとした。そのために、二つの「ファウンデーション」をつくったのだ。

◎セルダン危機

歴史の表面に現われる「ファウンデーション」は、銀河の辺境、ターミナスという惑星に置かれた。ここでは科学技術・芸術などを保存することになる。だが、ファウンデーションは単なる文化の貯蔵庫ではなかった。ファウンデーション自身が歴史の中で変貌し、そして三万年の暗黒時代を一千年に短縮するための積極的な役割を果たすことになる。

そのために、ファウンデーションには何度かの「危機」が訪れる。ところが実は、この危機はすべて、セルダンの巧妙な計算によって予測され、仕組まれたものだったのだ。

それゆえ、この危機は「セルダン危機」と呼ばれている。

最初の危機によって、純粋な研究機関であった「ファウンデーション」は、周辺の国々から干渉を受け、国家に変わっていくことになる。すでに銀河帝国では失われてしまったテクノロジーを周辺諸国に与えることによって、ファウンデーションは近隣諸国に逆に支配権を及ぼすことになるのだ。

第二の危機は、このテクノロジーに疑似宗教的な意味合いを付加することによって回避される。すでに科学技術はファウンデーションにしかなかったため、それは魔法のように思われたのだ。その技術の中には、鉄を金に変えるような「元素変成」法まである。

第三の危機によって、この宗教的支配は終わり、貿易によって支配される時代がくる。ここでファウンデーションは、銀河帝国に次ぐ強大な国家となるのだった。

当然、帝国との正面衝突がやってくる。この第四のセルダン危機は、帝国内部の権力闘争によって自然に回避されてしまうのであった。

ここまで、セルダンの予測は完璧に的中し、歴史は順調に進んでいく。

◎ミュールと第二ファウンデーション

第五の危機は、帝国の滅亡とほぼ時を同じくして「内乱」が勃発する……はずだった。だが、セルダンの予言は初めて外れる。

それは、計算外の要素、つまり突然変異体（ミュータント）のミュールが出現したからだった。ミュールはファウン

デーションを滅ぼしてしまう。

では、セルダンの計画は失敗してしまったのか？　そうではなかった。セルダンは計画のずれを修正するものとして、「第二ファウンデーション」を用意していたのである。それは第一ファウンデーションから見て「銀河の反対側の端」にあると伝えられてきた。

このファウンデーションは、第一ファウンデーションと対照的に、心理歴史学、そして精神感応を可能とする超能力を育成していた。この第二ファウンデーションが、ゆがんだ歴史を修正していくことになる。

ところで、この「心理歴史学」による未来操作は、人々が心理歴史学を知らないことが前提となっている。人々がすべてを知っていれば、それを覆すことになり、結果的に暗黒時代を一千年に縮めることは不可能になるのだ。――つまり、第二ファウンデーションの存在は宇宙に知られてはならないのである。その所在地が、実は銀河の「中心」のトランターであるということも……。

◎科学と宗教の融合

もう一度まとめておこう。

未来を知ることのできる心理歴史学者ハリ・セルダンは、帝国の滅亡とその後の文明の暗黒時代を予期した。そして、その暗黒時代の期間を短縮するために、二つのファウンデーションを設置した。

一つは科学技術的、そしてもう一つは精神的。この二つから、文明を継承する第二帝国が速やかに出現するのである。

科学だけでも新しい文明は生まれない。逆に精神性だけでも新文明を築き上げることはできない。その両者が協調し、融和することによってはじめて、優れた文明が誕生するということだ。

近代の西洋史を見れば、この二つの要素を備えた国が実在していることがわかる。第一ファウンデーションにあたる科学力はアメリカにあたり、第二ファウンデーションの精神性はイギリスが備えている。

本シリーズの主要部分は一九四二年から一九五一年にかけて書かれた。それ以前、つまり一九世紀から二〇世紀初頭にかけて、科学的発明・発見の大半がアメリカで行なわれている。その間、イギリスは精神的なものを発達させた。つまり、科学技術と精神性をそれぞれに発展させ、西洋社会全体の発展を狙ってきたといえる。

だが、東洋、特に仏教国にはこのような見方がない。そのため、特にテーラヴァーダ仏教を奉ずる南アジア・東南アジアの仏教国は次々崩壊している。

◎ファウンデーションはどこに？

ここで少し引用することにしよう。

※エドウィン・バーンハウム　足立啓司訳『シャンバラへの道』（日本教文館）より

——彼らは高度な科学と技術も発達させて、それを精神的目的に役立てていると考えられている。例えば、この王国からもたらされたと信じられている医学書には、人体解剖学や生理学、それに高度な理論体系や診断技術、さらには天然痘などの重病を治療防止する方法も記されている。

——王は一種の反射鏡を持っていて、周囲数キロ先で起こっている事件もこれに映し出して見てしまう。

——ある化学物質を別の化学物質に転換させる技術

——王国の中の特定の地域が、それぞれ特定の知識分野——例えば心理学、哲学等——を一つずつ専門に受け持っている。

これは、第一ファウンデーションの描写のように見えるかもしれないが、そうではない。実は、チベット仏教経典に登場する理想郷シャンバラの描写なのだ。※だが、その記述はファウンデーションと非常に似通っている。

ただし、このシャンバラは、実は科学技術だけを重視するわけではない。高度な精神性を追求し、そして解脱・悟りを得るために科学技術を応用する。つまり、二つのファウンデーションの複合体を仏教的に表現すれば「シャンバラ」になる、といえよう。南伝テーラヴァーダ仏教では「ファウンデーション」的な思考は見られず、そのため崩壊しつつあることは先に指摘したとおりだが、シャンバラ王国の伝承のみが仏教的ファウンデーション思想を打ち立てているといえよう。

さて、これまで多くの人が、この仏教的理想郷シャンバラを探索してきた。だが、シャンバラがどこにあるのか、だれにもわからない。生身の人間では到達できないという説もある。

しかし、シャンバラとはどこかにあるものなのだろうか。それを「つくる」という努力は必要ないのだろうか。――シャンバラを夢想して待ち続けるのではなく、自分たちの手でつくり上げようというのが、オウム真理教のスタンスである。

オウム真理教はシャンバラをこの地上に現象化させようと考えているのだ。言い方を変えれば、仏教的な「ファウンデーション」――二つのファウンデーションの複合体――を、この二十世紀末、物質主義帝国滅亡に際して確立しようとしているのである。

◎麻原尊師と予言者ハリ・セルダン

純粋に仏教的思考から、そして純粋観照智による尊師の予言から導き出されたオウム真理教の進路が、結果的にSF小説「ファウンデーション」と似ることになっても不思議ではない。以下、対比させてみよう。

次にあげるのは、ハリ・セルダンに対する、帝国の公安委員会の裁判の記録である。

答　わたしは帝国の現状も、過去の歴史も両方知っております。不遜の気持ちなしに申し上げますが、

わたしはこの部屋のだれよりも、その事をよく知っていると主張しなければなりません。
問　そして、その滅亡を予言されるわけですね?
答　これは数学によってなされた予言です。道徳的判断は少しも含んでおりません。個人的には、このような見通しを遺憾なく思っております。たとえ、帝国は悪いものだと認定するとしても（わたしはそんな認定はいたしませんが）、その滅亡の後にやってくる無政府状態はもっと悪いものです。わたしのプロジェクトが戦うと誓っているのは、その無政府状態に対してなのです。

麻原尊師は一九九七年に始まる第三次世界大戦を予見し、そしてその後の混乱する世界を救うために活動しているのである。
第三次世界大戦はもう避けられない。だが、それによる完全な滅亡、そしてその後、文明の消滅した暗黒の時代を短縮することはできるだろう。

答　わたしはここで没落を防ぐことは言えません。しかし、それに続く空白期間を短縮するには、まだ手遅れではありません。諸君、もし今、わたしのグループの活動が許されるならば、無政府状態の継続を一千年期（ミレニアム）にまで短縮することができるでしょう。われわれは今や歴史上デリケートな時期にさしかかっています。突進してくる巨大な出来事の塊りの向きを、ほんのわずか――ほんのわずか――逸らしてやらなければなりません。大きく逸らすことはできませんが、それだけでも、人類の歴史か

ら二万九千年の悲惨な時代を取り除くには充分です。

問　それを、どのようにしてやるのですか？

答　人類の知識を救うことによってです。人間の知識の総体は一個人の手に余ります。何千人の手にも余ります。われわれの社会組織の崩壊とともに、科学は百万もの断片に分解してしまうでしょう。各個人は知るべき事柄のごく微少な断片を大量に知るだけです。それらは単独では無力で、利用価値のないものです。科学知識の無意味な断片は伝承されないでしょう。それらは世代を経るに従って消えていくでしょう。しかし、もし今われわれがあらゆる知識の集大成をしておけば、それは決して消滅することはないでしょう。後世の者はその上に文明を築くことができ、彼ら自身が再発見する必要はなくなるでしょう。三万年の努力は一千年ですむことになるでしょう。

麻原尊師の言葉と対比してみよう。

わたしたちは、予言に基づいて動いています。一九九七年から八年にかけて、この日本の大都市のほとんどは、日米の戦争によって壊滅的な打撃を受け、そしてそれによって、日本経済のみならず、あらゆる面においての日本資産は崩壊することでしょう。そして、その崩壊ののち、日本をどのようにして立ち上げるか。これがわたしとわたしの弟子たちの大乗の修行、つまり救済活動の一つのポイントなのです。

（九五年三月二十四日）

※本稿では、ハヤカワSF文庫版『ファウンデーション』／『ファウンデーション対帝国』／『第二ファウンデーション』（いずれも岡部宏之訳）を参考にした。引用もすべてこれによる。

地球の大規模な破壊が起きたとしても、少なくともオウム真理教にはすべての叡智が温存されるという状態を考えているのである。これは地球が再生期に向かうとき――つまり破壊された後――戦闘に飽き、そしていくらかの人類が残るだろう。その残った後に、この地球にもとのように豊かな文明社会を形成する上においては、必要不可欠なことなのである。わたしはそれを一九八〇年代の終わりからずっと続けている。

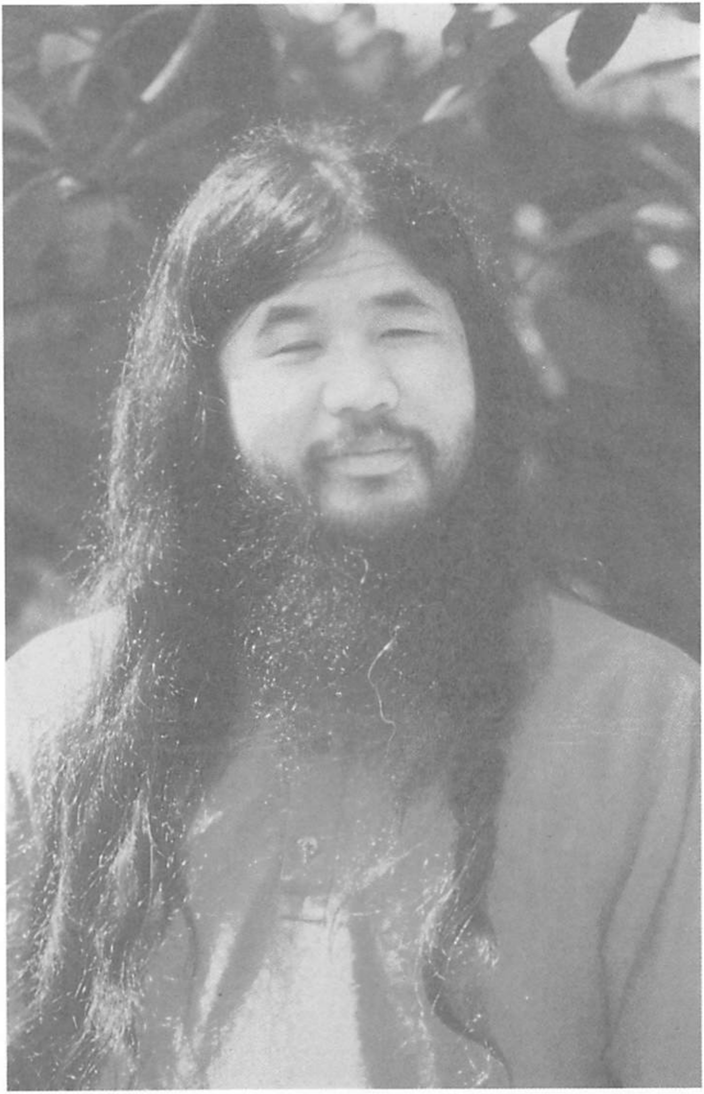
（『エウアンゲリオン・テス・バシレイアス』九五年一月一日放送より）

仏教的ファウンデーション建設計画、またの名をシャンバラ化計画。その計画を推進することこそ、オウム真理教の存在意義の一つなのである。

そして、このシャンバラ＝仏教的ファウンデーションを立ち上げようとしている存在は、世界にただ一つ、オウム真理教しかないのだ。

「その解決策が〈セルダン・プラン〉なのです。その開始から一千年後に――今から六百年後になりますが――人類がよろこんで精神科学のリーダーシップを受け入れるような第二銀河帝国が建設されるように、諸条件が整備され維持されてきました。また、それと同様の期間に第二帝国はその発展の過程において、リーダーシップを取る用意のある心理学者のグループを生み出していることでしょう。いや、わたし自身しばしば考えることなのですが、第一ファウンデーションが単一の政治的単位の物理的枠組みを提供し、そして第二ファウンデーションが既成の支配階級の知的枠組みを提供するのです」

（ある第二ファウンデーション員の言葉）

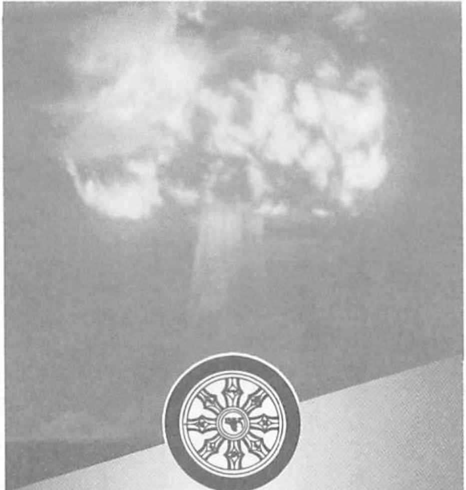


ところで、わたしは第三次世界大戦は必ず起きると考えているわけだが、これが起きた後、アジアの文明は完全に崩壊すると考えているのである。したがって、オウム真理教ではこれらの戦いの後、たとえアジアの、日本を含めてアジア文明＝精神文明が滅ぼされた後にも、その精神文明を残し、そして発展させ、早くそれを回復させ新たな息吹をこの日本に、そしてアジアに残したいと考えているのである。

わたしのグルの一人であるカール・リンポチェはわたしにこのような話をしたことがある。「西洋人では一番弟子になることはできないよ」と。これはどういうことかというと、わたしたちを構成している要素において、一般的にいわれている合理主義で測れない超合理主義と呼ばれるものが存在している。そしてそれは、アジアの民にしか蓄積されていないんだということを表わしたものであるとわたしは理解したのである。

もちろんこの精神文明を残すだけではなく、西洋文明におけるあらゆる科学文明、機械文明、生物等の文明、あるいはその他の物理における文明等を温存し、発展させ、そして第三次世界大戦後、本当に幸福な日本、そして幸福なアジアをつくらなくてはならない。

それをつくるために計画されたものが、「シャンバラ化計画」＝「仏教的ファウンデーション」なのである。



第五章　日本の運命

ところでわたしは多くの未来ヴィジョンを見た。二〇〇三年には、間違いなく日本人のカルマによって核が落とされる。そして核以上の兵器が使われ、多くの日本が焼け野原になる。しかも、ある部分については地震兵器によって完全に沈没、土地が解体するヴィジョンをわたしは見たのである。

そしてそのターニングポイントが一九九七年および一九九八年の二年なのである。この二年間でもし何も起きなければ、わたしの予言は外れたことになり、それはまたわたしにとって最大の喜びとなる。しかし、今までのわたしの予言の的中率の高さからいうならば、必ずやそれを避けることはできないだろう。

今、日本は非常に重要な危機に瀕(ひん)している。それは経済的な破綻なのではなく、最も危険なのは空洞化現象なのである。例えば、日本は多くのものを外国、特にアジアの小国に依存するようになっている。しかしもし、これが世界戦争となればそれがストップし、即、日本の自給自足をはからねばならなくなる。しかし、そのとき日本では何も作ることができないのである。その技術もなければ機械もないのである。少なくとも半年、あるいは一年かかる。世の中の流れは速い故にこの半年や一年を待っていてくれないのである。

オウム真理教が基礎からすべて起ち上げようと考えているのは、この空洞化現象をいかに埋めるかということをポイントとして考えているのである。つまり、素材さえあれば何でもつくれる。素材さえあれば、生きていくのに困らない。このような環境づくりこそ、この世紀末において必要な要素であるとわたしは考えているのである。

●ハルマゲドンか借金帳消しか?

第三次世界大戦が起きたら、多国籍企業だけが得をするのである。なぜなら、軍需産業による収入は百兆円以上見込めるであろうし、また崩壊した都市の再建のために、同じように百兆円以上の収入が見込めるのである。

反対に日本人は、自衛隊、そして健康な学生といった順に、生命の危険が増大するはずである。そして、都市破壊によって都市生活は全く営めなくなるだろう。したがって、第三次世界大戦は起きない方がいい。しかし、あなた方一人一人の心によって、戦争は起きるのである。

アメリカ合衆国の債務は四百兆円を超えるといわれている。このうち、日本のアメリカに対する債権は、二百兆円前後である。円高が進むということは、ドルで返済する場合、多くのドルを支払わなければならないということである。つまり、一ドル＝一〇〇円のときには二兆ドルでよかったものが、一ドル＝五〇円になると四兆ドル支払わなければならないということである。したがって、アメリカの経済負担は、円高によってどんどん増大していっているのである。

そして、過去の歴史を検討すると、アメリカは日本に打ち勝ち、債務を帳消しにするしか生き残る道がないのである。

破産寸前のアメリカ合衆国
――借金踏み倒しは時間の問題か

◎

現在、アメリカの財政は、破産寸前であり、深刻な状態にある。

レーガン大統領の時代、「連邦政府コスト管理委員会」が設立され、巨大化した政府の浪費をいかにして削減するかということが、徹底的に検討されている。アメリカ中から選ばれたトップ・ビジネス・リーダー百六十人をメンバーとするこの委員会は、委員長のJ・ピーター・グレースの名を取って、「グレース委員会」と呼ばれているが、このメンバーの一人、H・フィギー・ジュニア氏が、一九九二年に「一九九五年、合衆国破産」という本を著した。

この本には、恐るべきアメリカ合衆国の未来が描かれている。

「もし現在の傾向がこのまま続くならば、連邦政府の累積債務は、おおよそ一九九五年ころには六兆五六〇〇億ドルにも及ぶ。その額は、政府が個人や法人から徴収する所得税一年分のおよそ九倍になる。これは、あなたたちが年収の九倍の借金をすることに相当する。（中略）一九九五年には、合衆国は負債の「利子」さえ払えなくなるであろう。かりに利率が現在のままで、上がらなかったとしても（政治家たちは間違いなく、それを祈っている）、支払う利子は一九九五年ころには、六一九〇億

ドルという吐き気がするような数字になる。」
一九九五年には、アメリカの国家債務が完全にコントロール不能の状態に陥り、合衆国が破産するという。この数字を誇張だとする向きもあるが、このままいけば遅くとも二〇〇〇年までに、アメリカが破産するという見方は多くの経済学者の一致するところである。
国家破産が何を意味するか。それは、歴史が物語っている。超インフレが起こり、国民生活は破綻する。
H・フィギー・ジュニア氏は、経済が壊滅した国家の例として、古代ローマ帝国、スペイン、最近ではオーストリアとドイツを挙げている。
「オーストリアの状況をインフレと呼ぶのであれば、ドイツの経験したものは「超インフレ（ハイパー）」であった。一九二二年八月から一九二三年十一月までの一六カ月間で、物価は一兆二〇〇億％も高騰したのである
大戦直前に〇・二九マルクであったライ麦パンの価格は、一九二三年の夏には一二〇〇マルクに上昇し、同じ年の十二月には四二八〇億マルクにまで急騰した。ドイツ国民は夕食用の買物をするためだけでも、現金をカゴ一杯に詰めていかなければ、用が足りなかったのである。」
そして、現在のアメリカの状況は、「実際問題として、合衆国の中流階級の生活を構成している、世界中のほとんどすべての国々の羨望の的となっているような生活上のアメニティー——住宅、自動車、健康保険制度、高品質の品目を豊かに備えたスーパー・マーケット、国立公園や森林・海岸など

でのレジャー施設、電子決済システム、映画からMTVのライブに至るまでの豊富な娯楽メディアなど、世界中で最も快適な生活を形成しているすべてのサービス・財貨――を、空前の勢いで増大している国家債務のために喪失してしまう危険に、アメリカは曝されているのである」と述べている。

アメリカ人が自国で財政赤字の問題を処理できなければ、アメリカの債権を所有している国々がアメリカ経済を支配し、アメリカに代わって債務問題の解決を行なうことになるだろうと同氏は述べている。海外におけるアメリカ最大の債権者は、わが国、日本である。ジャパン・マネーが世界の舞台に登場し始めたころ、アメリカ国債の毎回三〇パーセントから四〇パーセントを日本勢が落札した。

日本がアメリカ経済に口を出し、財政および金融活動の厳しい制限を行ない、その結果として国民生活が窮乏するというような事態に、アメリカ人が耐えられるのだろうか。最近、アメリカ人の対日感情が悪化していることは周知の事実である。借金を帳消しにするためには、その債権国を叩きのめしてしまえばいいのである。国家が破産し、一人一人の国民が生活水準の激しい落下と、社会秩序の破壊を感じたときに、自分たちの生活を守るために、日本に対する蓄積された嫌悪感を背景にして、戦いに突っ込むことは、大いに考えられることである。しかも、折からの円高で、アメリカの負担も恐ろしく増えている。現実問題として、借金の利払いすらできなくなったときに、彼らが取る道は、屈辱をなめるか、力によってその状態を突破するかしかない。

しかも、戦争を起こせば、現在アメリカ、いや、世界の富の九〇パーセントを支配し、巨大な力を持っているといわれている多国籍企業は、第一次世界大戦、第二次世界大戦のときがそうであったよ

うに、大儲けをすることになる。
日本が選択する道、それは、これまでのアメリカの借金を帳消しにするか、それとも、戦いに突っ込むか、どちらかしかないのである。折りしも、アメリカ人の対日感情だけではなく、日本人の対米感情も悪化しているではないか。

ところで、一つだけ戦争に至らない方法がある。それは、アメリカに頭を下げることである。そして、二百兆円を差し上げ、「どうぞ日本をいじめないでください。お願いします」とお願いすることである。あなたは、アメリカに貸したお金を、戦争回避のためにお布施できますか?
繰り返すが、あなた方一人一人の心によって、戦争は起きるのである。

巻末付録 1

神聖な若芽を踏み潰(つぶ)そうとする、巨大な勢力

オウム真理教信者を偽って嫌がらせ、
夜中に中傷ビラ貼りまくり、
警察・マスコミと癒着して弾圧活動。
創価学会によるオウム真理教排撃の数々。



一九八九年初秋、当時ほとんど無名であったオウム真理教を、一気に全国区にした雑誌がある。『サンデー毎日』だ。

この雑誌によるオウム真理教の取り上げ方は最初から異様だった。「告発キャンペーン」と銘打ち、当時たかだか五千人程度のこの教団を、なんと七週にわたって徹底的に叩き続けたのだ。その内容もメチャクチャで、様々な捏造・デッチ上げの連続。挙げ句の果てにはデッチ上げるネタが尽きたのか、「肉食拒否のオウム真理教の経営するお弁当屋さんで焼き肉弁当を売っている」などというバカバカしくて言葉も出ないほどのバッシング記事を書くまでに至っている。この『サンデー毎日』の編集部自体が「週刊誌などというものは、真実が二、三割あればいい」と言っているように、週刊誌記事はもともと真実よりも売上げを追求するものではあるが、こんな記事を七週にもわたってキャンペーンを打って書き続ける理由が、当初はどこにも見当たらないはずであった。

この後、麻原尊師が各界の著名人らと対談するなどして、マスコミがオウム真理教を好意的に取り上げるようになったときも、『サンデー毎日』はオウム真理教に対する中傷記事を書き続け、その姿勢を崩そうとはしなかった。オウム真理教に何か恨みでもあるのだろうか？——そう考えずにはいられない不自然な動向を『サンデー毎日』は貫き続けたのである。

◆突然始まった排撃

『サンデー毎日』がオウム真理教を叩き始めたのと同時期、別の手段を使って、オウム真理教に激しい攻撃を仕掛けてきたグループがいる——創価学会である。

こういう主張をすると、よく当の創価学会の方から、「公称数百万の創価学会がオウム真理教など相手にするわけがない」という反論を受けるのだが、実際に攻撃されてきたのは事実である。

例えばオウム真理教では、他の多くの宗教団体もやっているように、教団発行の小冊子などを、無料で一般の各家庭に配付している。その配付された家に「オウム真理教」を名乗って創価学会員が訪ねていき、高額の代金を要求するという嫌がらせがあった。また、オウム真理教の本を置かないようにと、各書店へ圧力をかけたこともあった。

これ以前にも、例えば創価学会員が酔っぱらって麻原彰晃尊師の説法会に現われて説法の邪魔をするなどの嫌がらせはあったが、それが明らかに激しくなったのは、『サンデー毎日』がオウムバッシングを始めた時期と一致する。

ではこの時期、一体何があったのだろうか。オウム真理教と創価学会の利害関係が、著しく対立するような出来事でもあったのだろうか？――実はあったのだ。それは麻原尊師の衆議院選挙出馬である。

オウム真理教は、個人個人に解脱と悟りという絶対的な幸福を与えるとともに、平和で慈愛に満ちた、真理の実践ができるような理想的な社会を築き上げようと努力してきた。その大乗の救済活動の一環として、一九八九年七月、「真理党」が結成され、麻原尊師とその弟子たちが、衆議院選挙に出馬を表明したのだ。

するとその途端、いきなり始まったのが『サンデー毎日』によるバッシング、そして創価学会による嫌がらせなのである。

オウム真理教は小さい。よってとるに足らない――という言葉はよく耳にする。しかし現状の組織の大きさとその組織の持つ勢い、加速度は別問題である。当時のオウム真理教の教団拡大の加速度は、他の教団が全く追いつけないほどのものであった。たった三、四年で、信徒数を数千倍にまで膨らませてしまったのだから。

創価学会は確かにすでに安定した基盤を日本に築いているが、実際、創価学会の教義に引かれて全く新しい人が自発的に入ってくるということは非常に少ない。ほとんどは親の代からの二世信徒や、あるいは折伏と呼ばれる非常に強引な勧誘方法による入信である。しかしオウム真理教は親の代など関係ない新新宗教。し

かも強引な勧誘も行なっていない。にもかかわらず、他に類を見ない加速度で急速に拡大していったのである。これは他の教団から見れば、大きな驚異であっただろう。

そのようなパワーを内に秘めたオウム真理教が、政治の世界にも進出してきた！これは危険だ。まだ芽の小さいうちに叩いておかなければ！——これが創価学会側の心境だったのではないだろうか。

◆創価学会に支配される毎日新聞社

もともと創価学会は、広宣流布という大義名分のためには、多少の過激な行動は辞さない。他の宗教・思想・団体を「邪宗」「邪教」呼ばわりして、持てる力をフルに発揮して徹底的に排撃することは、よく知られている。池田大作氏自身、会長就任直後に「立正佼成会を撲滅せよ！」などと大号令を発したことは有名である。そんなかけ声に乗って、熱狂的な会員が、他宗にスパイとして入り込んで分断工作を行なったり、他宗の家に集団で押し掛けて改宗を強要し、その仏壇を表に放り出して焼き払ったりなどといった乱暴な〝布教活動〟に出て、一時は社会的な問題にもなった。

そして創価学会は、麻原尊師が選挙に出馬を表明したことにより、その過激な矛先をオウム真理教にも向け始めたのである。

ではその創価学会の排撃と同時に始まった『サンデー毎日』のオウムバッシングについてはどう説明するのか？——それは簡単である。毎日新聞社自体が、すでに創価学会のコントロール下に置かれているという、周知の事実があるのだから。実際に過去の『サンデー毎日』を見ると、三十回にもわたった池田大作氏の連載エッセイなど、まるで創価学会の機関誌ではないかと見間違えるほど、創価学会のための記事にあふれているのである。

「毎日新聞は創価学会の機関誌か」——これは某有力週刊誌に掲載された特集記事のメインタイトルである。こんな文句がマスコミ業界で公然と取りざたされるほど、毎日新聞社は創価学会に対して弱い立場にあ

オウム真理教に送り込まれたスパイ

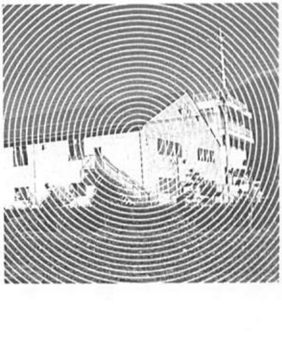
　創価学会員がスパイとして他宗に潜り込んで分断工作を行なうというのはよく聞く話だが、オウム真理教にも当然、創価学会のスパイが潜り込んでいる可能性が高い。オウム真理教は来る者は誰でも受け入れるから、スパイが潜り込みやすいのは事実なのだ。

　もちろん断っておくが、元創価学会員だからといってむやみに疑うことはできない。純粋にオウム真理教の教えが正しいと感じ、改宗してきた者も当然いるだろう。

　しかしそうは思えない者も多くいるのだ。今まで元創価学会員でオウム真理教に出家し、その後辞めていった人がわかっているだけでも二十六人ほどいる。もちろん、出家してその後に還俗する人は、元創価学会員だけではなく、他にもいる。しかしその中でも特に創価学会とつながりのある人たちの動向を見ると、やはり非常におかしいのだ。

　一人一人実名を挙げるのは避けるが、まず大まかに言えることは、とても修行者とは思えないタイプの人が多かったということだ。本来、自分の人生のすべてを修行と救済に捧げて出家してくるからには、当然真剣に修行に取り組む姿勢というものが見られるはずだが、それがない者が多い。非常に現世的であり、定められた戒を破り、周りの人間に悪影響を与えていた。まるで最初から、還俗することを前提に出家していたかのように。

　そして還俗するときの状況も、おかしい人が多かった。ある人は他の女性修行者を誘惑して、オウム真理教の車を盗んで出て行った。ある人は突然いなくなったのだが、時期的にオウム真理教への毒ガス攻撃が激しくなるほんの少し前であった。また、実際にスパイであるということが発覚して破門になった者もいる。そして還俗した後、「オウム真理教元信者」として連日マスコミで嘘八百を並べてオウム真理教を誹謗中傷している人物も、創価学会員であった。



るのだ。

それはなぜか。それは、創価学会の機関紙である『聖教新聞』のほとんどが、毎日新聞社の子会社である東日印刷で刷られていることと関係している。元創価学会顧問弁護士の山崎正友氏は、こう述べる。

「財政が極端に苦しい毎日新聞社にとって、聖教新聞の印刷による収入が大きな救いとなっていることは否定しようのない事実である。必然的に、毎日新聞社としては創価学会に弱い立場にあった。」

(山崎正友著『闇の帝王、池田大作をあばく』より)

さらに同氏はこう続けている。

「創価学会が、金の力で他の勢力を動かす例については、枚挙にいとまがない。

大銀行が、創価学会の預金の力でマスコミ工作に動いたり、公明党の選挙運動に協力させられていることは、周知の事実であるし、大手建設業者についても、工事の発注を受けるために選挙協力から創価大学卒業生の採用に至るまで、いろいろと協力を強いられている。学会批判をした新聞や雑誌、テレビ局に対しては、池田大作氏の著書を出版させたり、広告のスポンサーをつけたりすることと引き換えに、批判をやめさせるといった工作も半ば公然化している。……このような手口に慣れた創価学会が、経営難という弱みを持つ毎日新聞社に対して〝『聖教新聞』の印刷〟という武器を用いない方がおかしいのである。」

これで創価学会が毎日新聞社をコントロールできる理由がおわかりいただけただろう。創価学会に不都合な記事を掲載しようとした内藤国夫氏(現ジャーナリスト)が、創価学会からの圧力によって毎日新聞社を退職に追い込まれたという話も有名である。

◆恣意(しい)的な毎日新聞

二流週刊誌の『サンデー毎日』だけではなく、一応「三大紙」の一つとされる『毎日新聞』までオウム真理教に対する偏向報道を続けてきている。もっとも、今回のオウム真理教強制捜査に関する記事では、スポーツ新聞や週刊誌はもちろん、三大紙からNHKまでが

予断と偏見と悪意に満ちた報道を行ない、一部の識者が日本の未来を憂慮する材料となっているが、毎日新聞は特に恣意的な記事が多く見られた。

単にオウム真理教にダーティー・イメージを植え付けるための恣意的な記事ばかりではなく、オウム出版に実害を与えるための記事なども掲載している。

オウム関係の書籍
書店、撤去の動き



オウム真理教の本が並んでいる書店も＝東京都内で

首都圏の大手書店で、オウム真理教関係の書籍を店頭から撤去する動きが出始めた。「犯罪の疑いのある教団の本をなぜ置くのか」といった抗議が市民から相次ぎ、混乱を避けようという各店の自主判断による。

横浜市中区に本店のある有隣堂書店では、三月二十四日にオウム真理教関係の書籍を神奈川県内十九本支店の店頭から撤去した。本店では、オウム出版の雑誌と書籍約五十点八十冊を店頭から撤去。同出版社との契約で常備することになっている二十冊は在庫扱いとして注文に応じ、それ以外の本や雑誌は返品したという。

同店では、一九八九年十一月に横浜市で起きた坂本堤弁護士一家失跡事件の直後、教団に家族が入信し困っているという肉親から、オウムの書籍類の販売について抗議を受けた。しかし、事件との関係がはっきりしないと判断し、扱いを継続した経緯がある。

また、紀伊国屋書店新宿本店（東京都新宿区）ではオウム真理教の山梨県内など全国の施設で捜索が行われ、地下鉄サリン事件との関係が取りざたされるようになった直後から「なぜ犯罪の疑いのある教団の本を置くのか」との抗議電話が一日五件程度届いた。その後、テレビ局などマスコミ数社が「取材の参考に」とまとめ買いし、約三十冊あったオウムの本がなくなったのをきっかけに先月末、新規の注文を控えることにした。

同店で本の店頭販売を控えるのは、八九年二月、イランのホメイニ師の「死刑宣告」に関連し騒ぎのあったサルマン・ラシディ氏の小説「悪魔の詩」の時以来という。売り場担当者は「店頭で混乱が起きると困るので、状況を見極めたい」と話す。

ただ、都内の大手出版取次会社によると、「地下鉄サリン事件の前後でオウム出版の書籍の売れ行きは変わっていない」という。

一九九五年四月八日「毎日新聞」夕刊

この記事で毎日新聞は、一部書店でオウム出版の書籍が撤去されていることを述べ、さらに「ただ、都内の大手出版取次会社によると、『地下鉄サリン事件の前後でオウム出版の書籍の売れ行きは変わっていない』という」などと書いている。これは明らかに情報操作だ。

たしかにオウム出版の本を撤去している書店はある。理由としては、マスコミ報道の激しさに自粛しているところもあるが、市民団体を偽装する某宗教団体の圧力によるところも多い。しかし、である。逆に取次への搬入は、全体で以前の十倍近くまで伸びているのだ。また、他の新聞報道も伝えているように、無料で配っている書籍を求めてオウム真理教本支部道場に直接やってくる一般の方も多く、今、オウム真理教の書籍の需要は非常に高いと言わざるを得ない。もちろんマスコミ関係者だけではなく、一般の方においてもである。それは返ってくる愛読者ハガキなどによって証明されている。

それを「都内の大手取次会社によると」などという責任逃れ的な書き方で、いかにもオウム出版の本が売れていないような印象を、毎日新聞は読者に与えたのである。

◆堺騒動の真相

『サンデー毎日』のバッシングをきっかけに、それまで順風満帆だったオウム真理教は、様々なトラブルに連続して巻き込まれていくことになる。そしてそのうちの多くには、やはり「創価学会」の影がちらついていたのである。

九一年十二月五日、オウム真理教建築部は、大阪府堺市において、建坪約二十坪の事務所ビル建設に着工した。当初はオウム真理教を名乗って工事をしていても、何ら問題は生じなかったのにもかかわらず、「オウム真理教（自称）被害者の会」とその代理人を務める「オウム真理教被害対策弁護団」がオウム真理教に関するデマや中傷を地域一帯に広め、住民による悪質な建設妨害運動が始まってしまったのだ。

1995年（平成7年）4月2日（日曜日）

「求む！オウム本」

意外な人気…中、高生も

完売寸前

陳列自粛…ある所に殺到

書店側複雑

オウムのこともっと知って 南青山総本部は無料配布





❶オウム真理教東京総本部前に並べられている無料配布の関係書❷❸完売も出ているというオウム真理教の本

1995年4月2日「スポーツニッポン」

こういった住民の妨害による被害があまりに大きいので、オウム真理教側は、大阪地方裁判所堺支部に仮処分を申請した。その結果、十二月二十七日、同支部もこの申請を認め、建築妨害禁止仮処分の決定を下したのだった。

ところが、この後も住民側の反対行動はいっこうに収まらず、資材搬入を妨害する、オウム真理教関係者を殴る蹴る、カメラを壊す、関連業者への嫌がらせをするなどの事態が繰り返された。

そして九二年二月十三日、オウム真理教の建築関係者が建築資材を台車に乗せて搬入しようとしたところ、またもや建築現場前に座り込んだ住民に妨害された。現場には、堺北警察署の警察官が居合わせたので、裁判所の決定を考えれば、当然、違法な妨害活動を行なう住民に対して立ち退きを求めるところである。ところが逆に、警察は、資材の搬入を阻止するように路上にパトカーを止めて道をふさいだのである。そのため、現場責任者の池田が警察に抗議したところ、警察官は彼を地面に投げ飛ばした上、公務執行妨害罪にかこつけて逮捕しようとした。

このとき、警察官の「暴力行為」を止めに入った、その場にいた信者も次々と警察官の暴行を受け、数人が傷害を負った。警察官は「池田をパクれ」「他の者はどうでもいいから、池田を逮捕しろ」などと叫び、池田を助けに入った周囲の信者に対して殴る蹴るの乱暴を働いたのだ。

なお、警察は、前日から何もしていない池田をつけまわし、その日の朝には、「今日はしょっぴくぞ」と脅していたのだ。

さて、この暴行事件は大勢の人に知られることになった。というのも、事件を扱った記事が、『大阪日日新聞』の一九九二年二月二十二日号に掲載されたからである。記事は、「関西宗教弾圧秘話第1回」と題され、「殴る、蹴る。白昼の暴行の主は堺北警察署警察官!」という、大きな横見出しが入り、警察官の暴行が暴露されていた。

——しかし、この記事が掲載された三日後の二十四



平成4年2月22日　土曜日

大阪日日

殴る、蹴る。白昼の暴行の主は堺北警察署警官！

四人が加療一週間

他人事ではないこの事態

2月13日、堺北警察署警察官は職権を乱用、何ら罪のない者に殴る、蹴るの暴行を繰り返し、数名が負傷した。

一九九二年二月二十二日「大阪日日新聞」

日になって、ことは起こった。大阪日日新聞社の編集局長が、大阪府警に呼び出された上、「記事の内容について、よく考えてみてほしい」などと言われ、暗に圧力をかけられたのである。

このような警察による圧力の結果、この記事に引き続いて同紙に次週掲載される予定だった堺市役所の不当性を訴える記事が、掲載されなくなってしまった。警察は建設のみならず、言論に対しても違法な妨害を加えてきたのである。

「被害者の会」と「被害対策弁護団」によって引き起こされ、警察によってさらに騒ぎを大きくされたこの妨害運動、一見、創価学会など関係ないように見えるが、実はあったのだ。弾圧に加わっていた警部Ｉがある日、麻原尊師と弟子数人に対して、「わたしたちはやりたくないのだが、公明党議員のつっつきと、学会の住民とのつきあいでやらざるを得ないんだよ」と本音を漏らしたのである。

◆遠くからわざわざ来た者

亀戸悪臭騒動といえば、一時はテレビのワイドショーなどでも連日取り上げられたため、覚えている方も多いだろう。オウム真理教の亀戸道場で宗教儀式のために使っていた香水の匂いが臭いということで、住民が大騒ぎした事件である。結局、住民側とオウム真理教側の話し合いによってオウム真理教側が匂いを出すことをやめ、事態は治まったが、この事件には謎の部分が多く残った。

まず、悪臭騒動というのはさほど珍しいものではない。日本全国でごまんと発生している。それがなぜこのオウム真理教の悪臭騒動だけ、こんなにも大規模な騒ぎになってしまったのか?

そして、この騒ぎの発生源も奇妙である。近くに住む住人が「臭い」と言い出すならわかる。しかしこのときは、道場から遠く離れたところに住む人間がわざわざ車でやってきて、「臭い」とクレームをつけ始め、これを発端として騒動が始まったのである。

考えてもみて欲しい。車で行かなければならないような場所で異臭が発生していたとして、その人に何の迷惑がかかるのだろうか? つまりこの騒動は純粋な近隣住民の市民運動などではない。本来はその悪臭によってなんら被害を被るはずがない人物によって、明らかに意図的に引き起こされたものなのである。そしてこの、「わざわざ遠くから車でやってきて騒ぎを引き起こした人物」も、創価学会員であることが判明している。

◆警察・マスコミが追及しない真実

一九九五年二月十一日から十二日にかけて、「警告！あなたの安全が狙われている」と題されたビラが、オウム真理教世田谷道場、杉並道場、亀戸道場の周辺の電柱および公園掲示板等に、何者かによって無差別に貼付された。

このビラは「毒ガス『サリン』を製造する殺人集団

オウム真理教を追放するために、今こそ住民の力を結集しよう!」などと書かれたもので、すなわちオウム真理教に対する誹謗中傷ビラである。

このビラを貼付していた人物の一人が熱心な学会員であることが、オウム真理教の調査によって確認された。そして短時間に離れた場所で多数のビラが貼付されたことから、これはこの人物の単独犯行ではなく、創価学会による組織的計画的な犯行であると知るに至ったのである。

そして起こった假谷氏拉致事件。今までこの事件にまつわる謎は多い。

事件後すぐ、「オウム真理教の者だが、うちの者が假谷さんを拉致した。こんなやり方は許せないので調べてほしい」というタレコミがマスコミにあったが、これは非常に不自然だ。もし本当に助けたいという思いで電話したのならば、マスコミではなく警察に電話するはずである。これは(もちろんオウム真理教以外の)真犯人による、オウム真理教を陥れるための電話であると、まともな人ならだれもが考えたはずである。

この話を聞いたとき、一部のオウム真理教信者たちは「まるで創価学会みたいだな」と冗談で言い合っていた。わざわざオウム真理教の名を語って悪事を働くというのは、以前から創価学会が行なってきたことだからである。

しかしこの冗談が冗談にならないのではないかと思われるような事実が、次々と露呈しはじめてきたのである。

まず、假谷氏拉致に使われたとされるレンタカーのワゴン車は、約二週間前から拉致現場付近に頻繁に止められているのが目撃されており、少なくとも二週間前から犯人は計画を練り、現場の下見をしていたことが推察される。そしてこの約二週間前というのは、前述の、創価学会員がオウム真理教を誹謗中傷するビラを組織的に配っていたと思われる時期と見事に一致するのだ。

そして犯行時、假谷氏を拉致したワゴン車は、なんと長距離の一方通行を逆に走って行ったという。二週間前から入念に下見をしておきながら、犯人が一方通

行を知らなかったはずはない。ということは、あえてその一方通行の道を通らなければならない必然性があったはずなのだ。

それは何なのだろうか。一方通行の先には何があるのか？　実はこの一方通行の道を逆に進むと……なんと「創価学会品川池田文化会館」があるのである！

そして極めつけは、このレンタカーのワゴン車をレンタルした免許証の持ち主が、創価学会員だったということだ。しかも前科十一犯という強者。彼は当初事件との関係について「全くわからない。免許証は誰かが盗んだのでは」と供述していたが、あるときから一転して、「ある人物に貸したが、名前は言えない」という供述をし始めている。

しかし本来最も疑われていいはずのこの男は、なぜか警察もマスコミも追及しない。逆にオウム真理教に対しては、デッチ上げを使ってまで、犯人に仕立て上



こんな長距離の一方通行にわざわざ入ってくるのは、
あまりにも不自然。その先には何があったか……？

一九九五年三月二十一日「夕刊フジ」／『週刊新潮』三月三十日号 新潮社

年 3月21日 (20日発行)

「免許証はある人に貸した」

パブ経営者、一転供述覆す

假谷さん拉致

目黒公証役場事務長、假谷清志さん(六八)が何者かにら致された事件で、犯行車両のレンタカーを借りる際、提示された免許証の名義人のパブ経営者(三一)が、警視庁捜査一課と大崎署の事情聴取に「免許証はある人に貸した」と供述していたことが二十日までに分かった。警視庁ではこの人物が事件のカギを握ると見て割り出しを急いでいる。

警視庁の事情聴取に経営者はこれまで「だれかに免許証を勝手に使われた」と供述していたが、その後の調べで昨年十月を含め過去六年間で四回、免許証の再交付を受けていたことが判明。同営業所で提示されたのはそれまでに紛失したものではなく、現在、経営者が所持している免許証とわ

「今は名前いえない」

さらに事件前にも数回、同じ免許証で都内の同系列レンタカー会社で今回の事件に使われたと同種のワンボックスカーが借り出されていた。

経営者は「免許証をある人に貸した」と、これまでの供述を翻したものの「今は名前は言えない」としている。

警視庁では、書類の筆跡から「レンタカーを借りたのは(この経営者とは)別人」としているが、この人物が経営者の周辺におり、ら致事件の実行犯か、実行犯と何らかの接点があると

警

キーパースンは前科十一犯

ところで、先日の、東京・目黒の公証役場事務長・假谷清志さん(六八)の拉致事件は、假谷さんを拉致したワゴン車はすぐに特定され、都内・杉並のニッポンレンタカー高井戸駅前営業所から犯行当日に借り出されたものと判明。契約の際に使用された運転免許証の持主は、都内・新宿でパブ・スナックを経営する三十一歳の男性だったが、受付で手続したのは別の男性で、使われた免許証はスナック経営者が再交付を受けたものだった。

当初、スナック経営者は事件との関係については、「まったくわからない。免許証は誰かが盗んだのでは」と供述していたが、「ある人物に貸したが、名前は言えない」と、事件への関与をにおわす供述を始めている。

もっとも、このスナック経営者は創価学会員。オウムは「一連のオウム叩きの背景に、創価学会の陰謀の可能性もある」と言っていた事と符節が合うところが、妙というか不気味ではある。

加えて、三菱デリカスターワゴンを借りたのは、二月二十八日が二月に入って三回目。それ以前の十日間に二回、同じようにこのスナック経営者の免許証で借り出されていた。犯行後、当日夜にクルマを返しに来たのが女性だったというのも、犯行グループの余程の自信のあらわれと見られないこともない。ちなみにスナック経営者は、風俗営業法違反、児童福祉法違反のほかに、傷害、恐喝、覚醒剤使用など前科十一犯という経歴の持主。

それにしても、この事件をめぐる警察とオウムのやりとりは、何やらゲームめいている。スナック経営者や謎の女性の存在はとうの昔に判明していたのに、オウムの反応をうかがうかのように小出しにマスコミにリーク。教団関連施設を張り込んだと思ったら、急に監視を解くなど一貫性がない。慎重さと優柔不断は、紙一重ということか……。

げようという警察の意図が見えるのである。

例えば警察は「假谷氏が拉致される前日に、同氏の長男に『わたしが拉致されたらオウム真理教を捜してくれ』というメモと、その日に面会した教団信者の名刺を渡していた」という情報をマスコミに流し、マスコミは一斉にそれを報道した。

しかし警察が主張するメモの内容や分量が変わるなど矛盾が出てきたため、一部のジャーナリストたちが独自取材したところ、この假谷メモは存在せず、警察のデッチ上げであることがわかったのである。『宝島30』の大泉実成氏の假谷氏の息子さんへの取材の例を挙げよう。

これが真実だ。警察は初めからオウム真理教を犯人に仕立てあげようとしていたのだ。これではその後の「オウム真理教関係者の指紋が見つかった」などという都合のいい警察発表も、信じられるわけがない。

そもそも前科がないはずの松本容疑者の指紋がどうしてわかったのか、警察は一切公表しない。「実は前

メモはなかった

大泉　新聞には、お父さんが「自分が連れていかれたらオウムに連れて行かれたと思って警察に届けてくれ」というメモを渡したということですが、これは事実ですか。

假谷　いえ、そのようなメモはありませんでした。

大泉　えっ、やっぱりそうなんですか。

假谷　父はオウム真理教のことは一切話もしたことはないんです。

大泉　うーん。じゃあ、どうしてああいう警察発表や報道が出たんでしょうね。

假谷　それは私にもわからないです。

「宝島30」　1995年5月号　宝島社

科があった」という報道もあるが、未確認情報に過ぎない。なぜその指紋が松本容疑者のものだと断定できるのか、明確な説明はいまだになされていないのである。また、松本容疑者が何らかのかたちで前出の創価学会員の免許証を手に入れたのだとしたら、この二人の関係についても追及すべきである。しかし警察もマスコミもその点には一切触れない。

結局、警察は最初から一つの定められた方向に動いていたのである。

彼らは結局、真犯人を求めているのではないのだ。自分たちに都合のいい人物を犯人に仕立て上げようとしているのである。これはとんでもない謀略事件である。

前述の堺事件の話を思い出してほしい。「わたしたちはやりたくないのだが、公明党議員のつっつきと、学会の住民とのつきあいでやらざるを得ないんだよ」という、ある警部が漏らした本音。そして真実を伝えようとした一部マスコミに、警察がかけた圧力。ここに創価学会と警察とマスコミとの、見事な三角癒着関係図が見えてくるではないか。

もちろん、これだけで假谷氏拉致事件の犯人が創価学会員であると断定することはできない。しかし一般マスコミが警察や創価学会の圧力を恐れてこれらの事実を追及できない以上、警察にも創価学会にも何の引け目もない団体の代表として、オウム真理教が事実を明確に発表するしかなかった。まずは正確に、ありのままの事実を見つめてほしい。

○創価学会員が事件の二週間前から、オウム真理教を誹謗中傷するビラを貼付していた。

○ちょうど同じ時期から、拉致に使われたワゴン車が現場の下見をしていた。

○下見を充分していたにもかかわらず、ワゴン車は拉致の後、一方通行を逆に走っていった。

○その一方通行の先には、創価学会の会館があった。

○拉致に使われたワゴン車のレンタルに使われた免許証の持ち主は、前科十一犯の創価学会員だった。

○彼は「免許証はある人物に貸したが、誰に貸したかは言えない」という供述をしている。

○警察もマスコミも、この男をなぜか追及しない。

○警察は「『オウム真理教を捜してくれ』という假谷さんのメモがあった」と発表した。

○この警察発表が完全なデッチ上げであったことが、息子さんへの取材で判明した。

○今度は警察は明確な説明を一切せずに、「オウム真理教関係者の指紋があった」と発表した……。



様々な事象が創価学会の不審を強めているが、なぜか警察もマスコミも追及することはない

巻末付録 2

大川隆法の苦悩

幸福の科学の「大川流仏法」を斬る

GLAからオウム真理教に乗り換えた大川隆法
こんな恥知らずの宗教家は見たことがない

◆「法泥棒」大川隆法

幸福の科学、大川隆法氏の誤りをたしなめた『真実の仏陀の教えはこうだ！』（真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著・オウム出版）によって、誤った「大川流仏法」を信じる人が数多く真実の教えに目覚めた。しかし、いまだ大川氏はその「大川流仏法」に嘘の上塗りを重ね、多くの人を惑わし、ますますの悪業を積んでいる。彼の説く「仏法」はサキャ神賢の説いた本当の教え——サッチャ（真理）とは明らかに違い、今までに様々な「宗教家」と呼ばれた人たちが著わした書物の受け売りにほかならない。

特に、その中で最大の間違いは、本当の仏教を説く真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師の教えを盗み、臆面もなく使い、「真理」の流布以外の低俗な目的に利用しているということである。本来、真理の法を盗み自己の低俗な利益のために利用することは、最大の悪業とされている。そんなことは本当の「仏教者」ならば周

知のことである。
この記事によって、世紀の大泥棒的な彼の罪深い行ないを正し、大川氏が改心し、その悪法を垂れ流すことをやめるよう期待したい。また、幸福の科学の会員が真理に目覚めることを願いたい。

1. 方便の時代？

◆方便？それともただの嘘

法泥棒の話に入る前に、まずは彼らの教団の体質を如実に示すエピソードを紹介しよう。
一九九四年五月は宗教法人幸福の科学にとって大きなターニングポイントとなった時である。それは彼らの教団機関誌『幸福の科学』五月号を見ればよくわかる。これには大川隆法主宰先生スペシャル・メッセージとして「方便の時代は終わった」と題した講話が掲載されている。
結論からいえば、大川隆法氏は教義のすり替えを行なったのである。教義に不都合が生じ、それを変えざるを得なかったのだろう。しかし、教義を変えるということは宗教団体にとって一番重大な問題である。簡単にいえば、「今まで言っていたことは嘘」ということだからだ。これでは会員が哀れである。しかも、これが仏陀の「慈悲」なんて言われた日には涙が出てしまうではないか。

表題の「方便の時代は終わった」ということは、どういうことかと言いますと、みなさんご存じの通り、一九八一年に、さまざまな高級霊が霊的な通信を送ってきはじめました。それから何年か、私としても霊的な修行が続きました。その後、八五年ぐらいから霊言集が出はじめ、さまざまな霊人の言葉というかたちで、

本にして世に公刊してきました。そして、その本を読む方がたに対しては、とにかく「あの世がある」ということを知ってほしい、天上界にもさまざまな霊がいて、個性豊かに現在も存在している、という事実を知ってほしい、そういう「あの世の証明」という観点から、いろいろな霊人を、霊言というかたちで紹介してきました。

　私としては、その霊人の思想に関して、どう考えているのか、それを是とするのか、非とするのか、あるいは、是非だけの問題ではなく、どこに問題点があるのか、というようなことについて、特に解釈を加えないで、そのままのかたちで出してきました。というのも、それぞれの霊が語っているということは事実その通りなので、その霊が語っている内容をそのままほとんど修正を加えないで出すことが真実性の証明になるという観点から、自由に語らせていました。これに関して、私自身の解釈はあまり加えないでいました。

　いろいろな霊人が、いろいろな霊言を送ってきていますから、それに関して、幸福の科学としては基本的にどういう考えを持っているのかと、どうするつもりなのか、公式にあまり説明をしていませんでしたから、この部分が、多様な霊を紹介して、活動を多角的に展開するとともに、若干の混乱を生ずることにもなったと思います。

　当会の会員にとっても、外部において当会の教義等を勉強した人にとっても、いろいろな考えが出ているけれども、どれをとっていいのか理解できていません。また、私のほうから見たらかなり違い考えであるにもかかわらず、当会の基本教義であるかのように言われて誤解を受けて、苦労したことも多々あります。

　それは、あの世の霊人の個性と考えを、そのまま世に問おうとしてきたことが原因です。それに関して、私がどう考えているか、説明は特にしませんでした。その結果、勝手な解釈があちこちで行なわれました。

　また、会のなかでも、講師や幹部においても、充分に理解されているとは言い難いと思います。

　これを読んで疑問を感じることが一つある。つまり、この話が大川氏によってなされる瞬間まで、幸福の科学の教義というのはもともと「教義」ではなかった――のではないか、ということである。つまり最初からだれ一人としてまともに理解できるものではなかったのだ。

　あまりにもいいかげんな教理・教則を作り上げてきた結果、会員の中に教義の矛盾を感じる人が数多くいたのだろう。雰囲気ばかりで内容がなく、それこそ四方八方の〝聖人・霊人〟の教えを盗みチャンポンにした結果どうしようもなくなった。そこで、大川氏が出した〝切り札〟が「方便の時代は終わった」ということなのだろう。

◆法をねじ曲げていた「大川流仏法」

事実、大川氏は同じ講話の中でこう述べている。

初期に、GLA系統の人たちが、何人か手伝いに入ったために、高橋信次信仰のようなかたちを、なかに織り交ぜることを余儀なくされたことがありました。それが結果的には、法をねじ曲げるかたちになっていたと思います。
その後、特に、それについて事実を指摘はしないで現在まできました。

大川氏は、自ら法をねじ曲げて伝えてきたことを認めているのである。しかも、自分はそれをわかっていて黙っていたというのだ。

仏教では間違った法を伝えることを最大の悪業としている（これは大川氏もその著作の中で認めるところである）。なぜならば、間違った法によってそれを信仰した人々が下の世界に引きずられ、多くの苦しみを受けることになるからである。このカルマは当然のこととして間違った法を伝えた人に返り、確実にその人を下の世界へと引きずり落とす。仏教者ならば、こういったことは常識で、誤った法を説くことに対して「恐怖」するのが普通である。しかし、大川氏の場合は法をねじ曲げることを容認していた。これは、いかにしても反論できない事実である。

法をねじ曲げて伝えた理由を彼は次のように述べている。

私自身の性格として、あまり人の間違いや失敗をあげつらうのが好きではないので、気がついていても言わないことが現実には多いのです。ですから、「感じとるものは感じとりなさい」というかたちで、現在まで来ていたわけですけれども、指摘せざるをえないという感じがします。

この一文はなかなか笑わせてくれる。天下の「仏陀様」がそんなことでは一体法則はどうなってしまうのだ。これは「自分の間違い」を明らかにするのが恐ろしく、それを語った「聖人・霊人の間違い」として責任を転嫁し、自己を正当化しようということだ。その

上、わざとらしく〝優しい仏陀様〟を演出し、間違いをあげつらうことは忍びない――といった恩着せがましい言葉をかぶせるなど言語道断である。揚げ句の果てには、今に至って「指摘せざるをえないという感じがします」――一体「感じがします」とはどういうことなのだ――とはあまりにも卑劣な弁解である。

「仏陀」とは覚者――覚醒した者のことを指すが、これでは大川氏は覚者どころか迷妄の暗闇の中に芯までどっぷりと浸かっているようではないか。全く何も見えていない！

◆責任を霊に擦りつけるいい加減さ

また、このような苦しい弁解も展開している。

> 初めは裏の方が、表のように、だいぶ言われて、それを本にしていましたが、あとから仏陀意識で本を出せば、会員のみなさんもわかるだろうと思って出していました。けれども、どうもおわかりになる方が少なくて、さらに、裏のほうから、かなり邪魔されるようになったので、これを明らかにしておきたいと思います。

言いたいことがよくわからないが大意はこういうことだろう。つまり、「本当の仏教には合わないことを書いてきたけれども（ここではＧＬＡの高橋信次氏の霊言等を指している）、後で仏陀意識（？）でまた本を出せばわかってくれるだろう」と考えていたということだ。

どうしたら間違った法ばかりを説かれた会員が本当のことを理解できるのだろうか。これでは何も知らずに真実を悟れというのと同じこと――いや、誤った法ばかりを取り入れてきたのだから、それよりもさらに難しいことだ。

◆教義のすり替えは簡単だ！

新興宗教において、教義を差し替えるということはそう珍しいことではない。有名な阿含宗も根本的な信仰の対象となる本尊をすり替えているし、教義も変えている。これらの教団の指導者を見てわかることはやはり、彼らが「魔境」であるということだ。

教団の根本となる教義に嘘の上塗りをするがゆえに、にっちもさっちもいかなくなり、「方便だった」「お告げがあった」として簡単に教義を変えてしまう。幸福の科学の場合、本尊が大川隆法主宰先生＝釈迦大如来と言っているから、これに関して変わりようがない。がしかし、教義のすり替えに関して矛盾を感じないほど、嘘の上塗りに鈍感になっているのだ。やはり魔境といわざるを得ない。

この「方便」問題に関しては、次に挙げる一文の解説をもって最後にしたい——というのはあまりにも問題がありすぎて、すべてを語るには紙面が足りないのである。

そういう理由で、当会のお人好し的なカルマのところは少し刈り取って、もう少しきっちりと一本化して、戦っていく姿勢を出していきます。

ですから、多様なる信仰と言いますか、高級霊が多数いるということは、これは事実ではありますけれども、エル・カンターレ系霊団として、一本化していきたいと思います。

そして、当会の攪乱要因になった部分の霊人たちに対しては、地獄に行っているわけではありませんが、一定の謹慎を命じましたので、しばらく活動を停止させます。

こういうことで、「あっちもいい、こっちもいい」というふうなスタイルの信仰では、もうこれから日本全体、そして全世界に伝道していくには無理があります。当会としての純粋性をもって発展を願っていくべき時が来たのです。

借物はもういらない時代、ほんものの時代が来た。方便の時代は、もはや終わった。これからは、本当に本音で語る時代が来た。教義においても活動においても、そういう時代が来たということです。他の団体の教義や活動方針に合わせて、当会のやり方が批判される時代は、もはや終わった。そうした人の戯言を聞く気持ちはない。

当会は、毘盧遮那仏、エル・カンターレを中心とした団体である。これに対して帰依しないものは、人間であっても霊人であっても、一定の距離を取らせていただく。

こういう姿勢でやっていきたいと思いますので、みなさんも、そういう考えでやってください。

この一文にも矛盾があり、彼の理論の不完全さをさらけ出している。仏教の教義から考えると筋の通らない言葉が頻出しており、一見して思いつきでいい加減なことを言っていることがわかる。

幸福の科学では〝一応〟以前から「仏教」を名乗っている。それは大川隆法氏自体が釈迦牟尼の名を語っ

ていることからもわかるだろう。そして〝一応〟仏教を名乗っている幸福の科学は「三宝帰依」というものを教義として持っている。これは仏——幸福の科学の場合は唯一無二の仏陀※・大川隆法主宰先生、法——同じく大川隆法主宰先生の説く法、そしてサンガ——同じく彼らの教団の職員（彼らは出家者らしい——家から〝通勤〟して、給料までもらっているのに出家とは理解できないが）に帰依をしなさいということである。もちろんほかのものに対して帰依をしてはいけない。しかし、幸福の科学・大川隆法氏は、この三宝帰依を持ち出していながら今までまさに「多様な信仰」をしていたのである。この事実はとても仏教教団として理解できるものではない。

　さて、今回その「多様な信仰」を廃したわけだが、その後の大川氏の記述が興味深い。

　そして、当会の撹乱要因になった部分の霊人たちに対しては、地獄に行っているわけではありませんが、一定の謹慎を命じましたのでしばらく活動を停止させます。

　今まで自分が勝手に出してきた「霊人」——仏教の根本的な理念から考えると、彼らは転生しているはずなので出てくるとは思えないが——を、都合が悪くなると「謹慎」させるというのだ。あまりにもいい加減なこの所業は、とても正気とは思えない。全く恥知らずにもほどがある。

　ここまでくると、もう何を言っても空しく聞こえるだけである。大川氏の講話全体に言えることだが、情緒的で、美辞麗句を繰り返し、その実、中身は空虚なものだ。今さら何を言っても同じで、どんなに力強く吠えた格好をしてみても意味がない。

　世紀のチャンポン宗教の敗北宣言が空しくこだまするだけだ。



※仏陀はただ一人ではない。よって唯一無二という表現はおかしい。サキャ神賢は経典の中で過去の仏陀、未来の仏陀の名を挙げている。大川隆法さん、残念でした。

2.『太陽の法』『新・太陽の法』に見る大川隆法の苦悩

◆「法」泥棒の実態

「法のすり替え」によって、幸福の科学はより仏教の本質となる教えに統一していくと宣言している。

それでは、これから幸福の科学における根本的な教典とされる『太陽の法』および改訂版の『新・太陽の法』をもとに、その教えが一体、どのように仏教的に統一されているのか、著しく変更が入ったところを挙げ、検討してみたい。

読んでいただければよくわかると思うが、結論から言って大川隆法氏の教えは根本的に仏教ではない。そこをいかに大川流の「仏教」にしようとするのか見物である。

また、彼は真実の仏法＝麻原尊師の教えを盗み、その教義に堂々と取り入れている。この「法泥棒」の実態も合わせて糾弾したいと思う。

◆天使と菩薩は同じなのか?

光の天使とは、一体なんなのかということを中心に、お話ししたいと思います。

天使といえば、キリスト教的であるし、一方、菩薩というと、とても仏教的な響きがあります。しかし、キリスト教の大天使は、仏教でいう如来と同じであるし、天使ということばは、菩薩や諸天善神をふくんでいるのです。

すでに述べたことですが、本来、キリスト教も、仏教も神の教えであることにかわりはないのです。

『太陽の法』

光の菩薩とは、一体なんなのかということを中心に、お話ししたいと思います。

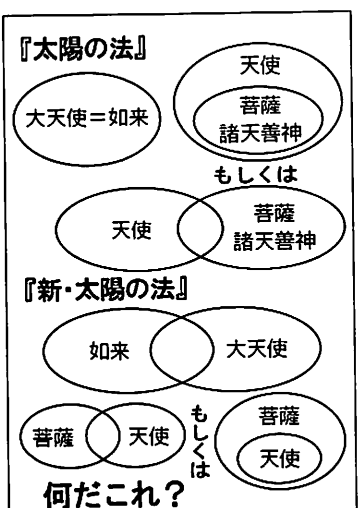
天使といえば、キリスト教的であるし、一方、菩薩というと、とても仏教的な響きがあります。しかし、仏教でいう如来の中には、

一部キリスト教の大天使がふくまれていますし、菩薩という言葉にも、天使の意味合いがふくまれています。
すでに述べたことですが、本来、仏教も、キリスト教も、仏法真理であることにかわりはないのです。
『新・太陽の法』

これはキリスト教の「天使」を仏教の「菩薩」と入れ替えて説明しているものだと思われる（この本全体では「神」が「仏」という言葉に変わっている。最初から「統一」に無理があるようである。いったい仏と神は同じなのか？）。雰囲気で見れば何となくそうなのかなと思ってしまいそうだが、実際よく比べてみると何が言いたいのか全然わからない。相関関係を図で表わしてみたが両者はハッキリと違う。※図

百歩譲って前著がなかったとして、理解しようとしてもどうも「仏教的」には説明されていないようだ。表現が曖昧で意味が正確にとれないし、もともとの言葉の定義が仏教とはかけ離れているのである

一つ大きな問題は「如来」と「大天使」についてである。「如来」とは経典では「タターガタ」つまり真理勝者、自分一人の力で最終の解脱へと到達した魂のことを指す。別の言い方では十力者——つまり十の能力を持ったもの——とも呼ばれている。※1 それに対して大天使は、言葉の原義から見ても如来と同格にはならないのである。天使とは「御使い」のことを表わしていることはだれにでも理解することができるだろう。いかに「大」※2がつこうとも「御使い」にはかわりない。では何の御使いなのかといえば、それよりも高い存在の御使いということになる。大川隆法氏が仏教を本当



※1真理勝者の十の能力に関しては『タターガタ・アビダンマ 第二誦品』（真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著・オウム出版）に詳しい。
※2キリスト教でいう「天使」は一般に九の段階に分けられる。その中で大天使は天使の上で下から二番目の存在。ということは「大天使」もレベルは高くない。

※『ヴァジラヤーナ・サッチャ』（オウム出版）にも「宗教は一つの道」として麻原尊師の講話が連載されている。

に知っているのなら如来が最高のステージであることがわかるはずである。しかし、彼はそれに対して、ただの「御使い」を同格のものとして取り上げている。これでは彼の理論にほころびが出てくるのは当然である。

最後の「仏教も、キリスト教も、仏法真理であることはかわりないのです」に関しては、その言葉だけを取れば正しいということができる。しかし、仏教とキリスト教では明らかに教えの段階が違い、キリスト教が仏教に包含されるという意味においてのみ、この言葉は肯定されるのである。もちろん、これを大川隆法氏が知っているかは、はなはだ疑問ではある。

ただ、世界宗教と仏教の関係※に関しては麻原尊師も何度か説法で触れており、幸福の科学の教義の間違いを正した『幸福の科学の会員よ聞きなさい！　真実の仏陀の教えはこうだ！』でも説明されている。大川隆法氏がこれを参考にした可能性もある。

◆天下の大泥棒、大川隆法

次は、いよいよ深刻な「法泥棒」の問題に触れなければならない。

『新・太陽の法』は先にも述べたとおり、幸福の科学の根本的な教典である。ゆえに、彼らの教団としてのポリシーが現われるといってもかまわないだろう。ここで取り上げる一文は大川隆法氏が唱える「真説・八正道」――つまり、本当の八正道といいたいのだろう――の解説の要約部分である。実は、この大川隆法氏の八正道については『真実の仏陀の教えはこうだ！』でもその誤りを指摘しているが、この、『新・太陽の法』ではそれに加え、更なる過ちを犯しているのである。

まずは、『太陽の法』『新・太陽の法』両書の対応する部分を読んでいただこう。

私が、みなさんにお伝えしている高級神霊の声が、はたしてほんものかどうかを知る基準は、それによって、自らの心が感銘を

受けるかどうか、自らの心が感動するかどうかです。ですから、みなさんが、もしそれらの書物に、魂の底から共鳴するものがなければ、霊言集はすてて、自らの頭で、合理的な基準を打ちたてて、「正しさ」を追究すればいいでしょう。しかしもし、高級神霊の霊言を、神近き人びとのことばだと信じられるならば、彼らの教える正しさを人生のヒントとして生きていくべきです。いずれにしても、最終的に「正しさ」を決定するのは、真我なる自分自身であり、自分自身の奥底にひそむ神性が納得し、共鳴するかどうかなのです。

こうして、納得し、共鳴しえた自分の神性にてらして、さらに、つぎの各項目を反省の材料として、日々を生きていただきたいと思っております。

一、自分は、正しくものごとを見たか。正しく人を見たか。神のような心でもって、人びとに接したか。

二、自分は正しく語ったか。自らの良心に恥じるようなことは語らなかったか。他人を迷わし、不安におとしいれるようなことを語らなかったか。ことばで、他人を傷つけなかったか。

三、自分は正しく思ったか。心のなかに悪い想念を抱かなかったか。悪しき想いは、世界をけがす。自分の心を清めようではないか。

四、自分は正しく仕事をしたか。神のくださったダイヤモンドのような時間を、有効に使ったか。人に役立つように使ったか。

五、自分は正しく生活をしたか。生活のなかに不平不満はなかったか。足ることを知っていたか。万物に感謝をしたか。

六、自分は正しく神理を学んでいるか。神仏を念う気持ちが薄らいではないか。一体どれだけの人の心を救ったか。

七、自分は正しい人生計画をもっているか。自らの自己実現の祈りは、神仏の心にかない、自らの人格を高めるものか。

八、自分は正しい精神統一の時間をもっているか。自らの過去の罪を反省し、その日一日をしっかりふりかえり、守護、指導霊に感謝してから就寝しているか。

右にあげた八項目が、真説・八正道にして、今日においても、その価値を失わない、人間としての正しい生き方です。そして、このように、毎日毎日を正してゆくことが、非凡な人生を生み、神仏の高みへと自分を押しあげていく力となるのです。「太陽の法」

私が、みなさんにお伝えしている仏法真理は本物です。悪魔や悪霊に振り回されている人でない限り、それを読めば心は揺さぶられ、反省の涙がこみあげてくるはずです。私の教える正しさを人生のヒントとして生きていくべきです。その際に、つぎの各項目を反省の材料として、日々を生きていただきたいと思っております。

一　自分は、正しい信仰に基づき、ありのままに正しくものごとを見たか（「如実知見」）。正しく人を観察したか。仏のような心でもって、人々に接したか。正しい世界観、人生観を素直に受け入れたか。（正見）

二　自分は正しく思ったか。自分の修行の志は正当か。心のなかにむさぼりや怒りや愚痴などの悪い想念を抱かなかったか。他人に対して悪しき想いを抱いたり、害心を持たなかったか。慢心したり、仏法を疑ったりしなかったか。仏法に反する考えを持たなかったか。また、正しく判断したか。（正思）

三　自分は正しく語ったか。自らの良心に恥じるようなことは語

らなかったか（真実語）。言葉で、他人を傷つけなかったか（悪口）。悟りをいつわらなかったか（妄語）。他人を迷わし、うぬぼれさせたり（綺語）仲違いをさせ不安におとしいれるようなこと（両舌）を語らなかったか。（正語）

四　自分は正しく行為をしたか。修行者としての戒律を犯すようなことはなかったか。手や足やその他の身体器官が、法律に反する殺人・暴行・盗みや、性道徳に反する、不倫や、わいせつ行為、悪質な風俗営業での堕落した行為、ポルノへの傾倒などの罪を犯すことはなかったか。あらゆる生命を尊重し、仏・法・僧の三宝には布施を惜しまなかったか。（正業）

五　自分は正しく身・口・意の調和のとれた生活をしたか。酒やタバコ、賭博、麻薬などにまみれたよこしまな生活をしなかったか。生活のなかに不平不満はなかったか。足ることを知っていたか。万物に感謝をしたか。また、仏のくださった二十四時間を活かし切ったか。（正命）

六　自分は正しく仏法真理を学んでいるか。修行の気持ちが薄らいでいないか。一体どれだけ悪から遠ざかり、善の種をまいたか。正しい努力を怠っていないか。（正精進）

七　自分は心を落ちつけて、修行とユートピア建設に関する正しい人生計画を抱くことができるか。自己実現の祈りは、仏の心にかない、悟りを高め、自らの人格をも高めるものか。また、仏法真理を深く理解し、教えを正しく記憶しているか。（正念）

八　自分は正しい精神統一の時間を持っているか。自らの過去の罪を反省し、その日一日をしっかりふりかえり、守護、指導霊に感謝してから就寝しているか。精神統一によって心の安らぎを得ているか。（正定）

右にあげた八項目が、真説・八正道（注）にして、今日においても、その価値を失わない、人間としての正しい生き方です。そして、このように、毎日毎日を正してゆくことが、非凡な人生を生み、仏の高みへと自分を押しあげていく力となるのです。

（注）ここでは本来の八正道の順序で説明してあるが、かつて『釈迦の本心』や『真説・八正道』では、実践的観点から別の順序の八正道も試みている。

『新・太陽の法』

まず、「真説・八正道」の部分に入るまでの文について。これもかなりの改訂がなされているが、両方を読んでも（もちろん独立して読んでも）ハッキリとした論理が通っておらず、意味を取ることができない。『真実の仏陀の教えはこうだ！』でも指摘してあるが、法則が真実であるか真実でないかの判断を、感動するかしないかで決めろとはあまりにもひどい論理である。『新・太陽の法』に至っては、頭から「真実」であると言い切っている。今まで指摘してきたように、間違いがあることが明らかであるにもかかわらず、である。ここからすでに怪しいと感じることができる。

さて、問題の「真説・八正道」の部分であるが、論じる前に一言いわせていただこう。「真説」を掲げて

いるのに簡単に内容を変えてしまうとは一体どういうことなのだろうか。これでは「真説」ではないと最初から言っているようなものである。それとも、幸福の科学ではコロコロ何度も変わるものを「真説」として認めるものなのだろうか。

では本題に入るとしよう。サキャ神賢が説いた本当の八正道はその経典「道に関係づけられた経典(Magga-Saṃyutta)」にまとめられているし、麻原尊師の書籍※にも数多くまとめられているので詳しい説明は避けるが、大川隆法氏の「真説・八正道」は改訂を加えてもかなり間違ったままである。

一つだけ正しいのは、今まで順番を入れ替えていたものを元に戻したことだ。サキャ神賢自身、八正道の順番を入れ替えて説いたことはなく、むしろその順番に大きな意味があるので、これを元に戻したことは彼にとって、大きな進歩である。

しかし、この不自然なほど大きな改訂の裏に麻原尊師の八正道解説を盗んでいると考えられる部分が多々存在している。麻原尊師の場合、仏教の経典を、サキャ神賢の言葉が一番忠実に遺(のこ)っているとされる「パーリ経典」に求めている。これは、日本に仏教が伝わるまでに訳者の観念などによって法がねじ曲げられることが多々あるからである。これにより、原典に忠実に、原語の意味を取っていく作業が行なわれている。これらの中には漢訳の経典ではすでにねじ曲げられ、パーリ経典を研究しなければ絶対に出てこない言葉がたくさん使われている。ゆえに、麻原尊師は仏典の用語に関してダイナミックな変換を行ない、ふつう世に出ている漢訳の経典などからは意味をうかがい知ることのできなかった、本来の仏教の教えに触れることを可能としている。

このパーリ仏典から意味を引き出した言葉が、『新・太陽の法』の「真説・八正道」に使われている。大川隆法氏が麻原尊師の教えを盗み、マネをしたのである。もちろん、大川隆法氏がパーリ仏典を研究しているのなら、問題のないこともいえる。しかし、単なる名詞にしても、幸福の科学の場合、本来のパーリ語と表記が合わないため、パーリ仏典を研究したとは考えら

※『仏教真理・八正道』『ハイエストダンマ』（いずれもオウム出版）等にまとめられている。

れない。これは明らかに「法泥棒」である。これこそ、大川流仏法の奥儀！なのかもしれない。以下、その実態を指摘していこう。

まずは「正業」についてである。大川隆法氏は初め、正業を「正しく仕事をしたか」と説いている。今回の改訂では、「正しい行為をしたか」となっている。そのあとの説明もお粗末だが、最初、「業＝仕事＝生業(なりわい)」として考えていたのが、「行為」と不自然に大きく変更されている点は注目に値する。麻原尊師はこの正業を「正行為」と訳している。まさに「正しい行為」そのままである。

次は「正念」である。見てわかるとおり、正しく念(おも)うとして「自分は正しい人生計画をもっているか」としている。新著ではこれに、「仏法真理を深く理解し、教えを正しく記憶しているか」をつけ加えている。明らかに麻原尊師の決定した訳語、「正記憶修習」から来ているものだ。なぜなら、これは漢訳からは出てこない意味だからである。さすが天下の大泥棒の面目躍如といったところだろうか。

その他にも「害心」等、怪しいところはあるが、これくらいにしておこう。なおオウム真理教の新しい訳語は、『幸福の科学の会員よ聞きなさい！真実の仏陀の教えはこうだ！』において、彼らの誤りを指摘すると共に発表しているので、それをそのまま使っているのかもしれない——ということをつけ加えておこう。※

八正道の訳語対照表
（麻原尊師が決定された訳語）

八正道	↓	聖なる八段階の道
正見	↓	正見解
正思惟	↓	正思惟（変更なし）
正語	↓	正語（変更なし）
正業	↓	正行為
正命	↓	正生活
正精進	↓	正奮闘
正念	↓	正記憶修習
正定	↓	正サマディ

※『新・太陽の法』の中には、このほかにも『真実の仏陀の教えはこうだ！』で指摘したところが、修正されていたり、削除されているところがある。やっぱり気になったのだろう。

では、次に大川隆法氏のほかの書籍などに見られる麻原尊師独自の用語を挙げてみよう。

★「カルマの解放」――テレビの対談で

「カルマの解放」とは自分自身に内在されていた要素の蓄積（カルマ）が果報として解き放たれることを意味する。が、この言葉も麻原尊師独特の言葉で、ほかに使っている宗教家を確認したことはない。マネしているのは大川隆法氏だけである。※

★メシア＝「転輪聖王」――『宗教選択の時代』で

これも麻原尊師が独自に採っている説で、キリスト教関係者も知らない。

もともと「キリスト」という言葉は「油を注がれた者」を意味し、仏教でいわれる「武人で頭に油を注がれた者」である「武人灌頂王」と一致する。大川隆法氏はその著作『宗教選択の時代』第六章・第七章でこれを引用し「メシア」＝「油を注がれた者」＝「転輪聖王」としている。実はこれは誤りで「メシア」とした場合、イコール「武人灌頂王」が正しい。麻原尊師はこの「武人灌頂王」が、仏教の七宝の一つ「天の輪宝」を得ると「転輪聖王（麻原尊師は転輪王と訳している）」となると述べられている。大川隆法氏はここまでしっかり理解せず、途中の段階までをいい加減にうろ覚えで使ったのかもしれない。しかし、盗むのなら盗むで正しく使ってほしいものだ。また、盗むのなら盗むで徹底的に盗んでもっとまともな法則を説いてほしい。こんなにも間違いだらけでは、盗まれて使われる麻原尊師の方が恥ずかしい思いをするではないか。

ここでは、確実に盗んだとわかる「言葉」を取り上げたが、このような調子で大川隆法氏は麻原尊師の教えを盗み、教義に取り入れている。真理を取り入れたのならばいいではないか、と思われるかもしれないが、それは正しくない。大川隆法氏の教えのそのほとんどが間違っている以上、そして彼がそれによって金儲けをしようと考えている以上、それは許されないことである。これは「法則泥棒」であり、それを真理以外に使うということは最大の悪業となるのである。

※阿含宗の桐山靖雄氏が「カルマからの解放」という言葉を使っているが、「カルマの解放」と「カルマからの解放」では明らかに意味が違い、用法も違っている。



また、これは彼自身の中でどう処理しているのかわからないが、大川隆法氏は法を盗んだ相手——こちらから見れば、法則の提供者である——つまり麻原尊師を、そしてオウム真理教を誹謗中傷し、教団を使って事実無根の非難を大合唱している。「法則」を盗んでおいて、この言いがかりもないものだが、自分が徹底的に非難している相手から法則を盗む自分のことを一体何だと思っているのだろう。まさに盗人たけだけしいとはこのことである。

ヘブライ語　マーシーアハ
↓
頭に油を注がれた者
＝武人灌頂王（意味）
↓（音写）　↓（意訳）
ギリシャ語　メシーア　クリーストス
↓　↓
メサイア　キリスト
↓　↓
キリスト（武人灌頂王）が
天の輪宝を得ると
↓
転輪王（転輪聖王）



参考：有能神に関係づけられた経典『サッカ・サンユッタ』より

これが大川流仏法の誤り

私が、みなさんにお伝えしている仏法真理は本物です。悪魔や悪霊に振り回されている人でない限り、それを読めば心は揺さぶられ、反省の涙がこみあげてくるはずです。

※最初から「本物」と断定するのは素晴らしい情報操作だ。なかなかテクニカルである。しかし、ここまで誤りを指摘されたらぐうの音も出まい。

私の教える正しさを人生のヒントとして生きていくべきです。その際に、つぎの各項目を反省の材料として、日々を生きていただきたいと思っております。

※八正道を単なる「反省」の材料とするところがすごい。あきれてものが言えない。

一、自分は、正しい信仰に基づき、ありのままに正しくものごとを見たか（「如実知見」）。正しく人を観察したか。仏のような心でもって、人々に接したか。正しい世界観、人生観を素直に受け入れたか（正見）

※「如実知見」――これは明らかに誤り。如実知見とは、解脱の前に来る段階で、その言葉の通りすべてにおいて正しく理解することができるようになることをいう。しかし、正見とは経典にあるとおり、第一段階の修行としてすべての物事において四諦（四つの絶対的真理）にのっとって精通する、つまり正しい見解のことを意味するのである。よってそれ以降の説明も自ずと誤りであることがわかる。

二、自分は正しく思ったか。自分の修行の志は正当か。心のなかにむさぼりや怒りや愚癡などの悪い想念を抱かなかったか。他人に対して悪しき想いを抱いたり、吝心を持たなかったか。慢心したり、仏法を疑ったりしなかったか。仏法に反する考えを持たなかったか。また、正しく判断したか。（正思）

※どうもこの記述を見ると、大川隆法氏は正思を正しい思いととらえているようである。実際は正しい思索を意味する。

経典では「向煩悩滅尽多学男たちよ、実に、解放の思惟・非害心の思惟・非残酷の思惟、向煩悩滅尽多学男たちよ、これを正思惟というのである」となっている。

残念ながらこの正思もハズレだ。

三、自分は正しく語ったか。自らの良心に恥じるようなこと

は語らなかったか（真実語）。言葉で、他人を傷つけなかったか（悪口）。悟りをいつわらなかったか（妄語）。他人を迷わし、うぬぼれさせたり（綺語）仲違いをさせ不安におとしいれるようなこと（両舌）を語らなかったか。（正語）

※これは『真実の仏陀の教えはこうだ！』で指摘され非常に大きく修正されている。正語に、妄語・綺語・悪口・両舌を取り入れたことは褒めるが、いかんせんそれぞれの意味が間違っている。悪口はそのまま「わるくち」だからいいとしよう。真実語——これは妄語の反対としていいたいのだろう——が良心に恥じる言葉を語らなかったかにしているが、いったい良心の基準がどこにあるのかを考えると戒律としてあまりに不的確だ。真実は妄語（嘘）を語らないことだ。次に綺語。これは意味を取ってみればわかるが必要のない軽薄な言葉を指す。両舌は「仲たがいさせる言葉」。仲たがいさせて不安におとしいれる——よくわからない表現だ。

四、自分は正しく行為をしたか。修行者としての戒律を犯すようなことはなかったか。手や足やその他の身体器官が、法律に反する殺人・暴行・盗みや、性道徳に反する、不倫や、わいせつ行為、悪質な風俗営業での堕落した行為、ポルノへの傾倒などの罪を犯すことがなかったか。あらゆる生命を尊重し、仏・法・僧の三宝には布施を惜しまなかったか。（正業）

※「正行為」とは「殺生をやめること・窃盗をやめること・非神聖行（梵天に至るための修行ではないこと）をやめること」と経典にある。ここで面白いのは大川隆法氏が「法律」や「性道徳」を持ち出していることだ。法律などというものは時代・国によって全く変わってくるものだし、道徳とはもともと道教的な徳目のことである。仏教、つまり普遍的な真理と合致するものではない。これを見ると、大川隆法氏は合法的な殺人等ならいいといっているようだ。

五、自分は正しく身・口・意の調和のとれた生活をしたか。酒やタバコ、賭博、麻薬などにまみれたよこしまな生活をしなかったか。生活のなかに不平不満はなかったか。足ることを知っていたか。万物に感謝をしたか。また、仏のくださった二十四時間を活かし切ったか。（正命）

※正生活。在家の正生活を見ると仏典には七つの法則が解き明かされている。大川隆法氏の解説するものはそれと一つも合致しない。

六、自分は正しく仏法真理を学んでいるか。修行の気持ちが薄らいでいないか。一体どれだけ悪から遠ざかり、善の種をまいたか。正しい努力を怠っていないか。（正精進）

※正奮闘。これは仏教の四つの正しい努力（二正断二正勤）のこと。大川流仏法にはそのニュアンスが全く含まれていない。正しくは、生じていない悪不善の法則が生じないように、生じた悪不善の法則を捨断するように、生じていない善の法則が生じるように、生じた善の法則を集中継続し、混乱することなく、さらに多く学び、充実し、修習し、完全にするために、決意を作り出し、奮闘し、精進に着手し、心を引き締め努力することをいう。

七、自分は心を落ちつけて、修行とユートピア建設に関する正しい人生計画を抱くことができるか。自己実現の祈りは、仏の心にかない、悟りを高め、自らの人格をも高めるものか。また、仏法真理を深く理解し、教えを正しく記憶しているか。（正念）

※正記憶修習。まねて改訂したようだが正解ではない。正しくは四念処（四つの記憶修習の現象化）に基づいた真理のデータを繰り返し記憶修習すること。

これは、ただ記憶するだけでは不十分で、繰り返し繰り返し、完全に法則を自分の中に根づかせる作業をすることである。

経典にはこう書かれている。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、正記憶修習とは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。」

八、自分は正しい精神統一の時間を持っているか。自らの過

去の罪を反省し、その日一日をしっかりふりかえり、守護、指導霊に感謝してから就寝しているか。精神統一によって心の安らぎを得ているか。（正定）

※正サマディ。これは精神統一による心の安らぎ程度のものではない。簡単にいえば、精神統一はダラーナといい、その次にディアーナ、そしてサマディへと入ることになる。段階が全然違うのだ。

「サマディ」は瞑想の究極状態といわれ、この状態に入ったときは心拍と呼吸が停止する。大川隆法氏はクンバカ（保息）もろくにできない。サマディに入ったことのない人間が、サマディを語るとは笑止千万である。

右にあげた八項目が、真説・八正道（注）にして、今日においても、その価値を失わない、人間としての正しい生き方です。そして、このように、毎日毎日を正してゆくことが、非凡の人生を生み、仏の高みへと自分を押しあげていく力となるのです。

『新・太陽の法』

ハッキリ言って、これでは「仏の高みへと自分を押し上げていく」ことなど無理である。「真説・八正道」ではなく、「**珍説・八正道**」と言い直すことをお勧めする。



◆どうしたらこんな法則が吐けるのか

次も、『太陽の法』に対して『真実の仏陀の教えはこうだ！』で誤りを指摘したところである。新しく大幅な改訂が加えられている。

とはいえ、阿羅漢の段階では、まだ、転落する危険性をもっています。なぜならば、阿羅漢の段階とは、まだ、自分自身の潜在意識層にいる守護霊と交流可能な境地だということにすぎず、高級神霊たちの心までは十分にわかっていないからです。神理の教え

の高下、バラエティ、奥行きなどについては、まだ、十分に理解していないのです。そのため、異説、邪説などにまどわされる可能性も高いといえます。

たとえば、真の宗教指導者が死去したときに、弟子たちが、それぞれかってなことをいい出して、教団がバラバラになったりすることがあります。これは、ひとたび阿羅漢の境地に達していた弟子たちが、心の基準がわからなくなり、転落してゆく姿なのです。すなわち、あるひとつの修行方法を通してある程度悟った者が迷いはじめるのは、それ以外の教え、ほかの修行方法に対する心のそなえができていないからなのです。

かつて、正師のもとで、心の教えを学んでいた者が、師の死後、心霊治療とか、超能力信仰だとかいう現象の方向に走ってゆくこともありますが、これも同じで、あらゆる教えをはかるだけの「心のモノサシ」ができていないためです。　「太陽の法」

とはいえ、阿羅漢の段階では、まだ、転落する危険性をもっています。なぜならば、阿羅漢の段階とは、まだ、一通りの反省がすんで自分自身の潜在意識層にいる守護霊と交流可能な境地だということにすぎず、光の菩薩たちの心までは十分にわかっていないからです。仏法真理の教えの高下、バラエティ、奥行きなどについては、まだ、十分に理解していないのです。そのため、異説、邪説などにまどわされる可能性も高いといえます。

また裏側の天狗界や仙人界の住人の場合、この心境が単なるあてものや霊現象をもたらす、初歩的な神通力として現われることがあります。やはり、愛や悟りについて心境を深めていくことが大事です。教学も決して軽視してはなりません。「新・太陽の法」

大幅に改定されたといっても、指摘した阿羅漢の性質については直されていない。つくづく残念である。『真実の仏陀の教えはこうだ!』ですでに述べてあるので繰り返すことになるが、阿羅漢とは個の修行を完成し、煩悩を止滅した状態にある。この状態に達した者が、異説、邪説に心を惑わされることはないのである。

このように、改訂しても、相も変わらず間違いだらけなのだからたまらない。これで会員は納得するのだろうか。「裏側の天狗界や仙人界」などサキャ神賢は一言もおっしゃってはいない(ここまで触れ出すと、もう泥沼にはまるので指摘するだけにとどめる)。

◆大川隆法よ、いい加減にしなさい!

次も『真実の仏陀の教えはこうだ!』において、厳に追及したところである。『太陽の法』の部分だけをみても大川隆法氏のいい加減さがよくわかるが、『新・太陽の法』に至ってはもう最悪である。

私は三十五歳で悟りをひらいて以来、四十五年間、真実の神仏の道を説いてきた。しかし、その私にも、ついに、肉体を去るべきときが来たようだ。私の老いさらばえた肉体よ、八十年の長きにわたって、ほんとうにどうもありがとう。あなたががんばってくれたために、私は、実に四十数年ものあいだ、人びとに神仏の道を説き、人間として生きる道を示すことができた。私の肉体諸器官よ、ほんとうにごくろうさまでした。

また、私の弟子たちよ、長年、ほんとうによくやってくれた。私の身のまわりの世話から、法の伝道まで、実によくやってくれた。あなた方のおかげで、釈迦教団は、五千人もの大教団となった。また、私の教えを信奉する者は、全ヨジャーナ、全インドに、一体何十万人いるか数知れない。それもこれも、みな、あなた方が、法難と闘い、法敵の目をかいくぐって、神理の伝道をつづけてくれたからだ。あなた方なくして、一体私の教えに、いかほどの力があったであろう。ほんとうにありがとう。

先年亡くなった舎利仏（シャーリプトラ）よ。もうすぐそちらの世界に還れるから、おまえとも会えるな。また、久しぶりにひざづめで話をしようよ。おまえも、ほんとうによくやってくれた。おまえがよき聞き役だったので、私も、実に説法がしやすかったよ。おまえは、ときどき、おろかな質問をしては、私を苦笑させたが、おまえの質問のおかげで、直接私に質問する勇気さえなかった衆生が、一体どれだけ感謝をしたことか。

また、ヤサよ。色白で、色男のおまえを弟子にしたばっかりに、比丘尼となった女性が何十人いたことか。私は、女性がつぎつぎと頭を丸めて、家を飛び出し、入門を求め、そのご両親から抗議を受けたときは、おまえを弟子としたことを、どれだけ後悔したことかしれない。そのおまえもいい老人になってしまったな。来世で、私はもう一度、東の国に生まれてくることになっているから、そのときは、おまえも一緒に生まれてきて、私の仕事をきっとまた、手伝うんだぞ。いいな、忘れるなよ。

アナンよ。おまえはまだ若く、霊能力もさほどもっていない。しかし、おまえももうすぐ、阿羅漢の境地に到達するからね。おまえは人並みはずれて記憶力がいいから、私が説法していたことをよく憶えておいて、仏典編集のときには、大車輪の活躍をするんだよ。

ウパリよ。おまえは気短かで、よくけんかをしたね。私のことを批判する人が出ると、おまえは腕まくりして、よくなぐりかかったものだ。おまえは、ほんとうに正義感が強かった。おまえは来世、東の国に生まれて、法華経の行者となるが、そのときには、他の宗の排撃をあまりやりすぎちゃいかんぞ。

ミロク菩薩よ。女性でありながら、あなたもよく、私の教えにここまでついてこれたね。来世で、私が東の国に生まれかわるときには、おまえも、同時代に生まれかわることになっている。しかし、おまえは、私よりもさきに生まれて、どうやら、私の露払いをやってくれるようだ。私が東の国に生まれかわるということを、おまえはお経のなかに遺しておきなさい。

ああ、かわいがった弟子たちのことを思うと、私がこの世を去ったあとのことが、ほんとうに気にかかる。弟子たちよ、よくおぼえておきなさい。私の生命は、まもなく地上を去るが、私の遺した教えは、何千年もののちに伝えられて、世の人びとの心の糧となってゆくであろう。

縁生の弟子たちよ、私の最後のことばをよくおぼえておきなさ

い。私の生命は、あの満月のようなものだ。月に雲がかかって見えなくなったように思えても、その実、月はやはり、雲の向うで煌々と輝いているのだ。そのように、生命というものは、永遠に輝いているのだ。永遠におわるときがないのだ。

　これよりのち、私が地上を去ったあとも、あなた方は、四十五年間、私が説いてきた教えを、心の糧として生きてゆきなさい。私の教えを心の糧として、だれに照らしてもらうでもなく、自分自身で心に灯をともして、自分自身の行く先を照らしてゆきなさい。自分の心に法灯をともして、しっかりと生きてゆきなさい。

　私が、長年、あなた方に説いてきた教えは、自分をつくる教えであり、自分をつくってから、他人を救ってゆく教えです。

　私が死んだあとも、どうか自灯明ということを忘れず、強く、正しく、清く、ほがらかに生きてゆきなさい。長いあいだ、ほんとうにありがとう。

「太陽の法」

　私は三十五歳で悟りをひらいて以来、四十五年間、善を探究し、正理とは何かを説いてきた。しかし、その私にも、ついに、肉体を去るべきときが来たようだ。私の老いさらばえた肉体よ、すべては無常であるのだ。私にはもはや、なんらおまえへの執着は残っていない。実に四十数年ものあいだ、人々に仏の道を説き、人間として生きるべき道を示すことができた、その「法」こそが私自身の本当の身体なのだ。

　また、私の弟子たちよ、長年、ほんとうによくやってくれた。私の身のまわりの世話から、法の伝道まで、実によくやってくれた。あなたがたのおかげで、釈迦教団は、五千人を超える出家弟子をもつ大教団となった。また、私の教えを信奉する者は、全インドに、一体何十万人いるか数知れない。それもこれも、みな、あなたがたが、法難と戦い、法敵の目をかいくぐって、仏法の伝道をつづけてくれたからだ。あなたがたなくして、この法が弘がることはなかっただろう。今後も怠ることなくつとめ励むがよい。

　先年亡くなった舎利仏（シャーリプトラ）よ、もうすぐそちらの世界に還れるから、おまえとも会えるな。また、久しぶりにひざづめで話をしようか。おまえも、ほんとうによくやってくれた。おまえは智慧第一といわれただけあって、よき聞き役だったので、私も、実に説法がしやすかった。おまえは、ときどき、おろかな質問をしては、私を苦笑させたが、おまえの質問のおかげで、直接私に質問する勇気さえなかった衆生が、一体どれだけ感謝をしたことか。

　また、大目連（マハーマウドガリヤーヤナ）よ、神通第一のおまえが、邪教徒に襲われ、命を落としたと聞いた時には、いかにおまえにとって忍辱の修行とはいえ、私は涙を禁じえなかった。そのおまえも、光る雲に乗って、もう私を迎えにきたようだ。

　摩訶迦旃延（マハーカートヤーヤナ）よ、論議第一のおまえは、私の説法をわかりやすく説明できたな。私亡き後も、辺郷の地に仏法の種をまき続けることだろう。アヴァンティ国を中心に、西インドに伝道するがよい。

　須菩提（スブーティ）よ、解空第一だけあって、おまえはいつも、物質に執われず、私の説く無我や空の教えをよく理解した。今後も、うまずたゆまず精進するがよい。

　阿那律（アニルッダ）よ、いつぞやは、おまえが私の説法中に居眠りをしたので、私がいつになく厳しく叱ったところ、おまえは

夜も寝ずに座禅を続け、ついに失明してしまった。幸い、霊眼が開け天眼第一となったが。あまりにも若く純粋だったおまえにも、白いものが目立つようになったな。

富楼那弥多羅尼子（プールナマイトラーヤニープトラ）よ、釈迦族出身のおまえは、なかなかの秀才で、説法第一が板についた。西方伝道の旅に出る予定の、もう一人の富楼那（プールナ）とおまえは、よきライバルとなるだろう。

摩訶迦葉（マハーカーシャパ）よ、おまえは私の死に目に会えず、一週間遅れて、ここクシナガラに到着することだろう。おまえは、阿難（アーナンダ）が不注意から私に毒キノコ料理を食べさせ、私の死期を早めたことを激怒し、彼を破門しようとし、最後には男泣きに泣くだろう。頭陀第一（修行第一の意）のおまえは、細かな修行方法にこだわるが、私亡きあとは、小々戒（些少な戒律）は捨ててもよいだろう。

優波離（ウパーリ）よ、持律第一のおまえは、本当にていねいな仕事を心がけ、折目正しくなった。下層出身にもかかわらず、貴族出身者にまじって、ひるまず、よく精進した。ほめてあげよう。

羅睺羅（ラーフラ）よ、私の実の息子でありながら、舎利仏のもとで人目につかぬ密行に励んだおまえは、密行第一と呼ばれたが、あまりにも早く世を去ってしまった。私の後継者に目されながら、あまりにも悲運の夭逝であった。なにもしてやれない父であったが、そちらの世界では幸福に暮らしているか。

耆婆（ジーヴァカ）よ、天下の名医のおまえには、何度も病気を治してもらったが、今度だけはどうにもなるまい。諸行は無常なのだ。川の流れを止めることができないように、私の地上の命は、もうこれ以上、長らえることはできないだろう。

最後に、文殊（マンジュシュリー）よ、文殊よ、おまえに伝えておくことがある。おまえの智慧は、本当に利剣のように鋭かった。おまえは十大弟子たちが、外道との論戦や、心得違いの在家信者たちの追及にたじたじとなっていた時にも、ひるまずに斬り込んでいって、釈迦教団の名誉を守った。おまえは、魂の本来の霊格である龍種如来の姿を隠して、年若い菩薩の姿に徹していた。

私亡き後は、象に乗って、男装の麗人の姿をとって、故郷の南インドに還るがよい。そこで弟子を養成して私の教えを弘めるのだ。後世、おまえが大乗仏教の祖といわれるようになるだろう。そして、東の国に私が再誕する時には、わが妻となるべく生まれ変わるがよい。

ああ、かわいがった弟子たちのことを思うと、私がこの世を去ったあとのことが、ほんとうに気にかかる。弟子たちよ、よくおぼえておくがよい。私の生命は、まもなく地上を去るが、私の遺した教えは、何千年ものちに伝えられて、世の人々の心の糧となってゆくであろう。

縁生の弟子たちよ、私の最後の言葉をよくおぼえておくがよい。私の生命は、あの満月のようなものだ。月に雲がかかって見えなくなったように思えても、その実、月はやはり、雲の向こうで煌々と輝いているのだ。そのように、生命というものは、永遠に輝いているのだ。永遠におわるときがないのだ。

これよりのち、私が地上を去ったあとも、あなたがたは、四十五年間、私が説いてきた教えを、心の糧として生きてゆけ。私の教えを心の糧として、だれに照らしてもらうでもなく、自分自身で心に灯をともして、自分自身の行く先を照らしてゆけ。自分の心に法灯をともして、しっかりと生きてゆけ。

私が、長年、あなたがたに説いてきた教えは、自分をつくる教えであり、自分をつくりつつ、他人を救ってゆく教えである。私が死んだあとも、自灯明という言葉を忘れず、法を頼りとして生きてゆけ。弟子たちよ、これが私の最後の言葉である。「もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成させよ」

「新・太陽の法」

『太陽の法』でバカにした多くの大聖者を引っ込ませ（このようなばかばかしい話を作り上げるとは、明らかに大聖者に対する侮辱である）、『新・太陽の法』では、新しくまた多くの聖者を登場させ、バカな漫才を繰り返し悪業を積み重ねている。両方の文に登場するウパーリの記述を見ればよくわかる。

大川隆法氏は完全な大魔境である。聖者へのこのような行為はカルマとして確実に彼に返ることだろう。大川隆法氏は宗教家になるよりも、得意の情緒的な文章で物語作家か詩人になった方が彼のためだったのではないだろうか。

ほかにも、この文章を読んでいくとマンジュシュリーが女性として取り上げられている。このばかばかしさは前著の弥勒菩薩（マイトレーヤ）を女性とするところとつながるが、「男装の麗人」には恐れ入る。糞掃衣を身に付けていた出家修行者に「麗人」とは一体どういうことなのだろうか。

さて、改訂されて最後につけ加えられたサキャ神賢の最期の言葉だが、何か経典を見て引っ張ってきたようだ。折角なので、麻原尊師の正しい訳を載せておこう。

「さあ、向煩悩滅尽多学男たちよ、今、君たちに呼びかけよう。種々の経験の構成は滅亡の法則である。怠惰でないことによって目的を達成しなさい。」

さて、結論だが、大川隆法氏の仏法を正すつもりが、あまりにも中身がなく、法則と言えないようなものなので、正した感じがしない。指摘するのもばかばかしい教えがあまりにも多すぎるのだ。これでは「仏教的な統一」など、どだい無理である。大川隆法氏の苦悩する姿が目に浮かぶようだ。彼風の表現を使うなら、

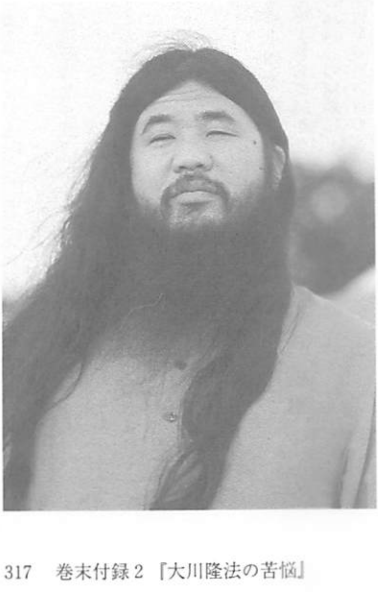
「あなたも本当にがんばったが、残念だ。おろかな行為を重ねるだけのあなたに、わたしは、同情の涙を禁じえなかった」といったところだ。

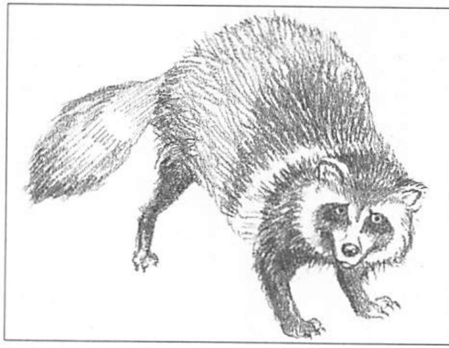
悪業の上に悪業の上塗りを重ねる大川隆法氏は、速やかにその間違った法則（正確には法則などと呼べる代物ではない）を説くことをやめるべきである。それは、あまりにも幸福の科学の会員が哀れだからである。それは彼らの教団のシンボルカラーからもわかる。

色というものは、心の状態や世界を表わし、その人の好みの色によってどの世界につながっているかを知ることができる。幸福の科学のシンボルカラーは「黄色」と「黒」の二色である。黄色は貪り、法則を盗んでいることを含めた貪りを表わし、それによって、黒が象徴する地獄へと至るカルマを表わしている。

なぜ、このような誤った法を、矛盾した法を信じることができるのか不思議ではあるが、会員にはそう罪はない。一刻でも早く、誤った法によって導かれる世界が、苦しみ多き世界なのだということに気づいてもらいたい。

最後に大川隆法氏に繰り返し、忠告する。麻原尊師の真理の法を盗み、自己の金儲けの道具とし、もともとの法則の持ち主である麻原彰晃尊師を誹謗中傷することを即刻やめなさい。過去から現在まで、このような「恥知らず」は、この日本で「宗教家」と名乗る人の中ではあなたただ一人である。あなたの得意な「良心」に照らし合わせて、よく「反省」してほしい。





ここに紹介するのは麻原彰晃尊師が仏典の研究等を行なった上、決定された訳語および独自に使っている言葉である。もしこの中の言葉を大川隆法氏が使っていたら、それは大川氏のサル（たぬき?）まねということになる。今現在確認できているものは、★＝大川氏が確実にマネしている言葉、☆＝たぶんマネしているだろうと思われる言葉、としてマークしてある。

ここに紹介するほかにも麻原尊師が独自に使っている言葉はかなりの数にのぼる。ここでは、大川氏が盗む可能性の比較的高い、実践的な教えをいくつか挙げてみよう。なおカッコの中に従来の仏教用語を示す。

四つの聖なる絶対の真理（四聖諦＝四諦）といえば、釈迦牟尼が最初に説かれた法である。大川隆法氏はこの四諦に関しても現在間違った解釈をしているので、これから使われる可能性はあると思われる。さすがに言葉そのものをそのまままねるとは思えないが、意味が合致していたらそれは怪しい。

四つの聖なる絶対の真理（四聖諦）

苦しみの聖なる絶対の真理（苦聖諦）
苦しみの生起の聖なる絶対の真理（集聖諦）
苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理（滅聖諦）
苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理（道聖諦）

次は八正道。八正道は「七科三十七道品」と呼ばれるものの中に含まれる一つの修行法である。文中で紹介したとおり、今の時点ですでにいくつか盗まれている。七科三十七道品全体を見たらどういうことになるのだろうか。

聖なる八段階の道（八正道）

正見解（正見）
正思惟（変更なし）
正語（変更なし）
正行為（正業）★
正生活（正命）
正奮闘（正精進）
正記憶修習（正念）★
正サマディ（正定）

四つの偉大なる心の覚醒（四無量心）の修行というものがある。これは本来、修行者が大乗の修行に入ってやっと実践できるものである。大川氏は彼の教義の

中で「愛」をかなり大切なものとして解説しているが、仏教の教えからは外れているようだ。ぜひ四無量心を勉強し、実践してほしい。

四つの偉大なる心の覚醒（四無量心）
　聖慈愛（慈）
　聖哀れみ（悲）
　聖称賛（喜）
　聖無頓着（捨）

　次は縁起の法と一般的に呼ばれる「十二の条件生起の段階（十苦しみから離解脱に至る道）」。この一番最初に「非神秘力」という言葉が出てくる。これは当然「神秘力」の対義語だが、大川氏はこの「神秘力」という言葉を使っている。もともとこれは日本語の語彙には存在しないものなのでやはり盗んだのだろう。

十二の条件生起の段階（十二縁起の法）
　非神秘力（無明）※神秘力★
　経験の構成（行）
　識別（識）
　心の要素・形状・容姿（名色）
　六つの感覚要素と対象（六処）
　接触（触）
　感覚（受）
　渇愛（愛）
　とらわれ（取）
　生存（有）
　出生（生）
　苦しみ（苦）
　信（変更なし）
　歓喜（悦）
　喜（変更なし）
　静寂（軽安）
　楽（変更なし）
　サマディ（三昧）
　如実精通見解（如実知見）
　現世否定（遠離）
　離愛著（離貪）
　離解脱（解脱）

　十戒（在家の場合は五戒）は仏教の基本中の基本である。これは「真説・八正道」で妄語・綺語・悪口・両舌の意味が間違っていたことから、そう盗んだ気配はない。しかし、せめて意味だけはまともに解説してほしい。

十戒
　殺生（変更なし）
　与えられないものを強奪すること（偸盗）
　愛欲における邪悪な行為（邪淫）
　嘘の言い方（妄語）
　軽薄語（綺語）
　乱暴な言葉（悪口）
　中傷の言葉（両舌）
　愛著（貪）
　邪悪心（瞋）
　迷妄（癡）

ほか、こういったものを盗んでいる。

要素の蓄積（カルマ）
　カルマの解放★
　カルマの刈り取り☆
　カルマの清算☆
　害心（瞋恚）☆
　智慧☆

本物の実感！

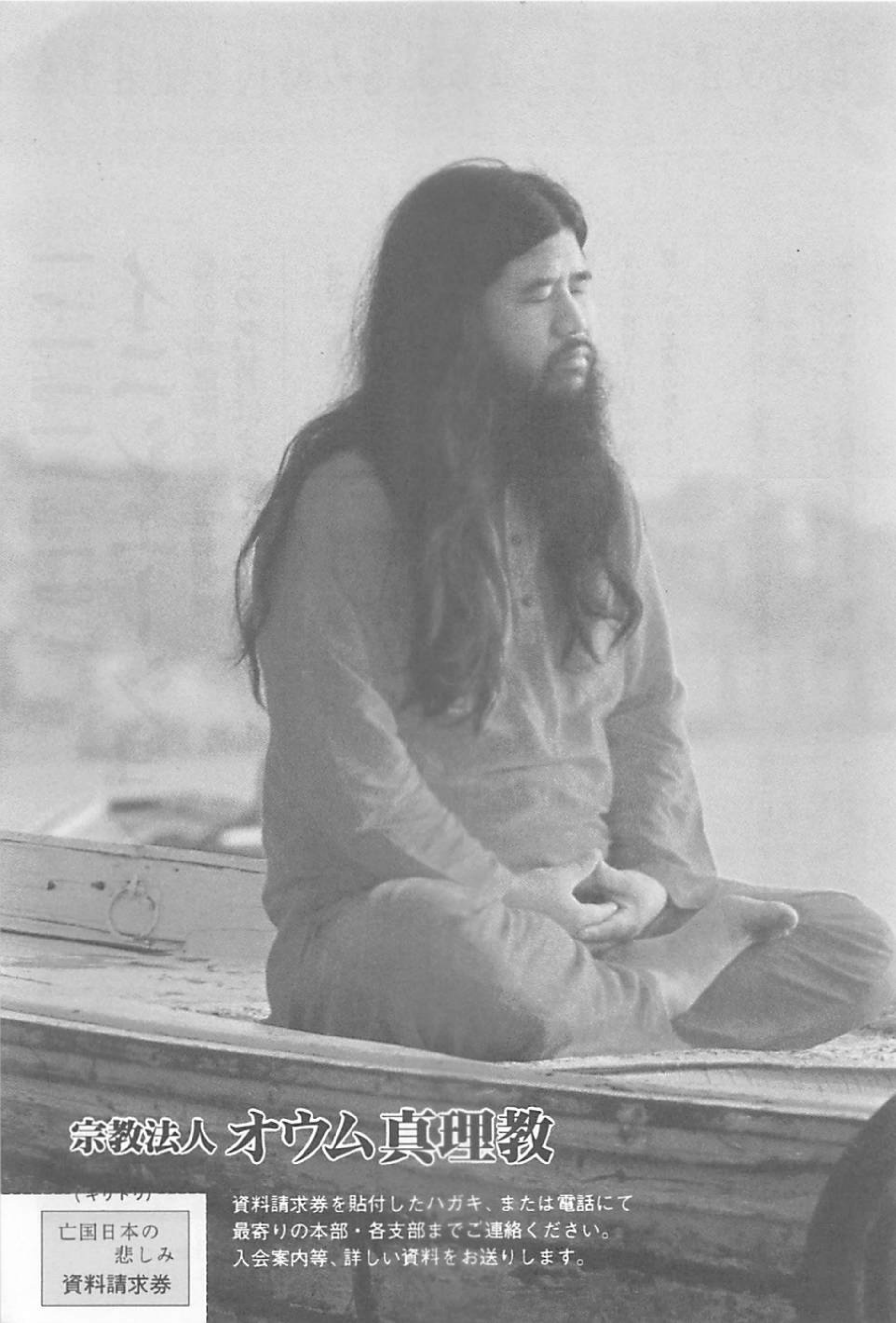
集え！ 千年王国のために……

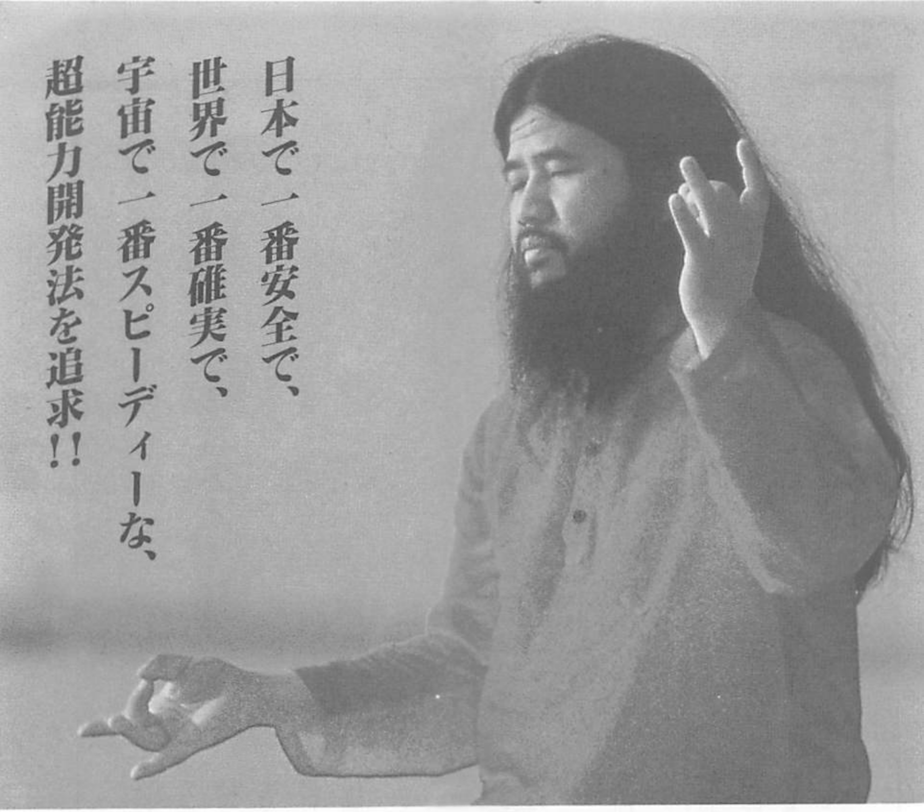
日々の生活に流され
本当に求める人生を
忘れていませんか。

世界でただ一人の最終解脱者
真理の御魂
最聖 麻原彰晃尊師が説き明かす
真実の法則が
本当の自由・幸福へと
あなたをいざないます。

新しい世界が
今まさに始まろうとしている
この時代に
新人類へと
進化の道を尊師と共に
歩んで……




宗教法人 オウム真理教
資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて
最寄りの本部・各支部までご連絡ください。
入会案内等、詳しい資料をお送りします。
(キリトリ)
亡国日本の
悲しみ
資料請求券



ザ・超能力秘密の開発法

真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著

超能力のつかない修行は、ニセモノだ!
自信に満ち溢れたこの言葉こそ、「絵に描いた餅」を超えた真実の証明。
アーサナ、調気法、瞑想、そして正しい生活を通じての秘密の超能力開発法
さらには多くの修行者たちの体験談に加え、
麻原尊師の貴重な修行手記まで一挙公開!
この本の真実をその身をもって実証するのは、ほかでもないあなた自身だ!!

B6版/定価1260円

オウム出版

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL 03 (3439) 6043

九日前に予言されていた阪神大震災！
——それは世紀末の日本に襲いかかる、
数々の恐怖と惨劇のプロローグにすぎない。
想像を絶する規模で忍び寄る戦慄の世紀末！
次に日本を襲うのは……？
この空前の危機が
あなたを呑み込もうとしている！



『報道写真全記録 阪神大震災』朝日新聞社

緊急出版！

日出づる国、災い近し

真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師著

B6版／定価1285円（税込み）

『日出づる国、災い近し』それは、正確な
近未来予言と、科学と神秘力に裏づけられた
確固たる対処法が記されている秘密の書。



全国の書店で絶賛発売中！

オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL.03（3439）6043 振替／東京2-109325

京都支部　075 (371) 3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
大阪支部　06 (251) 4264
〒541　大阪府大阪市中央区久太郎町3-2-15 マルイビル2F
堺支部　0722 (21) 1843
〒590　大阪府堺市海山町4-168-9
和歌山支部　0734 (24) 2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
広島支部　082 (264) 7252
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
高知支部　0888 (84) 8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
福岡支部　092 (474) 2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
那覇支部　098 (866) 9537
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
深谷出張所　0485 (74) 8143
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8

〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212 (421) 3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228) 616647
Auf dem Hügel 48, 53121 Bonn, S.R.Germany
スリランカ支部 (AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION)
Horahena, Watte, Angulugaha, Galle, Sri Lanka

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『亡国日本の悲しみ』読者係」までお送りください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
オウム出版 『亡国日本の悲しみ』読者係

◆各道場のご案内◆

富士山総本部
〒418-01 静岡県富士宮市人穴381-1
東京総本部 03 (5467) 2745
〒107 東京都港区南青山7-5-12 マハーポーシャビル2,3F
世田谷道場 03 (3327) 8565
〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
杉並道場 03 (3396) 9393
〒167 東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2F
札幌支部 011 (241) 4938
〒060 北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
仙台支部 022 (268) 3904
〒982 宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
水戸支部 029 (226) 8044
〒310 茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
髙崎支部 0273 (46) 1573
〒370-12 群馬県高崎市倉賀野町下稲荷前1081-5
船橋支部 0474 (66) 4965
〒274 千葉県船橋市新高根6-26-18
横浜支部 045 (243) 8079
〒231 神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
藤枝支部 0546 (46) 2068
〒426 静岡県藤枝市築地堤下11-5
松本支部 0263 (28) 7429
〒399 長野県松本市芳川野溝527-3
名古屋支部 052 (252) 0709
〒460 愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
金沢支部 0762 (51) 8457
〒920 石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
福井支部 0776 (26) 6145
〒910 福井県福井市御幸3-3-41 東伸ビル2F

亡国日本の悲しみ
一九九五年五月十八日　初版発行
一九九五年五月二十五日　第二刷発行
定価　一一九〇円
著者　真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師
発行者　松本知子
石井久子
発行所　株式会社 オウム
〒一五四　東京都世田谷区世田谷二ー八ー一七
電話　〇三（三四三九）六〇四三
振替　東京二ー一〇九三二五
乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

ISBN4-87142-114-7　C0014　P1190E